ISSN 0386－6009

サイコアナリティカル
英　文　学　論　叢
―英語・英米文学の精神分析学的研究―

第 39 号

The Journal of Psychoanalytical Study of English Language and Literature

No. 39

サイコアナリティカル英文学会

The Society for Psychoanalytical Study
of English Language and Literature

目　　次

1. T. S. エリオット―― Spiritual History ―― ……1
倉橋　淑子

2. “The Old People” にみる少年の成長 ……23
有働　牧子

3. *Almayer's Folly* の精神分析学的考察
――「反復」を視点として―― ……37
飯田啓治朗

4. *A Streetcar Named Desire* における Blanche の desire についての一考察‥49
平　恵理子

5. D･H･ロレンス『恋する女たち』をユング心理学で読み解く（Ⅱ）
――「救済ある結婚」と「個性化過程」―― ……71
森岡　　稔

6. *Pierre* ―― 福音主義に抗う Melville ―― ……99
佐々木英哲

7. SYNOPSIS ……121

8. 執筆者紹介 ……128

9. サイコアナリティカル英文学会会則 ……130

10. 『サイコアナリティカル英文学論叢』投稿規程 ……134

11. サイコアナリティカル英文学会の図書出版に関する規程 ……137

12. 編集後記 ……138
小園　敏幸

SYNOPSIS

1. T. S. Eliot —— Spiritual History —— ····· 121
Toshiko Kurahashi

2. The Growth in "The Old People" ····· 122
Makiko Udo

3. A Psychoanalytical Consideration of *Almayer's Folly*:
From the Viewpoint of "Repetition" ····· 123
Keijiro Iida

4. A Psychoanalytical Approach to *A Streetcar Named Desire* ····· 124
Eriko Taira

5. A Jungian Approach to D. H. Lawrence's *Women in Love* (II)
—— Marriage in the Process of Salvation and Individuation —— ····· 125
Minoru Morioka

6. Melville's *Pierre*: Resisting Evangelicalism ····· 126
Eitetsu Sasaki

T. S. エリオット
── Spiritual History ──

倉　橋　淑　子

本論稿の目的は、T. S. エリオット (Thomas Stearns Eliot) の家系を含む「生育環境」、「背景としての社会及び世界の動向等」を考慮に入れて彼の「思想形成の過程」について、主としてユング（C. G. Jung）を参照しながら検討、分析し、その到達点を明示することである。

方法としては、「思想の核」とも言うべき事項を取り上げ、それぞれに中心となる「テーマ」を設定している。具体的には年齢の推移に応じて以下の３段階に分けて論ずる。

【Ⅰ】Desiccation of Sensitivity (1888-1922)

【Ⅱ】Anglo-Catholicism and Naturalization (1922-1939)

【Ⅲ】Equilibrium of Sensibility (1939-1965)

とする。上記の表題は、【Ⅰ】及び【Ⅱ】については、日本語では表記しにくい「言葉の微妙なニュアンス」もあって英語表記としているが、敢えて日本語表記をすれば、【Ⅰ】情緒的・機能的感（受）性の解体、【Ⅱ】はアングロ・カトリシズムへの改宗とイギリスへの帰化　【Ⅲ】芸術（文学・哲学等）・宗教に関する感（受）性の均衡となる。

ユングは自身の spiritual history を語る時、常に幅広いそして深い洞察力のもと、ヨーロッパの現状を背景としていた。特に芸術―文学についてはシェイクスピア (William Shakespeare)、哲学ではハイデガー (Martin Heidegger)・ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel) など、―精神分析学で言えば当然のことながらフロイトやラカンにも言及している。その幅広い教養はエリオットにも共通するもので、エリオットは詩人・劇作家・評論家、そして実業家として多方面で活躍したが、とりわけ哲学への関心が高かっ

た。時代背景として二人に共通するものは、戦時下、もしくは戦争と戦争の間の期間を生きたということ、つまり心理的抑圧の時代を生きた、ということである。

以下、エリオットの spiritual history について、既に述べた３段階に分けて考察する。

【Ⅰ】Desiccation of Sensitivity (1888-1922)

エリオットは、アメリカ　ミズーリ州のセントルイスの由緒ある知識階級の家系に生れ、幼少期をミシシッピ河畔の家で暮らした。大学はニューイングランドのマサチューセッツ州ボストンにあるハーバード大学、その後フランスのソルボンヌ大学、ドイツのマールブルク大学、イギリスのオックスフォード大学へと留学（短期講座を含む）している。彼の知識欲の旺盛なことは、勿論留学の動機とは言え、この頻繁な場の移動には、違和感を覚える。後年、彼が発症した「神経症」のため、転地療養をした場所が殆ど「海辺」「湖」など水辺近くであったことを除けば、場所を転々としていたことと共通していると思われる。彼の頻繁な場の移動は、「知」を求めてのものであったと同時に、「心の平穏」を求めての spiritual pilgrimage でもあったといえよう。ユングは「個性化の過程は、しばしば見知らぬ国を発見するための旅によって象徴化される。このような旅は、ジョン・バニヤンの『天路歴程』あるいはダンテの『神曲』にもあらわれている。ダンテの“旅人”は道を探し求め、一つの山の下まで来て、それに登ろうとする。」[1] と言う。尚、エリオットの生来の真面目で、「伝統」を重んじる―祖先への敬愛の念を持つ、読書に親しむ―といった姿勢は、その出自に負うところが大きいが、併せて “high minded and plain living’ を旨とする知識階級出身の母の教育方針、‘to perfect themselves each day’ ‘to make the best of every faculty and control every tendency to evil” [2] という教えも、後年のエリオットの自己に対する規制、nervous な程の自己確認の要

請という傾向と無縁であるとは言えない。このことに関連して河合俊雄は次のように説明している。

> ユング（C. G. Jung）における無意識は個人の過去における抑圧されたものにとどまらず、個人を越えたいわゆる「集合的無意識」なのである。そうするとユングの生涯を無意識の自己実現として考える場合にも、狭い意味での個人史と捉えるわけにはいかないであろう。ユングにおける無意識の自己実現とは、ユングの個人的無意識を越えて、ヨーロッパの歴史やひいては人類史にまで広がるのである。[3]

翻ってエリオットの場合を考えると、このユングの「自己実現」の考え方は、エリオットの「現実不安」[4] を説明するものでもある。エリオットのヨーロッパに向けられた眼―国の根幹を支える ‘culture’ に向けられた眼の背景として、不穏な世界状勢がある。つまり、第一次世界大戦（1914 － 1918）及び「ファシズム」台頭の動きもあった、その中でエリオットも U. S. Forces に応募したが、健康上の理由で果たせなかった。この戦争で彼は、ソルボンヌ大への短期留学中に無二の親友ともなったヴェルドナルを失った。戦死であったこともエリオットの心の大きな傷となった。1917 年出版されたエリオットの最初の詩作品 *Prufrock and Other Observations* の献辞はヴェルドナルに宛てられたものであった。この作品は虚無と悲嘆に満ちた内容である。この源は、「戦争」である。この詩の主人公「プルーフロック」は、若くして老人である。即ち、“I grow old. . . . I grow old. . . . / I shall wear the bottoms of my trousers rolled.” 又、最後の “We have lingered in the chambers of the sea / By sea-girls wreathed with seaweed red and brown / Till human voices wake us, and we drown.“ ユングの所謂「救いの象徴としての海」は溺死の場としてうたわれ、我々はそこに深い絶望を読み

とる。因みにヴィヴィアン（Vivien Haigh-Wood）との突然の結婚は 1915 年であった。喪失による悲嘆を埋めようとした、この性急な結婚は、夫と妻両方にとって生涯の悲劇であった。しかし、このような時にあっても、エリオットの思索は深く、1919 年、『伝統と個人の才能』（*Tradition and the Individual Talent*）が『エゴイスト』誌上に発表された。この作品については平井正穂は次のように述べている。「『伝統と個人の才能』は第一次世界大戦の戦中・戦後のヨーロッパの精神状況を背景にした１つの文学的マニフェストとして眺めるべきものと私は思う。」[5] この作品には、エリオットの「伝統」と「歴史認識」という生来のテーマが一貫して流れている。勿論それは彼の出自、幼少時の読書中心の生活、そして何よりも彼の思考力及び知的探究心によるものである。反面、彼は同年代の子供たちとの交流は少なく、「大人の世界」の中で過ごすことが多かったことも、彼の神経質な、行き過ぎた繊細な、いわば ‘sensitive’ な傾向を一層強めることになった。又、エリオットが性急に結婚した妻ヴィヴィアンは、結婚後しばらくして「神経症」を発症した。エリオットは、心のより所としての「人」を求め続けた。しかし、ユングの言う「元型」は決して具体的な「人」、「物」で表し得るものではなくて「人間の心の中で作用している内的イメージを意味するもの」[6] である。続いてユングは「この無意識のもつ力動的要素は、これに支配される人間に対して、つねに強制する性格、強い情緒的要素を伴うものである。」[7] と言う。例えば、東洋では「仏教」の薬師如来像、西洋では「キリスト教」のマリア像で象徴されるもの、と言われているのも首肯できるところである。しかし、この時点でエリオットは、「元型」としての「マリア像」に至ることはなく、彼自身も神経を病んで転地療養をすることとなった。やがて、療養の地マーゲート（英）、ローザンヌ（スイス）で読者に、彼がささやかな光を見出したことを伝える作品『荒地』（*The Waste Land*）を発表した。この作品は、『四つの四重奏』(*Four Quartets*) と並んで彼の思想の転機を示す重要な作品であり、又

‘Desiccation of Sensitivity’ から脱却して ‘Sensitivity’ の平衡を予告する作品でもある。一貫したテーマは「死」と「再生」である。因みに作品の冒頭は、次の通りである。

I. The Burial of the Dead

April is the cruellest month, breeding
Lilacs out of the dead land, mixing
Memory and desire, stirring
Dull roots with spring rain.

これは人間を含めて、全ての生あるものの「誕生」の否定である。それは以下の詩の展開を見れば明白である。例えば、次の通りである。

Unreal City,
Under the brown fog of a winter dawn,
A crowd flowed over London Bridge, so many,
I had not thought death had undone so many.
Sighs, short and infrequent, were exhaled,
And each man fixed his eyes before his feet.

これは早朝のロンドン橋を渡って霧の立ちこめる中を出勤する人の群れである。皆足元を見つめて歩いている。これは正に「死者」の行進である。現代人の不毛を表す「象徴」である。Ⅱの ‘A Game of Chess’ では酒場の女たちが会話をしている。

My nerves are bad to-night, Yes, bad, Stay with me.

> Speak to me.
> Why do you never speak. Speak.
> What are you thinking? What?

ここでは人間関係が希薄で、言葉も存在しない。Ⅲの ‘Fire Sermon’ には、やや「祈り」にも似た言葉が発せられる。IV．Death by Water では、又、「救い」の象徴である「水」で人が溺死する。V．What the Thunder said は最終章である。雷が鳴り響く。ユングによれば、「雷」は神の到来の予兆もしくは到来である。実際、ユングの死後数時間たって雷が鳴り響いた、という。救いの象徴である ‘swallow’ が飛び、祈りの言葉で終わる。

Ⅰ～Ⅴまでの過程を経て、Sensitivity は integration の方向へと向かい始めたとの確信が持てる。

ここでエリオットの Sensitivity が desiccate される要因と考えられる個人的・社会的背景について付記する。既に述べたようにエリオットの誕生地セントルイスは、ミシシッピ河に近く、彼は愛すべき故郷として心に抱き続けたのは、「河」であった。しかし、次の引用文に見られるようにセントルイスの町は、必ずしもエリオットの心に馴染むものではなかった。

> In St. Louis the moral law of William Greenleaf Eliot was ousted by the motive of profit, and in 1902 the city’s corruption was scandalously exposed. Eliot was sensitive to the monotony that resulted from immense industrial expansion at the end of the nineteenth century and to the loss of the native (New England) culture to a new America in which, as he put it, Theodore Roosevelt was a patron of the arts.[8]

急速な経済活動の進展、産業化では、資本主義の論理が優先する。それは、エリオットの Sensitivity に一層の打撃を与えた。次の説明は、現代の

我々にも通ずる論理である。

> マルクスが資本主義における賃労働のあり方に私たちの「居心地悪さ」の原因を見出したとするなら、ラカンは資本主義における享楽のあり方にそれを見出したと言えよう。この視座から見るなら、私たちは資本主義の奴隷であるのと同程度に、剰余享楽の一種の奴隷となっていると言える。[9]

当時の資本主義が今日の「資本主義」と様相が異なるとは言え、基本的には同じ原理であろう。消費優先の社会にあって、人は常に「新しいもの」を求めたがる。意識するとしないに拘わらず、その行動は繰り返される。ラカンは「精神分析」を、「資本主義からの出口として位置づけ」[10]、例えば「新型うつ」などと呼ばれる病もその一連として捉え、多くの治療的実践で成果を上げている。

以上述べたようにエリオットは、個人的・社会的、そして彼の生きている時代の様々な不安要因を、『荒地』を完成させたことで昇華する糸口を見出した、と言えるだろう。

【Ⅱ】Anglo-Catholicism and Naturalization (1922-1939)

最初に、この期間の世界・社会情勢について概観する。1918 年に第一次世界大戦は終結したが、ヨーロッパの不穏な政情は続いていた。文化的活動としては、1922 年にジョイス（J. Joyce）が『ユリシーズ』を発表している。一方、1925 年には、ヒットラーの『わが闘争』が出版され、同年にはフロイトの『自らを語る』、26 年にはユングの『分析的心理学と教育』等が次々と発表され、彼の社会的地位は確立しつつあった。しかし、ヒットラー内閣が成立するに及んで、「精神分析」の関係書物は禁書となった。しかし、その後も第二次世界大戦（1941 ～ 1945）の前までは精神分析学

を始めヨーロッパ諸国における哲学・文学等の分野では優れた思想書・文学書（小説、詩など）が次々と出版された。エリオットが多大な影響を受けたボードレールを始め多くの詩人、小説家、哲学者等を輩出したフランスでは、この傾向は顕著であった。サルトルの『存在と無』、カミュの『異邦人』は戦争による恐怖、差別等を訴えている作品である。彼らの、作品で展開した人間の心理は国籍を問わず一般の多くの人々が共有したものでもあった。

ここで、アルベール・カミュを一例として考察する。彼は 1913 年～1960 年を生きた小説家で、当時フランスの植民地であったアルジェに生まれ、その地で生き続けた作家である。エリオットとほぼ重なる時代であるが、その出自は全く異なる植民地出身者として貧しい暮らしぶりであり、エリオットとの共通点といえば、人生の辛い問題から決して逃げなかった、ということであろうか。エリオットは、豊かな家庭に生まれたとはいえ、既に述べたように、彼はセントルイスでは感覚的に「異邦人」であった。エリオットの後年の「居場所探し」はこの時代に既に始まっていたと推測される。カミュは生涯、「アルジェ＝植民地出身」として多くの差別と貧困の中で生きたが、主人公「ムルソー」（著者カミュ自身）にとって「母」は（ママン）神、「太母」のイメージで語られ、「自然」、「太陽」がカミュ（作品中の「ムルソー」）の最大の精神的支柱でもあった。エリオットが後に Anglo-Catholicism の信徒として生きたこと、「ユングが曲折を経て彼自身の「マンダラ」絵図を完成したこと」[11] も、それぞれの道程を経て到達した境地と言えよう。

「戦争」がもたらす広汎な厳しい不安、抑圧の中でエリオットは、私的にも様々な問題を抱え、自分自身と対峙し続けたが、『荒地』の完成を機に大きな決断をした。即ち、1927 年、彼は唐突に、生来のユニテリアン（Unitarian）からアングロ・カトリック（Anglo-Catholic）に改宗し、英国国教会の一員として受け入れられ、続いてイギリス国籍へと転じた。続

く 1928 年、彼は、「文学」「政治」「宗教」における彼の立場を明確な形で公表した。私的なことを公にすることを嫌うエリオットが堂々と announcement をしたことは、周囲の人々を驚かせたし、受け入れ側も賛意を表する者が多かったとは言え、賛否両論であった。2 番目の妻ヴァレリー（Valerie、以前から長くエリオットの秘書を務めた女性）の編纂による *For Lancelot Andrewes* には、エリオット自身の署名のある ‘Preface’ の中に次のように書かれている。

> The general point of view may be described as ‘classicist in literature, royalist in politics, and anglo-catholic in religion.’ I am quite aware that the first term is completely vague, and easily lends itself to clap-trap; I am aware that the second term is at present without definition, and easily itself to what is almost worse than clap-trap. I mean temperate conservation; the third term does not rest with me to define.’ [12]

いずれにしても前年の性急な Conversion と Naturalization を自分自身に納得させること、そして多くの人々に、イギリス人としての自分、国教会の教徒である自分を受け入れ又‘認識して欲しいという焦りがあったのではないか。後に述べる ‘Negative Capability’ の状態でいることの苦痛・不安から解放されたい、という願いが強かったのではないか。その後のエリオットの状況についてゴードン（Lyndall Gordon）は次のように説明している。

> Eliot saw in the English Church decency, common sense, and a capacity for compromise that, he felt, might provide a proper corrective to the faddist modern mind. He deplored the kind of lazy, facile mind that advocated ruthless reforms and leapt across all existing reality to some utopian ideal—through fascism or communism—what he called‘the gospels of

this world.’ [13]

時を経るにつれ、エリオットのアングロ・カトリシズムへの信仰は深く確固たるものになり、1930 年出版の『聖灰水曜日』（*Ash- Wednesday*）は、瞑想的な雰囲気に満ちた「宗教詩」である。「聖灰水曜日」は、信者が断食をし、罪を悔い、神の許へと向かう日である。
題名の示す通り、この詩の内容もひたすら神への祈りに終始している。正に「祈りの詩」である。
ユングの「象徴」の視点から、この詩を読むと、例えば次のような詩行があることに気付く。

［I］Under a juniper-tree the bones sang, scattered and shining
We are glad to be scattered, we did little good to each other,
Under a tree in the cool of the day, with the blessing of sand,
Forgetting themselves and each other, united
In the quiet of the desert.（下線は筆者）

「木」は再生のシンボルであるが、‘juniper-tree’ は、「死から再生へのシンボル」として用いられている。尚、‘yew tree’ は「死のシンボル」として用いられる。
［Ⅵ］では、次のシンボルが使われている。

And the lost heart stiffens and rejoices
In the lost lilac and the lost sea voices
And the weak spirit quickens to rebel
For the bent golden-rod and the lost sea smell
Quickens to recover. . . .（下線は筆者）

ここでは「生命・再生・救い」などの「象徴」である「花」や［海］が ‘lost’ であり、‘bent’ の状態であるが、それらが再生され、「生命」を吹き返すと共に人間の ‘heart’ や ‘spirit’ も「再生」の兆しを見せることが語られ、次に示す祈りの詩行で終わっている。

Teach us to sit still
Even among these rocks,
Our peace in His will
And even among these rocks
Sister, mother
And spirit of the river, spirit of the sea,
Suffer me not to be separated

And let my cry come unto Thee.

『聖灰水曜日』という作品はエリオットの「英国国教会」の信徒としてのまたアングロ・カトリックの信者としての揺るぎない姿勢を示している、と言えよう。

尚、1930 年、『聖灰水曜日』が出版された当時のユングの立場について簡単にふれておきたい。1930 年代は、特にドイツでは、民主的ワイマール共和国が崩壊してヒットラーの独裁体制が成立して、ヨーロッパ全体が不穏な空気に包まれていった第二次世界大戦前の、そして勿論開戦後は言うに及ばずヒットラーの「ユダヤ人迫害」問題がある。この問題について河合俊雄は次のように説明している。「この問題が複雑なのはフロイト及びフロイトの多くの弟子がユダヤ人であり、そこから決裂していったユングが精神分析運動の中で例外的にユダヤ人でないということのためであ

る。」[14] 多くのユダヤ人精神分析学者たちはウイーンを離れてアメリカへ逃避したという。しかし、ユングは戦争前も戦中も、ヨーロッパ人全体の問題を mass として扱うのではなく個々人として心理療法に専念した。

【Ⅲ】Equilibrium of Sensibility (1939-1965)

1919 年に出版された『伝統と個人の才能』（*Tradition and the Individual Talent*）は『文化のための覚え書』（*Notes towards the Definition of Culture*, 1948 出版）と並んでエリオットの思想の根幹を示す優れた評論である。とりわけ「伝統」について彼はそれを、「常に変わりゆく要素を持つ」とし、その中に「過去」と「未来」を包摂した形で、「現在あるもの」と捉えている。従って逆説的に言えば「過去の伝統」があってこそ「現在」であり、「未来」である、とする。「時」と「伝統」はエリオットの主要テーマであり、それはこれから取り上げる『四つの四重奏』の根幹をなすテーマとなっている。

ここでエリオットが共有するイギリスの「思想動向」について触れておきたい。宇野重規は、著書『保守主義とは何か　フランス革命から現代まで』の中で、次のように述べている。

> 英国保守主義の基本的な問題意識を形成したのは、むしろ文学者、あるいは文人たちであったとし、20 世紀英国の保守主義を論じるにあたって、まずは詩人、文芸評論家として名高い T.　S.　エリオット（1888 － 1965）の作品にふれてみることに意義があるだろう。[15]

更に、「伝統とは過去から未来への継承であり、たえず自らを革新する運動である」[16] と述べている。これは、1928 年の ‘triple announcement’ の 1 つ ‘Conservative in politics’ と関連している。

彼の思想傾向を確認した上で、詩作品としては最後の、そして最高の「芸

術と宗教との調和」を示す『四つの四重奏』(1944) を取り上げる。1948 年、エリオットは「ノーベル文学賞」を受賞している。尚、本作品でユングの「象徴」及び「夢分析」の証左ともいえる具体的な「詩行」にも当たって考察する。

『四つの四重奏』は題名が示す通り四つの楽曲からなる。即ち、〈Ⅰ〉「バーント・ノートン」(‘Burnt Norton,’ 1936)、〈Ⅱ〉「イースト・コウカー」(‘East Coker,’ 1940)、〈Ⅲ〉「ザ・ドライ・サルヴェイジェス」(‘The Dry Salvages,’ 1941)、〈Ⅳ〉「リトル・ギディング」(‘Little Gidding,’ 1942) であるが、アメリカでは 1943 年、イギリスでは 1944 年に完成本として出版されている。〈Ⅰ〉〜〈Ⅳ〉は全て場所の名である。

〈Ⅰ〉「バーント・ノートン」はイギリスのグロースターシャーにある古い荘園の名で、今は荒廃した庭園である。ここでは「時」と「永遠」がテーマであり、このテーマは、『四つの四重奏』全体のテーマでもある。

この庭園には、「時」を超えて ‘vision’ が住む。ここでは広汎な哲学的命題が呈示されている。例えば、冒頭の “Time present and time past / Are both perhaps present in time future, / And time future contained in time past.” も「時」に関しているものでエリオットの思想の基幹である。この古い荘園に、「私」は鳥の案内で ‘rose garden’ へと入って行く。そこには ‘drained pool’ があった。しかし、我々が近づくと変化が起こる。

> And the pool was filled with water out of sunlight,
> And the lotos rose, quietly, quietly,
> The surface glittered out of heart of light,
> And they were behind us, reflected in the pool.
> Then a cloud passed, and the pool was empty.

「水」、「光」そして「鳥」は全て「心の平安」をもたらす「象徴」である、

とユングは言っている。‘lotos’ は「蓮」、佛教では釈迦如来や佛が座る台座を表している。「台座」は佛の一層の神聖化をもたらす、とされている。しかし次の瞬間、雲が出て ‘glitter of light’ は消え、ため池は元の ‘drained pool’ になってしまう。救いの曙光は一瞬時のものであり、鳥の姿も消えた。一方、ユングが自分で見た夢について次のように語っている。

> 私は汚い、すすけた町にいた。冬の夜で暗く、雨が降っていた。私はリバプールにいた。―中略―その場所には多くの街路が集まってきていた。町のいろいろな部分はこの方形の広場の周りに放射状に配置されていた。中央には円形の池があり、その中央に小さい島があった。その小さい島は陽の光で輝いていた。島の上には一本の木、赤い花ざかりの木蓮が立っていた。それはあたかも木蓮が日光のもとに立っているし、同時に光の源であるかのようであった。[17]（下線は筆者）

この夢を見たユングは、自分がゴールに接近していることを知った、という。後にユングはリバプールで見た池を「命の池」と名付けた。先に述べたようにエリオットが「バーント・ノートン」で描く「陽光に輝く水面を湛えた pool 」はユングの「命の池」であり、エリオットの「水蓮」（lotos）はユングにあっては「木蓮」となっている。２語とも「蓮」であり、宗教に縁のある花である。「水面を照らす光」も両者に共通である。「象徴」が、そして「状況」も酷似している。ユングがこの夢を見て、「ゴールが近い」と言ったことは、エリオットも又 spiritual pilgrimage の終着点、‘Equilibrium of Sensibility’ の境地に近いことを悟ったのだと思われる。ユングは「命の池」の夢を見た時の自分の心の状態について、次のように述べている。

> この夢は、そのころの私の状態を表現していた。私は今でも雨にぬ

> れてきらきらしているくらい黄色のレインコートを眼に浮かべることができる。すべてのことが不快で黒く、くすんで―ちょうど私がその頃感じていたような感じであったのだ。[18]

このような状況は、「バーント・ノートン」を書いていた当時のエリオットの心境に近いものであった、と言えよう。

〈Ⅱ〉「イースト・コウカー」はエリオット家の祖先の地である。伝統を重んじるエリオットにとって、極めて重要な地である。1670 年祖先の（初代の）アンドルー・エリオットがここを発ってアメリカへ移住したと言われている。ここでは、生死の循環、暗闇（darkness）等が「時」の流れの中で語られる。‘darkness’ の繰り返しが目立つが、この手法は「真の闇」に至り、そこから始めて「神の光」に至ることができる、というエリオット独自の思想を見てとれる。初期の「絶対的な絶望」がもたらす「暗闇」と異なる。ユングあるいはその患者が「暗闇」を主訴とした「夢」を分析することによって、それは「治癒」に至る「必然の闇」であることが理解できる。エリオットの言う「暗闇の世界」は、次のように描かれている。“I said to my soul, be still, and that the dark come upon you / Which shall be the darkness of God,” これは、先に述べたユングの夢分析と同じ、治療に至る道への考え方であり、一つの方法論である。又、ユングの所謂「聖なるもの」、「救いに至る道」等としてあげている「象徴」は、正にユングの言う意味で、エリオットの詩に多用されている。例えば、‘light’,‘early owl’ , ‘rose’ , ‘love’ , ‘sun and moon’ 等であり、それらが詩の意味を深くさせることに成功している。

〈Ⅲ〉「ザ・ドライ・サルヴェイジェス」は、正に「石」、「岩礁群」が主役である。題名そのものが、既述の通りマサチューセッツ州のアン岬の「海の沖合」であり、その中にある岩礁群である。「ごつごつした自然の石」は神のすむ所であるとユングは言う。ストウンヘンジの巨石柱、石庭にお

ける石、その他、神話や文学作品等の「石」もユングの「象徴」として扱われている考え方と不可分のものであろう。「ザ・ドライ・サルヴェイジェス」の主要テーマは、岩礁群、そして海である。「海」は「救い」の象徴であることは勿論であるが、ここでは様々な顔を持つ。冒頭には “but I think that the river / Is a strong brown god-sullen, untamed, and intractable,” とあり、「川」は人生の１コマを表している。その他にも、‘The sea yelp’ など烈しい海の咆哮が続く。しかし、その中にあって “And the ragged rock in the restless waters, Waves wash over it, fogs conceal it; / On a halcyon day it is merely a monument, / In navigable weather it is always a seamark.” とあり、「ごつごつした岩」は海の穏やかな日々は、航行する船の標識となり、そうでない日は、いつもただそこに「存在」している。どんな時にも「岩」は、揺るぎない存在であり続ける。

O voyagers, O seamen,
You who came to port, and you whose bodies
Will suffer the trial and judgement of the sea,
Or whatever event, this is your real destination.

全てを神に委ねる‘ real destination ’ 到達への旅は、ひたすらに祈りの世界である。

〈Ⅳ〉「リトル・ギディング」は『四つの四重奏』の総括として「全てを神に委ねる」悟りの世界を描き出している。ヘンダーソンは、人生の転機の重要な事項として「イニシエーション」をあげているが、彼はその例としてエリオットの『荒地』から「かの畏るべき果断、一瞬の挺身　／不惑の千歳も遂に撤回し能わざる――」（深瀬基寛訳）[19] を引用している。この決断があったからこそエリオットは、「リトル・ギディング」の静謐の極まる信仰に至ることが出来たと言える。また、ここでは「象徴」とし

て「火」、「焔」そして「バラ」という言葉が用いられている。「火」、「焔」は、「浄化の火」として宗教の視点で取り扱われている。「焔」も同列の言葉であるが、とりわけ当時の「ロンドンへの空爆」への特別の感情もこめられていると推測される。又、‘ rose ’ は、‘ yew tree ’ の対立概念としての「生の時」を表現している。

次の詩行は、「リトル・ギディング」の最終行であると同時に『四つの四重奏』全体の、そして更に言えば「詩人」としてのエリオットの最後の「メッセージ」であると言えよう。

And all shall be well and
All manner of thing shall be well
When the tongues of flame are in-folded
Into the crowned knot of fire
And the fire and the rose are one.

この詩は、‘spiritual history’ の ‘sacred destination’ を示すものであり、‘Equilibrium of Sensibility’ 達成の証左でもある。因みに、Kazuo Ishiguro は ‘equilibrium’ を次のように用いている。“After all, if a community could reach some sort of an equilibrium without having to be guided by an outsider, then so much the better,” [20]（下線は筆者）

エリオットは、『伝統と個人の才能』（1919）でも明示しているように、「伝統」という概念は、その後の彼の全ての作品に通底している重要な要素である。エリオットの言う「伝統」は単なる「過去の遺産」ではなく、その中に「現在」と「未来」を包摂するものであり、当然、「絶えず変化する」要素を内包し、それによって「止揚される」概念である。

この「伝統」に関する概念を布衍して、従来の伝統的「精神分析学的考

察」に現代社会の動向、要請等、新しい視点を加えていくことは今後のエリオット研究(他の作家も含めて)の多様化、重層化に必須の要件であろう。例えば、後述する「ネガティブ・ケイパビリティ」という概念の導入、或いは今日、様々な学問分野で推進されている「学際的研究」の動向への関心を深めることなどである。上記の傾向に関連し、「現状と将来展望」について触れておくこととする。

精神分析学の現状と展望

世界が国境を越えて、人的・物的に共存することが益々必要な現状にあって、学問・研究の分野も例外ではない。実際、既に学問領域の壁は取り払われつつある。

例えば、従来の「標準的経済学」に対して「行動経済学」という新しい視点を持った「経済学」が誕生した。つまり「人間は、経済活動に当たって'利益'に最高の価値を置く、という視点からもっと多様な価値観をもって経済活動を行っているのではないか」という視点の導入である。

> 行動経済学は誕生以来現在までにまだ30年ほどしか経ていない若い学問なのである。～経済学で長年に亘り蓄積されてきた理論に認知心理学の成果を取り入れて改良するというのが行動経済学の目指す方向であって・・・。[21]

「経済学」の分野における「精神分析学」の有効性が認められている。

更に、社会の動向と精神分析学の有効性に関わる例をあげて検討したい。我々はビジネスの世界では勿論、一般の社会生活で様々な形で「決断」を迫られる。必ずしも「即断即決」というわけにはいかない場合も多い。「多様な価値観」を認めながらも、「効率」が「絶対的価値観」として通用しがちな現在、精神的に重圧を感ずる場合、それが過度になった場合我々はどう行動し、自分を追い詰めない方法を見出せばよいのか。

‘Negative Capability’ という方法が呈示されている。この語は次のように定義される。「負の能力もしくは陰性能力であり、どうにも答の出ない、どうにも対処のしようのない事態に耐える能力」[22] である。著者の 帚木蓬生は精神分析学者であり臨床医でもある。又､同時に文学者としてキーツ（J. Keats）やシェイクスピア（W. Shakespeare）などにも精神分析学の立場から言及している。「ネガティブ・ケイパビリティ」の考え方は、我々が精神分析学的研究をする時に役に立つ方法論の一つと言えよう。本稿で言えば、‘Desiccation of Sensitivity’ からの回復に至る研究の強力な理論構成に有用である、と思われる。

最後にラカン（J. Lacan）についてふれておきたい。彼は哲学者であり、精神分析家である。ラカンが活躍したのは主として 1970 年代である。当時の「現代」と今日われわれが生きる「現代」はかなりずれがあるとしても後期ラカン派及びその後の精神分析家の理論は充分通用すると思われる。

次に『享楽社会論』から引用する。

> 現代は、「父」＝資本主義への信頼とそれが生み出す包摂はもはや機能する必要がなく「数値目標」と「コンプライアンス」の名の下に設定された禁止事項の羅列が排除の脅しのもとに労働者を取り囲みさえすれば、秩序は維持されていくのである。[23]

この排除の社会にあって、「享楽社会」が大きな課題として出現するのは必然である。この課題の解決は、ユングが最後に遺した言葉「人間は完全より‘全体性’を」の本意を具現化していくことに尽きるだろう。

今後、精神分析学の及ぶ範囲は広汎になり、様々な学問研究に波及し又現場で、より成熟した社会の実現のために活用され、力となることと思われる。

Notes

1 C. G. ユング、J. L. ヘンダーソン他　河合隼雄監訳『人間と象徴　無意識の世界　下』（東京：河出書房新社、1975）、p. 215.
2 Lyndall Gordon, *Eliot's Early Years* (Oxford: Oxford University Press, 1978), p. 2.
3 河合俊雄　『ユング　魂の現実性』（東京：岩波書店、2015）、 p.5.
4 ラプランジュ / ポンタリス　村上仁監訳『精神分析学用語辞典』（東京：みすず書房、1982）、pp. 113-114. 参照。
5 訳者代表　深瀬基寛　『エリオット全集』第五巻（東京:中央公論社、1981）、p. 391.
6 エリッヒ･ノイマン　訳者代表　福島章『無意識の女性像の現象学　グレート･マザー』（東京：ナツメ社、1989）、p. 19.
7 *Ibid*., p. 20.
8 Gordon, *op. cit*., pp. 13-14.
9 松本卓也　『享楽社会論現代ラカン派の展開』（京都：人文書院、2018）、ｐ. 88.
10 松本、*op.cit*.,p. 91.
11 C. G. ユング　秋山さと子・野村美紀子共訳『ユングの人間論』（東京：思索社、1988）、p. 216.
12 T. S. Eliot, ed. Valerie Eliot, *For Lancelot Andrewes* (Glasgow: R. Maclehose ＆ Co. Ltd, 1970), p. 7.
13 Gordon, *op. cit*., p. 135.
14 河合、op. cit., p. 182.
15 宇野重規『保守主義とは何か　フランス革命から現代まで』（東京：中央公論新社、2016）、p. 67.
16 *Ibid*., pp. 68-70.
17 C. G. ユング　ヤッフェ編　河合隼雄他訳『ユング自伝―思い出・夢・思想―１』（東京：みすず書房、1990）、pp. 281-282.
18 *Ibid*., p. 282.
19 C. G. ユング、J. L. ヘンダーソン他　河合隼雄監訳『人間と象徴　無意識の世界　上』（東京：河出書房新社、1992）、p. 241.
20 Kazuo Ishiguro, *The Unconsoled* (London: Faber and Faber, 1995), p. 524.
21 友野典男『行動経済学　経済は「感情」で動いている』（東京：光文社、

2009)、pp. 35-36. 参照。

22　帚木蓬生『ネガティブ･ケイパビリティ　答えの出ない事態に耐える力』(東京:朝日新聞社出版、2017)、p. 3.

23　松本、op. cit., p. 19.

尚、本文に引用した T. S. エリオットの詩は、*The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot* (Faber ＆ Faber, London, 1969) に拠った。

“ The Old People ”にみる少年の成長

有　働　牧　子

William Faulkner の短編 “The Old People” は、1940 年 9 月に雑誌 *Harper's* に掲載され、それをさらに書き直したものが *Go Down, Moses*（1942）に収められた。この作品の一般的な見方は、アメリカ先住民・黒人・白人の３つの血を引く老人 Sam Fathers との交流を通した、白人の少年 Isaac McCaslin（Ike）のイニシエーションを描いているというものである。

ただ、このイニシエーションについて、“miseducation” とか “misleading” と評する批評家も少なくない。その一例として、Michael D’Alessandro は、*Go Down, Moses* に収録されているその他の短編で描かれる Ike のその後にも触れながら、Ike の精神的な導き手となる Sam Fathers について次のように述べている。

> As successful as [Ike] was a child of the wilderness, he is as much a failure as a father outside of it. Against the disappearing forest and his own lack of fertility, he can only wander between the two realms without an identity or a legacy. He remains at once the Native American retreating into the wilderness and the carpenter relying on the system to chop the trees down. Whether Ike becomes a white man performing the Indian or an Indian masquerading as white, he belongs, in alternating memories, to both worlds but wholly to neither.[1]

Ike は、自分の身内や同じ人種の人々が築き上げてきたレールの上を歩むのではなく、Sam との交流や森の中での狩りをきっかけに別の世界に惹かれていった。確かに、Ike が惹かれた対象に注目すれば、それは白人の

価値観や偏見によって歪められた「見せかけ」のものに過ぎない。本作のように、現代文明と対比しながら、アメリカ先住民を美化する傾向が伝統的にアメリカ文学に見られることはよく知られている。よって、Sam が混血であることと合わせてこの事実を想起するならば、Ike は “mislead” されたという解釈は妥当である。しかし、Ike が、そのような「対象」ではなく、Sam の象徴的な語りの「行為」になんらかの真価を認めたとすれば、解釈は違ってくるのではないか。本稿では、Sam Fathers と Ike との交流を分析しながら、Ike が成し遂げた “misleading” でも “miseducation” でもない成長について考察したい。

１．老人 Sam と少年 Ike の共振

Sam の祖先が登場する “Red Leaves” などの内容も総合してまとめると、Sam は、かつて土地を支配していた先住民の部族・チカソー族の首長と、白人と黒人の混血で奴隷である女性との間にできた子供だった。ところが、妊娠中に母親はその首長によって別の奴隷の男と結婚させられたので、結局は奴隷夫婦の息子として生まれた。この複雑な出自が「Sam Fathers ＝複数の父親（Some fathers）」という名前の由来である。こうした出自ゆえに、Sam は、征服者と被征服者、さらには奴隷とその所有者との狭間で生きることを余儀なくされた、孤高の人物であった。

> The boy first remembered him as sitting in the door of the plantation blacksmith-shop . . . even with the shop cluttered with work which the farm waited on, Sam would sit there, doing nothing at all for half a day or a whole one, and no man, neither the boy’s father and twin uncle in their day nor his cousin McCaslin after he became practical though not yet titular master, ever to say to him, “I want this finished by sundown” or “why wasn’t this done yesterday?”[2]

> White man's work, when Sam did work . . . although Sam lived among the negroes, in a cabin among the other cabins in the quarters, and consorted with negroes . . . and dressed like them and talked like them and even went with them to the negro church now and then, he was still the son of that Chikasaw chief and the negroes knew it.（169-70）

このような微妙な人種の狭間で生きる年老いた男 Sam と白人の少年 Ike は、一見何の接点もないようであるが、年の離れた従兄弟の McCaslin などと同様ハンターになるべく、狩りをその初歩から教わることで交流をはじめる。このはじまりを考えると、白人の男のたしなみとしての狩りがそもそものきっかけなので、Ike はそのまま Sam を通して白人の価値観を身につけていってもおかしくはなかったはずであるが、そうはならなかった。子供と大人の狭間にいたと言ってよい Ike は、やはり狭間で生きる Sam のうちに、二項対立の社会の隙間にあるもの、すなわち白人にも黒人にもない何かを見出していたのである。

> In the boy's eyes at least it was Sam Fathers, the negro, who bore himself not only toward his cousin McCaslin and Major de Spain but toward all white men, with gravity and dignity and without servility or recourse to that impenetrable wall of ready and easy mirth which negroes sustain between themselves and white men, bearing himself toward his cousin McCaslin nor only as one man to another but as an older man to a younger.（170、下線筆者）

下線部のように、ひとまず Sam を“ the negro ”と表現しているものの、Sam がほかの黒人にはない「厳粛さや品位」を持っていて、白人に媚び

へつらう（ready and easy mirth which negroes sustain between themselves and white men）、いわゆるサンボ（Sambo）としては振舞わない態度を見て取り、惹かれていたのである。

こうして Sam に魅了された Ike が対峙することになったのは、自分が生きる土地にまつわる暗い過去だった。Sam は、Ike に狩りを教えるだけでなく、自らの出自や祖先であるアメリカ先住民について語って聞かせたのである。ただし、Sam は誰にでもその話をしていたわけではない。その根拠は次のような記述である。

> [Sam] consorted with negroes (what of consorting with anyone Sam did after the boy got big enough to walk alone from the house to the black-smith-shop and then to carry a gun)（169）

ここからわかるように、Sam にとってもまた、Ike との交流はそれまでにない特別な経験だった。つまり、それぞれ狭間で生きている二人は、どちらか一方がもう一方に惹かれるという一方通行の関係ではなく、じつのところ相互に共振し合っていたのである。

２．失われた過去との対峙

Sam の語りを聞いているうちに、Ike は次のような感覚に襲われた。

> The boy would just wait and then listen and Sam would begin, talking about the old days and the People <u>whom he had not had time ever to know and so could not remember</u>. . . .
>
> And as he talked about those old times and those dead and vanished men of another race . . . gradually to the boy those old times would cease to be old times and would become a part of the boy's present, not only as

> if they had happened yesterday but as if they were still happening. . . . And more: as if some of them had not happened yet but would occur tomorrow, until at last it would seem to the boy that he himself had not come into existence yet, that none of his race nor the other subject race which his people had brought with them into the land had come here yet; that although it had been his grandfather's and then his father's and uncle's and now was his cousin's and someday would be his own land which he and Sam hunted over, their hold upon it actually was as trivial and without reality as the now faded and archaic script in the chancery book in Jefferson which allocated it to them and that it was he, the boy, who was the guest here and Sam Father's voice the mouthpiece of the host.（171、下線筆者）

このように、Sam に一から狩りを教わり、その独特の存在に惹かれ、その語りに黙って熱心に耳を傾ける Ike の身に起こったのは、語りにおいて立ち現れた過去に現在が取って代わられ、現在の自分の存在が無になる感覚であった。しかもその過去は単に聞き手という受け身的立場にある Ike の存在を侵食するだけに留まらなかった。二本の下線部から窺えるように、語り手という、本来主体的立場にあるはずの Sam をも非主体化し、「代弁者」にしてしまうようなものだったのである。

ここで思い出されるのは、フロイトが「想起、反復、徹底操作」という論文の中で書いている、被分析者が精神分析的治療の過程で見せる様子である。

> ・・・われわれはこういうことができよう――要するに被分析者は忘れられたもの、抑圧されたものからは何物も「想い出す」erinnern のではなくそれを「行為にあらわす」agieren のである、と。彼はそれを（言語的な）記憶として再生するのではなく、行為とし

> て再現する。彼はもちろん、自分がそれを反復していることを知らずに（行動的に）反復し wiederholen ているのである。[3]

こうした反復脅迫に関連して、下河辺美知子は次のように述べている。

> 画像、音声、明暗、におい。温度や湿度といった皮膚感覚。出来事を想起させる五感の記憶に繰り返し襲われる事態になったとき、人の心に一つの思いが浮かんでくる。「どうしてこれが私に訪れるのか？」苦しんでいるのは現在という時間。そこへ、過去の一点へ引き戻そうとする声が侵入する。「忘れているということを、忘れているのではありませんか？」
>
> 　トラウマの時間に取り込まれたとき、人は、過去が現在の中に押し入ってくるように感じるだろう。あるいは、現在が過去に吸収されてしまったと思うかもしれない。今を苦しんでいるはずのトラウマ患者の身体は、過去のあの時間を繰り返し体験しつづけるからである。[4]
>
> 患者にとってみれば、PTSD の時間は過去の一点へと回帰しつづける。そこには強力な呪縛力を持つブラックホールがあって、すべての記憶の連鎖を吸い込んでいる。[5]

これらを踏まえて考えると、まず、アメリカ先住民、つまり当初の土地の所有者の末裔である Sam の語りを聞くうちに、Ike の五感が刺激され、「裁判所の文書」に記された現在の土地所有の証明など、「取るに足らず、現実味がない」記号の羅列に過ぎないように感じられた。同時に、語り手である Sam もまた、Ike という唯一無二の聞き手を得て、自分が生まれる前の、ゆえに、本来は自らの実感ないしは感覚として捉えることが物理的に

不可能な過去について語っていたはずが、それを単に「言語的な記憶として再生する」のではなく、主（今は亡き人々）の代弁者として「行動的に反復」していたのである。

自分で経験したわけでも、詳細に見聞きしたわけでもないから、当然、Sam の話に信憑性はない。さらに、その語りに耳を傾ける Ike に関する “The boy would never question him”（171）という記述は、信憑性がないどころか想像の産物であることを窺わせるものである。こうした記述と、フォークナーが自身の描くアメリカ先住民について “I never read any history . . . I talked to people. If I got it straight it’s because I didn’t worry with other people’s ideas about it”[6] と述べていることを合わせて考えれば、Sam の話の虚構性は欠陥などではなく、フォークナーによる意図的な仕掛けと捉える方が自然である。つまり、この仕掛けによって、語りの内容やその真偽ではなく、語りの中でトランスしていくような Sam と Ike の行為の方がより強調されているのである。重要なのは、事実がどうかもわからない（そのことがまったく問題とならない）出来事そのものではなく、そこで二人が一緒にその内容を“体験／共有”していたということなのである。事実性が欠如しているからといって、真実性が必ずしも損なわれるわけではない。文学や精神分析学は物理的事実を超えた先に存在するものを問題視するのである。

このようにして二人は、「過去のあの時間を繰り返し体験」しながら、土地の所有にまつわる裏切りや迫害という抑圧された過去、下河辺の言葉を借りれば「強力な呪縛力を持つブラックホール」に吸い込まれっていった。こう考えると、遠い過去であるはずの出来事が異様に生々しく感じられ、目の前の現在を侵食してしまうほどのものだったのも不思議ではない。

これに関連して、Sam の中に流れる血について、聡明な McCaslin は次のように説明している。

When [Sam] was born, all his blood on both sides, except the little white

> part, knew things that had been tamed out of our blood so long ago that we have not only forgotten them, we have to live together in herds to protect ourselves from our own sources. He was the direct son not only of a warrior but of a chief. Then he grew up and began to learn things, and all of a sudden one day he found out that he had been betrayed, the blood of the warriors and chiefs had been betrayed.（167-68、下線筆者）

下線部で、白人たちは Sam の中に流れるアメリカ先住民や黒人の血についてこのように語っている。つまり、「自分たちの血においてはるか昔に抑え込まれてしまったので、そのことを忘れただけでなく、自分たち自身から自分たちを守るために群れをなして生きなければならなくなった」、と。この表現が暗に示しているのは、アメリカ先住民／黒人／白人といった区別の無意味さである。先述のように狭間に生きていた Sam と Ike は、自分たちにとっては直接的には触れることのできない過去を「語り」を通して共有することで、その区別を軽々と乗り越えていたのである。

３．ブラックホール＝ Big Bottom での狩り

こうした失われた過去ないしはブラックホールとの接触と並置されているのが、Big Bottom と呼ばれる wilderness での狩りである。10 歳になり、一緒に森へ連れて行ってもらえるようになった Ike は、初めて自らの手で鹿を仕留め、その血を Sam から顔に塗られることで子供から大人になる。この象徴的な儀式を通して、その魂のうちに荒野の“しるし”を刻み付けられたのである。

> the wilderness whose mark he had brought away forever on his spirit, even from that first two weeks seemed to lean, stooping a little, watching them and listening, not quite inimical because they were too small . . . but just

brooding, secret, tremendous, almost inattentive.

Then they would emerge, they would be out of it . . . the very tiny orifice through which they had emerged apparently swallowed up.（176-177）

「謎めいていて、巨大で、無頓着」という表現は、まさにブラックホールを彷彿させる。つまり、Ike が荒野で受けた“血のしるし”は、ブラックホールへの没入を象徴的に表すものなのである。さらに印象的なのは、狩りの一行が外に出ると、その出口が森に飲み込まれるという表現である。Compson 将軍、Spain 大佐、従兄弟の McCaslin など、森に入る者は Sam と Ike だけではなかったが、そこは常に外部に向かって開かれているわけではなく、やはり閉じた圏域だったのである。

やがて Sam はその森の住人になる。妻子もなく、家族もいない Sam は、同じくアメリカ先住民の子孫である Joe Baker という男が亡くなると、マキャスリンらに申し出て Big Bottom で暮らすようになったのである。この申し出を受けて、McCaslin は “Maybe he [Sam] wants to get away from you [Ike] a little while”（174）と幾分冗談めかして言っているが、これまでの考察を踏まえると、この発言はもちろん Sam の行為を見誤ったことによるものであり、事実はむしろ逆といってもよいくらいである。Sam が Ike との交流の中で「強力なブラックホール」に吸い込まれ、さらに森がそのブラックホールを象徴しているとすれば、Sam は、Ike と離れたかったわけではなく、そのブラックホールに自らの意志でもっと近づき、失われ、忘れ去られた歴史の核心に迫りたかったに違いない。

実際に、森に移るという Sam の決断を聞いた Ike に関する以下のような記述からは、Sam と Ike の強い結びつきと、それゆえに Ike がある予感を抱いていたことがわかる。

> Also, since he was nine now, he could understand that Sam could leave him and their days and nights in the woods together without any wrench . . . now the boy discerned in that very talk under the high, fierce August stars a presage, a warning, of this moment today.（173-174）

Sam との別れに「悲しみ」という言葉が用いられるのは、たとえ Sam はそれを感じていないという記述の中であっても、彼らの強い結びつきを暗示している。そして、Ike は、Sam の森への移住が語りを通した共通体験、すなわちブラックホールへの潜行に関係していることを鋭くも見抜いていたのである。

このようにして森の住人になった Sam に連れられていった森の中で、Ike は成長を遂げる。その成長には予兆がある。例年通りの日程で狩りを終え、馬車に乗って帰路に就こうとしていた一行は、“unmistakable and unforgettable sound of a deer breaking cover”（178）を聞きつけ、すぐにふたたび臨戦態勢に入る。しかし、Boon や Walter といった他のハンターたちが銃を携え鹿を追おうとする中、Ike は「どうすべきかの判断はつかない」と感じていた。

> And it seemed to the boy too that it would take them forever to decide what to do—the old men in whom the blood ran cold and slow, in whom during the intervening years between them and himself the blood had become a different and colder substance from that which ran in him and even in Boon and Walter.（179）

言うまでもなく、Ike がこのように白人の大人たちの行動に疑問を抱いたのは、それとは対照的なものの存在――Ike が仕留め、Sam によって顔に塗りつけられた鹿の血に象徴されるブラックホールの存在――を知ったか

らである。作中、その血は “the hot smoking blood”（164）と描写されているが、その「熱い血」こそ、荒野の“しるし”であり、Sam と自分を分かちがたく結びつけるあの体験の“しるし”であった。

> The hands, the touch, the first worthy blood which he had been found at last worthy to draw, joining him and the man forever, so that the man would continue to live past the boy’s seventy years and then eighty years, long after the man himself had entered the earth as chiefs and kings entered it.（165）

こうした「熱い血」が流れる領域／森／ブラックホール（さらに、そこに住む Sam）と、先に挙げた「冷たい血」しか流れない白人社会の狭間で、Ike は「熱い血」が課す規律に従うのである。じつのところ、Ike が従うと決めた Sam には、「忘れようもない声」の主である鹿を仕留めるつもりはなかった。そして、彼に同行した Ike は、ついに wilderness との一体化を果たす。

> There was a condensing, a densifying, of what he had thought was the gray and unchanging light until he realized suddenly that it was his own breathing, his heart, his blood—something, all things, and that Sam Fathers had marked him indeed, not as a mere hunter, but with something Sam had had in his turn of his vanished and forgotten people. He stopped breathing then; there was only his heart, his blood, and in the following silence the wilderness ceased to breathe also, leaning, stooping overhead with its breath held, tremendous and impartial and waiting. Then the shaking stopped too, as he had known it would, and he drew back the two heavy hammers of the gun.（182）

「灰色で不変だと思い込んでいた」森が、自分の呼吸や心臓や血そのものであるという気づきや、そうした森との共鳴と同化は、Sam との語りの中で見出された世界へ足を踏み入れたことを示唆している。Sam の語りの中で触れ、自分の存在が無になるような感覚をもたらすブラックホールは、嘘か真実かの単純極まりない基準から彼を解き放つ。このような比類なき体験を可能にするブラックホールは、森の奥に隠されている。しかし確かにブラックホール的な領域は存在する。なぜならそこには「熱い血」をたぎらす鹿が生息しているからだ。こうして Ike は、森／ブラックホールを表象する鹿が真摯に向き合う対象ではあっても、武器を手に戦い、なきものにしようとする対象ではないことを悟り、担いでいた銃を下したのである。

４．結び

狩りを学びはじめ、実際に森に連れて行ってもらえる日を心待ちにしていた Ike であったが、自らが森と共鳴した一方で、他のハンターが銃を放つ音を聞いて、「自分が撃つとは考えていなかった」ことを悟る。

> Then the mellow sound of the horn came down the ridge and something went out of him and he knew then he had never expected to get the shot at all.（183）

結局、他のハンターが仕留めたのは、みんなが追っていたのとは別の鹿だった。残された大きな足跡を見て、これは大物に違いないと期待されていた本来の獲物は、銃を放った他のハンターが鳴らす笛の音を尻目に、Sam と Ike の前に姿を現す。

> Then the boy saw the buck. It was coming down the ridge, as if it were walking out of the very sound of the horn which related its death.（183-184）

Tony M. Vinci が "Faulkner takes care to write the deer's entrance not as the movement of an animal into a single environment but as a scene of shifting vision"[7] 指摘しているように、ここには Ike の成長が表れている。「ブラックホール」 と対峙し、そこに足を踏み入れることは、死から逃げずに向き合うことと同じくらい過酷なことである。しかし Ike は、Sam との生々しい体験や、彼の手で魂に刻まれた"血のしるし"によって、その得体の知れなさだけでなく血の通った温かさも感じながら、自分の身内がひいたレールの上を歩むのではなく、ブラックホールや死にも例えられる途方もない世界に踏み出すことを選んだのである。Faulkner は、こうした Ike 少年の成長に、漆黒の暗闇に包まれたブラックホール的な南部を照らす、弱々しいながらも確かな一条の光を見ようとしたのではなかろうか。

Notes

1 D'Alessandro, Michael. "Childless "Fathers," Native Sons: Mississippi Tribal Histories and Performing the Indian in Faulkner's *Go Down, Moses*." *Mississippi Quarterly* 67. 3, 2014. p. 396.

2 Faulkner, William. *Go Down Moses*. New York: Random House, 1942. p. 168. 以降、本書からの引用は引用末尾の括弧内に頁数を示す。

3 フロイト、ジークムント『改訂版フロイド選集 15：精神分析療法』小此木啓吾訳（日本教文社、1976 年）p. 162.

4 下河辺美知子『トラウマの声を聞く　共同体の記憶と歴史の未来』（みすず書房、2006 年）p. 20.

5 *Ibid*., p. 24.

6 Cantwell, Robert. "The Faulkners: Recollections of a Gifted Family." *William Faulkner: Three Decades of Criticism*. Ed. Frederick J. Hoffman and Olga W. Vickery.

East Lansing: Michigan State UP, 1960. p. 57.

7 Vinci, Tony M. “A Sound “Almost Human”: Trauma, Anthropocentric Authority, and Nonhuman Otherness in *Go Down, Moses*.” *The Faulkner Journal*. Fall 2013. p. 37.

Almayer's Folly の精神分析学的考察
―― 反復を視点として ――

飯田　啓治朗

はじめに

本論文では、[1] 19 世紀末から 20 世紀初頭のイギリス文壇において活躍した、ポーランド生まれでイギリスに帰化した小説家 Joseph Conrad (1857-1924) の、船員から作家へと転向するきっかけとなった文壇デビュー作 *Almayer's Folly* (1895) を取り上げる。この作品を読むと、さまざまな反復が存在することに気付く。小説における反復の重要性について、J. Hillis Miller は次のように述べている。

> In a novel, what is said two or more times may not be true, but the reader is fairly safe in assuming that it is significant. Any novel is a complex tissue of repetitions and of repetitions within repetitions, or of repetitions linked in chain fashion to other repetitions. In each case there are repetitions making up the structure of the work within itself. . . . [2]

Miller が挙げている、「作品の内部にある構造を作り上げている反復」は、*Almayer's Folly* においては、単なる反復と、形を変えた反復が存在する。本論文は、*Almayer's Folly* に散見する反復を精神分析学的な解釈を交えつつ考察し、作品における反復の主題性を指摘することを目的とする。

1

作品に見られる単なる反復として、二つの例を挙げることができる。一

つ目は、主人公Kaspar Almayerが繰り返し語る、混血の娘Ninaとのヨーロッパでの裕福な生活の夢である。

> . . . Almayer's thoughts were often busy with gold; gold he had failed to secure; gold the others had secured—dishonestly of course—or gold he meant to secure yet, through his own honest exertions—for himself and Nina. He absorbed himself in his dream of wealth and power away from this coast where he had dwelt for so many years; forgetting the bitterness of toil and strife in the vision of a great and splendid reward. They would live in Europe, he and his daughter. They would be rich and respected. (p. 5) [3]

この描写は作品の最初のページにおいて、語り手によって語られているものである。Almayer は、マカッサルにおける交易で成功して莫大な利益を得ていた Lingard の部下となり、ある日、養女のマレー人の少女と結婚すれば財産をやると話を持ちかけられた。Lingard の財産を目当てに彼の養女であるマレー人の少女と結婚することと、白人としてのプライドを守ることとを天秤にかけた結果、彼女はいずれどうにでもすることが出来ると考えて、Lingard の要求に応じたのであった。結婚後 Almayer は、Lingard からサンバーでの交易を任されるものの、アラビア人の進出により打撃を受け、Lingard も数度にわたる金とダイヤモンドの探検によって資金がなくなってしまう。これらに加えて、妻が生来の野蛮な性質を見せるようになり、Almayer は苦境に立たされる。そのような彼にとっての唯一の生きがいが、娘の Nina であった。

長年住んできたサンバーを離れて娘の Nina とヨーロッパで暮らしたいという Almayer の夢は、上の引用と同じ第 1 章の終わりの部分において、"'And then'—he went on—'we shall be happy, you and I. Live rich and respected

far from here—and forget this life, and all this struggle; and all this misery!'" (p. 15) と か、"you cannot imagine what is before you. I myself have not been to Europe but I have heard my mother's talk so often that I seem to know all about it. We shall live a—a glorious life. You shall see!" (p. 16) などと、娘の Nina に対して直接繰り返し語られている。さらに、その後の章でも、"And he began—after his manner—to plan great things, to dream of great fortunes for himself and Nina. Especially for Nina!" (p. 26) と、語り手によって語られている。

次に、作品に見られる単なる反復の二つ目の例を見ていくことにしたい。混血の娘 Nina が彼女のアイデンティティをマレー人の母親と同一化することによって、そして彼女が、サンバーにやって来たバリ島の酋長の息子 Dain Maroola と恋に落ち結婚するために、サンバーを出て行くことによって、娘とヨーロッパで裕福に生活したいという Almayer の夢は打ち砕かれてしまう。自分の元へ戻って来るように Nina を説得することを断念した Almayer は、彼女に、"I will never forgive you Nina. Never. If you were to come back to me now, the memory of this night would poison all my life. I shall try to forget. I have no daughter. There used to be a half-caste woman in my house but she is going even now. . . . " (p. 138) と言い、彼女を「忘れる（"forget"）」決意をするのである。

その後も Almayer は Nina に対して、時には、「冷静な声で（"in a dispassionate voice"）」、"I shall never forgive you Nina" (p. 142) と言い、時には、「狂ったかのように跳び上がって（"leaping up madly"）」、"I will never forgive you Nina!" (p. 144) と、大声で叫んでいる。語り手が、"'. . . I will never forgive you Nina—and to morrow I shall forget you! I shall never forgive you'—he repeated with mechanical obstinacy . . . " (p. 144) と描写しているように、Almayer は "never forgive" と "forget" を「機械的に執拗に繰り返す」、すなわち反復するのである。さらに、語り手は、次のように描写している。

> To him it seemed of the utmost importance that he should assure her of his intention of never forgiving . . . only one idea remained clear and definite:—not to forgive her; only one vivid desire:—to forget her. And this must be made clear to her—and to himself—by frequent repetition. (p. 144)

Nina に対してだけでなく自分自身に対しても、その決意を明らかなものにするための、彼女を「許さないこと（“not to forgive”）」と「忘れること（“to forget”）」の「頻繁な反復（“frequent repetition”）」と、前の引用に見られた “never forgive” と “forget” の機械的なまでの執拗な反復は、精神分析学的な注目に値する。

続けて、Nina が恋人 Dain とともにサンバーを出て行った直後の Almayer の描写を引用する。

> Now she was gone his business was to forget, and he had a strange notion that it should be done systematically and in order. To Ali’s great dismay he fell on his hands and knees and creeping along the sand erased carefully with his hand all traces of Nina’s footsteps. He piled up small heaps of sand leaving behind him a line of miniature graves right down to the water. After burying the last slight imprint of Nina’s slippers he stood up and turning his face towards the headland, where he had last seen the prau, he made an effort to shout out loud again his firm resolve to never forgive. Ali watching him uneasily saw only his lips move but heard no sound. He brought his foot down with a stamp. He was a firm man. Firm as a rock. Let her go. He never had a daughter. He would forget. He was forgetting already. (p. 147)

ここで Almayer が、Nina を忘れることが “systematically” に、そして “in order” になされるべきであると考えていることを、語り手は「奇妙な考え」としているが、精神分析学的に見れば、Almayer は強迫観念にとらわれており、反復強迫を呈していると言える。福島章は、反復強迫の衝動の一例として、「たとえば最愛の肉親を失ったこどもは、遊戯の中での象徴的な行動で埋葬や告別を執拗に反復する……」と述べている。[4] このことに照らして考えてみると、この場面で Almayer が行っている、砂浜の上に残された Nina の足跡のすべての痕跡を手で入念に消し、砂を盛り上げて「小さな墓の列（“a line of miniature graves”）」を作りながら水際まで進んで行くという行為は反復強迫的なものであり、これは、自分の元からいなくなってしまった娘の、いわば、象徴的な死に対する埋葬、告別、喪の行為であると解釈できる。

以後、上の引用の冒頭の文の通り、Almayer は娘の Nina を忘れることに執着し続けている。

> “Forget!”—muttered Almayer—and that word started before him a sequence of events, a detailed programme of things to do. He knew perfectly well what was to be done now. First this, then that, and then forgetfulness would come easy. Very easy. He had a fixed idea that if he should not forget before he died he would have to remember to all eternity. Certain things had to be taken out of his life, stamped out of sight, destroyed, forgotten. (p. 149)

Almayer は、死ぬ前に忘れなければ永久に記憶していなければならないだろうという “a fixed idea”（「固着観念」）を抱くのだが、この考えは矛盾したものであるように思われる。というのは、死とは、肉体と精神の両者の消滅を意味するからである。Almayer は、Nina を忘れるために、一緒に暮

らしていた家を燃やし、すでに廃墟と化していた “Almayer’s Folly” に引き籠もる。

> . . . the interested spectators could see the tall figure of the Tuan Putih with bowed head and dragging feet walking slowly away from the fire towards the shelter of “Almayer’s Folly”.
>
> In that manner did Almayer move into his new house. He took possession of the new ruin and in the undying folly of his heart set himself to wait in anxiety and pain for that forgetfulness which was so slow to come. He had done all he could. Every vestige of Nina’s existence had been destroyed: and now with every sunrise he asked himself whether the longed for oblivion would come before sunset—whether it would come before he died? He wanted to live only long enough to be able to forget and the tenacity of his memory filled him with dread and horror of death—for should it come before he could accomplish the purpose of his life he would have to remember for ever! (p. 151)

Almayer は、「彼の心の絶えない愚行の中で（“in the undying folly of his heart”）」、「なかなかやって来ないあの忘却（“that forgetfulness which was so slow to come”）」を待つのである。そして、忘却という「彼の人生の目的（“the purpose of his life”）をやり遂げる前に死が来てしまうと永遠に記憶していなければならないだろう」という、矛盾した愚考に再び執着し、死の前に「待ち望んだ忘却（“the longed for oblivion”）」が訪れること、そして、「忘れることができるまで生きること（“to live only long enough to be able to forget”）」を望み、このあとは、死ぬ前に Nina を忘れることだけが彼の生きる目的になっていく。この作品のタイトルでもある “Almayer’s Folly” は、Almayer が Nina を忘れることに執着する場となるのである。[5]

2

次に、作品に見られる反復のテーマとして、形を変えた反復について考察していきたい。まず、Almayer のサンバーでの生活は、彼が故郷ジャワにいたときの両親の生活の反復ととらえることができる。これには二つの例を挙げることができる。一つは、Almayer の原住民蔑視の態度は父親の態度の反復と考えることができることである。もう一つは、娘の Nina とヨーロッパで裕福に暮らしたいという Almayer の夢は彼の母親の願望の反復と考えることができることである。これらのことは、作品において唯一の、Almayer の両親について触れている、わずか 10 行ほどの短い描写によって暗に示されている。

> It was an important epoch in his life for on that day began a new existence for the son of a subordinate government official employed on the staff of the Botanical Gardens in Buitenzorg—as glad, no doubt, to place his son in such a firm as was the young man himself to leave the poisonous shores of Java, and the meagre comforts of the parental bungalow, where the father grumbled all day at the stupidity of native gardeners; and the mother—from the depths of her long easy-chair—bewailed the lost glories of Amsterdam where she had been brought up, being indeed the daughter of a cigar dealer there. (p. 6)

サンバーにおいて Almayer はマレー人の妻をはじめとする原住民らを蔑視しているが、彼のそうした白人優越主義の態度は、この引用でさりげなく言及されている、故郷ジャワでの生活において父親が原住民の庭師たちにとっていた態度の反復であると言える。また、すでに見たように、繰り返し語られていた、ヨーロッパで娘の Nina と裕福に暮らすという Almayer

の夢は、上の引用において、ジャワに移り住んだためにタバコ商人の娘として育ったアムステルダムでの華やかな生活が失われてしまったこと（“the lost glories of Amsterdam”）を嘆き悲しんでいる母親の願望の反復であると解釈できる。このことは、すでに引用した、Almayer が Nina に語っている、“I myself have not been to Europe but I have heard my mother’s talk so often that I seem to know all about it. We shall live a—a glorious life. . . . ” (p. 16) という言葉が示唆している。[6]

次に、形を変えた反復の二つ目として、Almayer が、Lingard にマレー人の養女と結婚するように言われ、彼の財産に目がくらみ、Lingard を “father” (p. 10) と呼ぶことは、マレー人の少女が、Lingard との戦いで父親を亡くし孤児となり、Lingard に保護されて彼の養女となり、Lingard を “father” (p. 19) と呼ぶことの反復になっていることが挙げられる。

三つ目として、Lingard が Almayer の混血の娘 Nina をシンガポールに連れて行き、彼女に西洋流の教育を受けさせることは、Lingard が自分の養女にしたマレー人の少女をジャワのスマランの修道院に入れて四年間の教育を受けさせたことの、形を変えた反復として指摘できる。いずれの場合も、彼女たちに白人嫌悪をもたらしたのであった。

四つ目として、Almayer と娘の Nina の関係は、Lingard とマレー人の養女の関係の、形を変えた反復になっている。マレー人の少女は Lingard によって保護され、彼の養女とされて、修道院で四年間の教育を受けさせられたのであるが、その生活の中で彼女は、「最終的に彼の妻になる（“ultimately becoming his wife”）」(p. 19) という希望を抱いていた。一方、Almayer と Nina の関係において、Almayer は、彼の愛情を妻に対してではなく、娘の Nina に向けているのである。

五つ目として、Almayer と Nina の関係の破綻は、Lingard とマレー人の養女との関係の破綻の反復になっている。Lingard がマレー人の養女に対して Pygmalion を演じようとして失敗したのと同じように、Almayer は娘

の Nina に対して同じ失敗をしている。[7] Almayer は、一方的に自分の夢を描き、それを娘にも語るばかりで、混血の娘の心を全然理解していなかったのである。

形を変えた反復の六つ目として、Almayer がジャワを出たことと、Nina がサンバーを出ることを挙げることができる。Almayer は、結局かなうことはないものの、一旗揚げてやるという夢を持って、両親も嫌悪するジャワを出て来たのであった。一方、混血の Nina は、白人の父親を捨てて、マレー人の母親に同一化し、恋人の Dain と結婚するという彼女の人生の目的のためにサンバーを出て行くのである。

さらにもう一つ、形を変えた反復を指摘すると、Nina が母親から聞かされたマレー民族の話によって自分の夢を持つようになったことは、[8] すでに考察した、Almayer が母親から聞かされたアムステルダムの話によって Nina とヨーロッパで裕福に生活するという夢を描いたことの、形を変えた反復となっている。

おわりに

以上の考察から、*Almayer's Folly* という作品は、単なる反復、あるいは形を変えた反復といった、反復そのものをその主題として指摘することができる作品であることがわかった。Conrad の文壇デビュー作は、反復の病に取りつかれた作品だと言えよう。

Miller は、本論文の最初の引用文の最後に挙げていた、「作品の内部にある構造を作り上げる反復」に加えて、「作品の外部にあるものとの複合的な関係を決定する反復（“repetitions determining its multiple relations to what is outside it”）」が存在すると述べている。[9] そして、作品の外部にあるものとして、最初に、「作者の精神あるいは生涯（“the author's mind or his life”）」を挙げている。[10] したがって、本論で考察した、作品における反復の主題を、作家 Conrad の伝記を参照して考察する必要があるが、このこ

とは稿を改めて論じてみたい。

Notes

1　本稿は、2017 年 10 月 21 日に桃山学院大学で開催されたサイコアナリティカル英文学会第 44 回（平成 29 年度）大会における口頭発表の原稿に加筆修正を施したものである。

2　J. Hillis Miller, *Fiction and Repetition: Seven English Novels* (Cambridge: Harvard UP, 1982), pp. 2-3. なお、同書からの引用の日本語訳は拙訳による。

3　本論文における作品からの引用はすべて、Joseph Conrad, *Almayer's Folly: A Story of an Eastern River*, 1895, The Cambridge Edition of the Works of Joseph Conrad, ed. Floyd Eugene Eddleman and David Leon Higdon, introd. Ian Watt (Cambridge: Cambridge UP, 1994) により、引用末尾の括弧内にページ数を記す。なお、引用の日本語訳は、ジョウゼフ・コンラッド『オルメイヤーの阿房宮』田中勝彦訳（東京：八月舎、2003）を参考にしたものである。

4　福島章『天才の精神分析』（東京：新曜社、1978）、p. 63.

5　"forget" という言葉が作品のキーワードとなりうることについては、飯田啓治朗「『オールメイヤーの阿房宮』の一考察――オールメイヤーとニーナの "forget" について――」日本大学イギリス小説研究会編『イギリス文学の悦び』（大阪：大阪教育図書、2014）、pp. 99-116 を参照されたい。

6　Almayer の頭の中では、アムステルダムはヨーロッパと同一視されている。また、母親からタバコ商人の裕福な実家の話を何度も聞かされていたためであろうと考えられるが、アムステルダムは富とも同一視されている。Lingard に彼の養女との結婚話を持ちかけられたときに、Almayer は、生来の想像力を働かせて、" . . . gleamed like a fairy palace the big mansion in Amsterdam that earthly paradise of his dreams, where—made king amongst men by old Lingard's money—he would pass the evening of his days in inexpressible splendour." (p. 10) と思い描いている。Robert Hampson は、"He [Almayer] has dreams of a future in Europe, but he knows Europe only through the oral tradition of his mother's tales. It is on the basis of these tales that he has constructed his dream of Amsterdam . . . " と指摘している。Robert Hampson, *Cross-Cultural Encounters in Joseph Conrad's Malay Fiction* (Basingstoke: Palgrave, 2000), p. 105.

7 Daniel R. Schwarz, *Conrad*: Almayer's Folly *to* Under Western Eyes (Ithaca: Cornell UP, 1980), p. 9.

8 Hampson, *op*. *cit*., p. 106.

9 Miller, *op*. *cit*., p. 3.

10 *Loc*. *cit*.

A Streetcar Named Desire における Blanche の desire についての一考察

平　　恵理子

序論

A Streetcar Named Desire（1947）は Tennessee Williams（1911 - 83）による、戦後アメリカにおける代表的な戯曲の一つである。Williams はまず、1944 年に彼の処女作として *The Glass Menagerie* をシカゴの舞台で初上演し高い評価を得ていた。続く作品として *A Streetcar Named Desire* を世に出すと、彼の名は世間により広く知られるようになり、ひいてはアメリカ演劇界において不動のものとなった。その後も、*Summer and Smoke*（1948）、*A Cat on a Hot Tin Roof*（1955）などの作品を次々と発表し、1950 年代のアメリカにおいては正に Williams は他の追随を許さないほどの人気を博していた。

A Streetcar Named Desire の主人公は Blanche DuBois である。複雑な事情を種々抱えた Blanche は、引っ越した先で出会った人物らの desires と自らの desire を繰り返しぶつけ合った結果、Ambivalence な感情を抱え葛藤（Conflict）に陥る。最終的に、Blanche は重篤な精神病を発症して施設へと移っていく。

拙論では、Blanche が夫を亡くした過去に重きをおいて Blanche の言動を精神分析学的に考察することを試みたい。また、Blanche は家族や親族も亡くしていることに着目し、Blanche の言動を分析するとともに、彼女自身の desire とは何だったのかを探っていきたい。

1　Blanche と Stanley との出会い

A Streetcar Named Desire の第一場では、Blanche が夫と死別した後に、住み慣れたベルリーヴ農園での裕福な暮らしを離れ、Desire という名の電

車に乗り、ニューオーリアンズ市にある Elysian Fields という場所に降り立った場面から始まる。5 月初めのことであった。

Blanche は妹の Stella に会うために、通りで出くわした見ず知らずの女性に Stella の住いを確認すべく番地を尋ねた。ト書きにはこのように記してある。

> *The white woman is a Eunice, who occupies the upstairs flat; the colored woman a neighbor, for New Orleans is a cosmopolitan city where there is a relatively warm and easy intermingling of races in the old part of town.*[1]

Blanche の目には雑多な街として映ったことから、Blanche は来るべき番地を間違えてしまったのかと自問した。Elysian とは辞書によると「この上なく幸福な」、「至福の」という形容詞の意味があることから、この場所は、欲望の充足を求めて半ば無意識のうちに Blanche が辿りついた場所であった。しかし、Blanche の願いと反して、Blanche が Eunice に番地を尋ねた、まさにこの場所こそが Stella の住いであった。

> *The section is a poor but, unlike corresponding sections in other American cities, it has a raffish charm. The houses are mostly white flame, weathered grey, with rickety outside stairs and galleries and quaintly ornamented gables.*（p.243）

Eunice は Stella の近所に住んでいるために Blanche の到着を Stella にわざわざ知らせに行ってくれたことから、Stella が外出先から戻り Blanche に駆け寄った。二人は繰り返し抱き合って再会を喜んだ。このとき、Blanche は大変着飾っており、一方 Stella は日々の家事に追われる生活ぶ

りを隠す余裕もない出で立ちであった。Stella にとって雑然としたこの街で生活していく以上、着飾る必要がないのは至極当然であった。それにも関わらず Blanche は自分自身と Stella の外見を比較し、その上、明らかに自分のすらりとした体つきや着衣している服について自分自身を褒めた。このことから、Blanche は見た目を重要視し、そこで人を判断する類の女性であること、翻って、自分自身が他者から過小評価されることを避けるために、高価に見える服飾を必要以上に身にまとう性質を持っていた。Blanche がこのような虚栄心（vanity）を備えていたことにより、彼女が後に Stella の夫の Stanley Kowalski と対面して間もなく、Blanche のことを鼻持ちならない女性であることを Stanley に印象付けることとなった。

Blanche にとって久しぶりに再会した Stella は、夫の Stanley のことを盲目的に愛していた。特に Stanley が帰宅しないことがあり、それが何日も続くと Stella は内心気が気でなくなると Blanche に言った。そこに Stanley がボーリングの試合が終わって、遊び仲間たちと別れて帰宅し Blanche と対面した。Williams のト書きには Stanley についてこう記してある。

> *He is of medium height, about five feet eight or nine, and strongly, compactly built. Animal joy in his being is implicit in all his movements and attitudes. Since earliest manhood the center of his life has been pleasure with women, the giving and taking of it, not with weak indulgence, dependently, but with the power and pride of a richly feathered male bird among hens. . . . He sizes women up at a glance, with sexual classifications, crude images flashing into his mind and determining the way he smiles at them.*（p.264）

Stanley が上記したような男性であるために Stella が身も心も惚れ抜いた上で結婚したことを Blanche は一目見て納得した。この時、Blanche は

旅先からの疲れをとるために入浴し汗を流したばかりだった。Stella がポーチに出たところを見図って、Blanche は Stanley に着替えたばかりのワンピースの背中のボタンを留めることを頼んでみたり、煙草を吸いたいなどと言ってみたりして、彼の気を惹きつつ性的なモーションをかけた。また、Blanche 自身について何か賞賛するように Stanley に求めたかと思えば、彼に向かって、「妹が選んだ相手は男の中の男だわ！」（“ My sister has married a man! ”（p.280））などと彼に賛辞をほのめかしたりした。Blanche もまた Stanley が性的な魅力に溢れていると認識し、瞬時に彼に興味を持ったと言えよう。

一方、Stanley もまた、女性相手の快楽が中心の生活を送っていたことから、Blanche に対してどのように接すか、彼女を性的な分類でもって評価していた。Stella との会話の中で Blanche がベルリーヴの邸宅を手放したことを知っていた Stanley は、義理の弟である自分としても、これは財産を失ったのも同然として激高し、Blanche に向かって「女房の姉さんと知らなければ妙な考えをおこすところだぜ！」（ “If I didn’t know that you was my wife’s sister I’d get ideas about you!”（p.281））と怒鳴った。これは、すでに Stanley が Blanche を射止めるべき女性であると認識したことを暗に示している。即ち、Blanche も Stanley も一目会った時から、お互いに肉欲（carnal desire）を抱いたことは明白である。しかしながら、Blanche にとって Stanley は、大切な妹 Stella の夫にあたる。このことから、Blanche は自身の carnal desire を抑制（Suppression）することを試み、Stella の住いに居候することとなった。

2　ポーカーの夜に起きた出来事

ある日 Blanche が Stella とショーを見に出かけているうちに、夜になって Stanley はいつものように、住いに 3 人の仲間を集めポーカーを始めていた。Stanley の仲間とは Mitch を除き、洗練さや教養などが感じ取

れないがさつな男性ばかりで、みな労働者階級であった。疲れて帰宅したBlancheが入浴しようとバスルームのドアをノックすると、Mitchが出てきた。StellaとMitchが彼の母親についての短い会話を交わした後、Blancheはかなり興味を持って彼を見送った。その後Mitchはポーカーゲームを降り、寝室の傍まできてBlancheと話を始めた。

Blancheが、煙草を持っているかどうかMitchに尋ねると、彼は銀製の煙草のケースを取り出し、そこに彫ってある詩歌をBlancheに詠むように言った。すると、Blancheはその詩歌の作者を知っていたことから、彼は自分にはかつて愛した女性がおり、その女性に捧げた詩であったが、その女性は亡くなったことを明かした。ここでBlancheは彼に深く同情を示した。そしてBlancheは日頃から飲酒の癖がある事実を隠すかのように、ポーカーの邪魔にならないように、ショーの帰りにやむを得ずちょっと飲みに立ち寄った、と言ってわざとらしく慎み深い面を表してみたり、実際は妹であるStellaを姉だと偽って自分を若く見せる試みをしたり、自分がここに来た理由を、Stellaの具合が悪く彼女が弱っているせいだとして、思いやり深い面を露わにしようとして、口からの出まかせをMitchにもっともらしく話し始めた。Blancheが、Mitchに事実と異なる話をしてまで、彼に対して自分のことをよりよく見せ、よりよい印象を持ってもらいたいというBlancheのvanityがここに露顕している。

BlancheはMitchにこの夜、感謝の念を表し別れた。BlancheはMitchに対して、本音とも狂言ともつかない会話を入り混ぜて自分がいかに魅力的な女性であるかということを繰り返しアピールして彼の心を掴むと、彼と次第に逢瀬を重ねていった。

同じ夜、Stellaが、Stanleyにポーカーを早くやめてほしいと訴え、諍いを起こした。Stanleyから頬を殴られたことで、Stellaは近所に逃避し姿が見えなくなった。Stanleyは狼狽え、大声でStellaの名を数回叫んだところ、彼女がその姿を現した。二人は見つめ合い情熱的に抱き合うとそのまま自

室へと戻っていった。その明くる朝のことである。一つ屋根の下に住まい、Stanley のことを意識せずにはいられない Blanche は Stella との会話の中で Stanley のことをこう述べている。

BLANCHE : Stella, I can't live with him! You can, he's your husband. But how could I stay here with him, after last night, with just those curtains between us?

STELLA : Blanch, you saw him at his worst last night.

BLANCHE : On the contrary, I saw him at his best! What such a man has to offer is animal force and he gave a wonderful exhibition of that! But the only way to live with such a man is to—go to bed with him! And that's your job—not mine!（p.319）

Blanche は、前の晩に Stanley の中に、男性の暴力的な力強さと好いた女性から愛想をつかされた哀れな姿を見出した。そして、その後、愛する女性が再び戻ってきた時に彼が自尊心を取り戻し、大喜びする姿を見せつけられた。Stanley が取り乱すほど Stella は Stanley に必要とされ、求められていることを思い知らされた Blanche は激しく嫉妬した。この Blanche の言葉には彼女の率直な気持ちが表されている。そして、一睡もできなかった Blanche と反対に、今朝の Stella の恍惚としてまどろんだ姿態に Blanche はいろいろと想像をめぐらしたに違いない。Blanche の精神構造をみてみると、この場面では、Stanley への carnal desire を Suppression できなかったために、Blanche が Stella に対してひどく嫉妬し、Stella に向けてその感情を爆発させていると推察できる。

この後、しばらく Blanche の感情は収まらず、話題は Stanley だけでなく、ポーカー仲間にまで及び、罵詈雑言へと形を変えて次から次へとまくしたてた。Blanche の本心は Stanley の関心を惹きたくてたまらない。し

かしその本心を明かせないために、話題として生まれ育った環境の違いを挙げつらい、Stanley を蔑んでいる。Blanche は Ambivalence な状態であると言えよう。また、Blanche は vanity を持っているために、捨てたはずの故郷での裕福だった暮らしを理想とし、その時代に今なお執着している。古き良き幼少時代を回想しながら Stella に尊大な態度で説教をした。一方 Stella は Blanche のような vanity を持たないために、粗野な態度の Stanley をありのままに受け入れ、裕福に過ごしていた時代とは一変した現在の生活の全てに適応して生活していた。Stella は、訪れたばかりの Blanche から、自分たちの生活に対しての唐突で批判的な言葉を前に、怯んだり挑発されたりすることなく、冷静な態度で現在の Stella の価値観を伝えた。この Stella の態度には、彼女自身もまた、かつて同じような気持ちを抱いたことがあるからに違いない。そして日々の生活を営む中で徐々にここでの生活を受け入れていった経験に基づく自信があるからこそ、寛大に Blanche に対応できたのであろう。この一部始終を、Stanley は物陰で聞いていた。

3　Blanche の性癖

Blanche が Stella と寝室にいると、Stanley が現れた。Stanley は「で、ショウという名前の男を知らないか？」（“ Say, do you happen to know somebody named Shaw?”（p. 329））と、Blanche に唐突に尋ねた。Blanche は顔にかすかな驚きの表情を浮かべた。Blanche は、Stella のもとにたどり着くまでのここ 2 年の間に、ベルリーヴで男性遍歴を繰り返しながらフラミンゴホテルで生活していたのだった。Shaw という男性は Blanche がその時に情事を交わした男性の中の一人だった。その場で Blanche はその男性を知らないことを Stanley に伝えると、Stanley は人違いとひとまずは納得した振りを見せてまた出かけて行った。

Stanley から、かつて知り合った男性の名を聞かされた Blanche の態度はそわそわと落ち着かなくなった。その理由を、Mitch と夜にデートするか

らとはぐらかして、訝しがる Stella に伝えた。その後 Stella は Stanley から呼び出され出かけて行った。

一人残された Blanche はグラスを手にしたまま気が遠くなったかのように椅子に深々ともたれた。その時、新聞の集金として少年が呼び鈴を鳴らした。Blanche は彼の姿を見ると、はしゃいだような素振りで煙草の火を少年に求めた。Blanche は少年に興味を持ったのであった。家主がいないことを知り、去ろうとする少年に、時間を尋ねるために近づくと Blanche は優しく語りかけ続け、一度だけキスしてあげるといい、彼の許可を待たずに素早く近寄って唇を重ねた。そして悪い女になってしまうと Blanche は言うと、さっさと少年を返したのだった。

この Blanche の言動を理解するためには、彼女の精神構造をみなければならない。彼女のエス（Id）は無意識的で常に快楽追求を望み、自我（Ego）にその欲求の充足を迫る。そして無意識的な良心的自我であるところの超自我（Super-ego）は未成年を恋愛の対象としてみなすと法律に触れるという指令を Ego に出す。そこで、Ego は Id と Super-ego との間に立って現実を吟味し、調停に当たる。その結果、明るい昼間においては、Id は Super-ego の指令を認めて、Blanche には未成年には手を出そうとしない。しかし、辺りが暗くなってきた頃では、Id の方が、Super-ego よりも無意識的に Ego を大きく支配する。そのために本能的な desire が表面化すると考えられる。

今しがた、Blanche は Stella と Stanley の関係に嫉妬心を燃え上がらせたばかりで、その身の孤独さを思い知らされ打ちひしがれたばかりであった。それが故に彼女は少年にキスをしたい欲求に駆られ、その思いを果たしたのである。これはまさに Id の力に屈した Ego の姿であろう。この後 Mitch とのデートを控えていることが carnal desire の抑止力となり、この少年とはこれ以上の深みにはまらずにすんだのであったともいえよう。その後すぐに Mitch が花束を持って Blanche に逢いにやってきた。Blanche

はすぐさまMitchを私のバラの騎士と呼び、お辞儀を求め、贈り物を求めるとMitchは言われた通りにした。

4　BlancheとMitchの束の間の相互理解

同じ夜の午前二時ごろ、湖畔の遊園地へと出かけ帰宅したBlancheとMitchは疲れのために階段のところでぐったりとしていた。BlancheはMitchに玄関のドアの鍵を開けさせると屋内へと誘った。Blancheは陽気な調子でMitchには理解できないフランス語を操りながら彼にお酒を勧めると寝室へと進み､彼に上着を脱いでネクタイを緩めるように声をかけた。Mitchはその誘いには、自分は汗かきだから恥ずかしいと言って乗らなかった。Mitchは近いうちにStanleyやStellaと一緒に深夜上映のロードショーを見に行こうと言った。 即座にBlancheは断った。BlancheはMitchに、Stanleyは我慢が出来ないほど失礼で、ありとあらゆる方法でわざわざ痛めつけてくるのだと打ち明けた。Mitchは驚き、信じられないと言った態度を示した。日頃からBlancheはMitchに紳士的な振る舞いを求め、自らも貞淑な女性を演じているために、彼はBlancheが理想的な素晴らしい女性であると思い込まされている。従って、StanleyからBlancheがそのようなひどい扱いを受けていることが到底信じられないのであった。Stanleyの悪口を言い続けるBlancheにMitchはおもむろに年齢を尋ねた。そして自分の病身の母親にBlanchを紹介したと言った。 MitchのBlanchはいずれ母親を亡くすことを寂しがる彼に、自分がかつて結婚していたことや、夫が他の男性と二人きりで部屋にいるところを見てしまい同性愛者であることを知って衝撃を受けたことを話した。同性愛者であった夫をBlancheが罵り、それがきっかけで彼はピストルを用いて自死した辛い過去を話し始めた。Mitchはぎこちなく立ち上がると、Blancheにプロポーズの言葉を言った。Blancheは嬉しさに涙をこぼした。

5　Blanche の男性遍歴と objet loss の因果関係

9 月半ばのある日、Blanche はこの日が誕生日であった。テーブルには誕生日祝いの夕食が用意されていてケーキもあり、花などを Stella が飾り付けていた。そこに Stanley が現れて、Blanche に関する情報を手に入れたと興奮気味に話した。一つ屋根の下に三人で暮らし始めて丸五か月が過ぎた。Stanley は Blanche が滞在している間ずっと、彼女に関する情報を集めては信頼できるかどうか逐一漏らさず当たっていたと言った。そしてフラミンゴホテルの仕入れ係から話を得たと言い、Blanche はベルリーヴの邸宅を手放した後、ローレルという地域のフラミンゴホテルに常駐したところ、町の名物になってしまったと Stella に話した。また、Blanche は勤務していた高校で生徒にさえ手を出してしまい、その結果辞職を余儀なくされた挙句、ローレル市長から事実上の退去命令を受けたと言った。この話を聞いた Stella は半信半疑のまま、Stanley に Blanche の別の過去を話し始めた。

> STELLA: But when she was young, very young, she married a boy who wrote poetry. . . . He was extremely good-looking. I think Blanche didn't just love him but worshipped the ground he walked on! Adored him and thought him almost too fine to be human! But then she found out—
>
> STANLEY: What?
>
> STELLA: This beautiful and talented young man was a degenerate. . . .（p.364）

Blanche の身の上に起きたこの気の毒な事実を、Stanley は知る由もなかった。Stanley と Stella が深刻な状況でいるこの間に Blanche は入浴しており、気分よく歌っていた。その歌詞の一部、「どんないかさま舞台でも

嘘も誠になるのよ、ただ私を信じたら」という言葉は、現在の Blanche と Mitch の関係性そのもので、彼女の演技が功を奏し、希望があと一歩のところで叶うといった心境を物語っている。Stella は気を取り直して誕生日祝いの準備を再開し Mitch を待っていた。すると Stanley は、親友の Mitch が Blanche の罠に引っかかるのを黙ってみておれないとして、Blanche に関するこの情報を Mitch に全て話したと言い、彼は来ないだろうと言い放った。

ここで、Blanche が男性遍歴を繰り返すこととなった原因について、精神分析学的に考察したい。

Blanche は 16 歳の時に 17 歳の Allan Grey という少年と結婚していた。しかしその熱に浮かされたような結婚生活はある日突然終焉を告げた。なぜなら先述した通り、Allan は同性愛者であり、その事実を知ったのは、彼が他の男性と部屋で抱き合っているところを Blanch が偶然見てしまったからだった。その後、何もなかったように、Allan やその男性と連れ立って Blanche はカジノまでドライブに出かけ、そこで Blanche は Allan とダンスを踊った。ダンスを踊りながら、Blanche は「見たわよ！私、知ってるんだから！嫌気がさすわ」(“I saw! I know! You disgust me.” (p.355)) と Allan に言い放っていた。その直後に彼はピストルを用いて自死してしまった。

Blanche は Allan が何か自分に救いを求めていると思っていた。しかしながら、Blanche は、たまらなく彼が好きなのに、彼を救うこともできず、自分を救うこともできなかった、と言っている。その理由として、Blanche は Allan の容姿端麗な点や詩歌の才能を賞賛し彼にのめり込むあまり、彼を神格化し絶対の存在と見なしていたからである。Blanche はハンサムで自身が興味のある分野の詩歌に秀でていた Allan を理想の人物であると思い込んでしまったのだ。従って、彼が同性愛者であり、その事実を Blanche に打ち明けることなく結婚にまで至ったことで彼が苦しんでい

るなどとは Blanche は当然知らなかった。Allan が何か許しを乞うような素振りに気づいてはいたが、彼が同性愛者であるとは彼女は夢にも思わなかったに違いない。Blanch は Allan に対して、結婚した相手が異性愛者ではなく、同性愛者であったことから、自分は女性として認め愛されているわけではないばかりか、自分の相手への愛をも異性として受け入れてもらえることは永遠にないことを認識した。

このことについて、Alice Griffin は *Understanding Tennessee Williams* において Thomas P. Adler の見解も交えながら次のように述べている。

> Her failure to help Allan sexually and her guilt because of his death also explain her promiscuity, as if she were trying to succeed with strangers where she had failed with him. Thomas P. Adler interprets her behavior with the soldiers as a "kind of desperate flailing about for gratification as a compensation for powerlessness". . . . The fact that the soldiers were "young" suggests that Blanche's sexual relations with them is an attempt to compensate for her failure with Allan, whom she always describes as a "boy." Even though she is now in her thirties, this would explain her obsession with such young men, even boys, who would be close to Allan's age when, at sixteen, she fell in love with him. Another possible explanation for Blanche's promiscuity after Allan's death is that, although she is fleeing the past, she is actually reliving it. "If Blanche can satisfy the soldiers' desires . . . perhaps she can remake Allan after the image of a soldier," helping him in fantasy as she failed to do in reality. [2]

Blanche は Allan の芸術的な才能を高く評価して惚れ込んでおり、精神的な面では Allan から十分に満たされていた。しかし Allan が同性愛者であった事実から、異性愛者である Blanche にとって、彼女の carnal desire

は満たされなかったのではないかと推察する。Allan 亡き後、自責の念に駆られた Blanche 自身の精神面を保つと同時に彼女自身の carnal desire をも満たしたいと試みたことが、乱交を繰り返すことにつながったと納得でき、“compensate” の意味が理解できる。

ここで、Freud による、悲哀の仕事（mourning work）[3] とよばれる心の動きを Blanche 自身に照らし合わせて分析を試みたい。

Blanche は心ならずも自分の過ちや、思いがけない行いによって Allan を失ってしまったことから、Allan を取り戻したい気持ち、悔やみやつぐないの気持ちが心を占めている。ここで、愛する対象を失ったことから悲哀の心理過程をたどり、愛する者への恨み、つらみ、くやしさ、自責の念が折に触れて心によみがえる。Blanche も Allan との関わりの中で抱いていたさまざまな愛と憎しみの Ambivalence を再体験し、その感情を味わい尽くすうちに心穏やかな心理状態へと移行し、対象喪失（Object loss）を乗り越えられる可能性があった。しかしながら、Blanche は mourning work から逃避してしまった。逃避の先は、男性とのセックスに依存することとなった。Blanche は男性遍歴を重ねることになっていったのである。Blanche の脳裏には常に Allan の面影がよぎり、辛い思い出が蘇り、そのたびに自責の念に駆られ苦しむこととなった。そのために、その苦痛を忘れるべく男性と交わったのである。その度に Blanche の情緒はますます不安定になった。Blanche の苦悩は続き、そこでまた男性を求めるといった負の循環に陥り、Blanche はそこから抜け出すことができなくなった。その頃には周囲からは呆れられ疎ましがられた挙句、彼女は住まいさえ奪われたのであった。

また、勤務していた高校の生徒と関係を持ってしまったことに関しては、生徒らの年齢が 17 歳前後であることを考えると、そこに結婚した頃の Allan に似た雰囲気の生徒がいたとしてもおかしくはない。悲哀の仕事から目をそむけ逃避し、心が整わない状態の Blanche にとっては、Allan

と雰囲気の似た生徒がいたとするならば、彼女がその生徒に興味をそそられたことは容易に推察できる。それは、先述した新聞集金の少年への接し方を見ても言わずもがなであろう。

以上のことから、筆者は、Allan の突発的な死が原因となって、Blanche は Allan の死による悲哀の仕事を試みたもののセックスへと逃避してしまい、その結果、男性遍歴を重ねることにつながったと結論付けたい。全ては、mourning work を完遂させることができず、彼女自身の本心を見失ってしまったために起きたと考えられる。

Blanche は Mitch と出会い、彼と恋愛し結婚にこぎつけることに、いわば抱え込んだ負の循環を断ち切ることができる可能性を見出した。それは Blanche にとってはまたとないチャンスであったはずだが、彼女の誕生祝いの席に彼が姿を見せることはついになかった。

陰気な誕生祝いの夕食を終えようとしていた。冗談を言い無理に笑おうとした Blanche に Stanley はまるで注意を払わず、肉を手づかみで食べたところ、すかさず Blanche と Stella から彼の出自に触れて嫌味を言われた。Stanley は皿を一枚床に投げつけ二人を怒鳴りつけた。Stanley に惚れ込んでいる Stella の言動には最近変化が顕れていた。次に挙げる引用は彼女の彼への台詞である。

> STELLA: Lately you been doing all you can think of to rub her the wrong way, Stanley, and Blanche is sensitive and you've got to realize that Blanche and I grew up under very different circumstances than you did.（p.358）

Stella のこの言葉は、Blanche の方に心を寄せ、彼女への接し方がなっていないとばかりに、生まれや育ちに触れながら　Stanley を批判しているように見える。この Stella の台詞に表されるように、今までの生活のリ

ズムに狂いが生じてきてしまっては、Stanley にとって Blanche は厄介な存在そのものであることは明白である。Stanley は、例え他者から振る舞いや作法が下品と言われても、一向に気に留めることもなく、改める素振りさえもみせようとはしない。しかしながら、それを理由に女性に見下されることだけは、男性としての自信があるだけに我慢ならない。この時、Stella は産気づき、彼に付き添われ病院へと向かった。

6　Blanche の破綻

Blanche が一人で残っていると、Mitch が現われた。Mitch は口づけをせがむ Blanche を押しのけ、大股で肩をいからせながら家の中に入ってきた。Mitch は二度と Blanche に会うつもりはなかったと言い、彼女と会うときはいつも暗がりだったので明るいところで顔をみたいと言い、スイッチを付け部屋を明るくした。Mitch は Stanley の他に二人の男性から Blanche の過去に纏わる話を聞いたと彼女に迫った。Blanche は Mitch に過去を正直に打ち明けたところ、彼は「嘘ばかりついて、表も裏も全部嘘だ。」(“Lies, lies, inside and out, all lies.”（p. 387)）、と言って彼女を責めた。「嘘なんかついていないわ。心の中で嘘をついたことなんて一度もない…」(“ Never inside, I didn ’ t lie in my heart . . . ”（p. 387)）と Blanche が反論したその時、Mitch は無理矢理に彼女を抱こうとした。すかさず Blanche は彼に結婚を求めた。しかし、Mitch は Blanche を穢れた女性と決めつけ結婚を断った。Blanche は Mitch を追い返すために、悔し紛れに火事だと外に向かって大声で叫び、驚いた彼は走り去っていった。Mitch は Blanche を理想の女性であると思い込まされていたために、裏切られた気持ちになり、男性遍歴があると思しき女性と結婚することは到底考えられないのである。

Mitch が走り去って行った後、Blanche はひっきりなしに飲酒し続けていた。その際 Blanche は自分の衣装の中でも、古くなったドレスではあるが、一番のお気に入りのドレスを身にまとい、踵がすり減ってはいるも

のの美しく履きやすいハイヒールを履き、自分を飾りたてていた。そして、まるで傍に男性がいるかのように独り言を彼女は呟いていた。そこに Stanley が病院から戻ってきた。Stanley は自分の子どもが生まれるというのにいつもの通り飲酒して帰宅し、Blanche に饒舌に話し始めた。その様子に釣られるかのように Blanche も作り話を進めていった。Blanche は Mitch と破局したことについて恰も自分から切り出したかのように Stanley に話した。Blanche の戯言に苛立ち始めていた Stanley は Blanche を怒鳴りつけすべてを否定した。Blanche は Stanley を避けて通ろうとして寝室の方へと後ずさりすると、Stanley は彼女ににじり寄っていった。Blanche は瓶をテーブルにたたきつけて割り、割れ残った瓶を握って Stanley と向き合い抵抗したが、彼は Blanche に飛びかかり瓶を持っていた彼女の手首を掴むと、膝をついて動かなくなった Blanche を抱きかかえて寝室へと運んで行った。

ここで、Stanley が Blanche に襲ったことについて考えてみたい。Stanley は日頃から Blanche よりその作法や出身に至るまで散々見下され罵られてきた。勿論、それは Blanche の、妹の夫と知りつつ Stanley の気を惹きたいという Ambivalence な心理状態の為せる業であった。しかし、妻である Stella の目前で Blanche からたびたび見下されたような発言を受けていた Stanley の Inferiority complex は常に刺激され続けていた。「俺があいつから受けた仕打ちを忘れるな！」（“Don’t forget all that I took off her!”（p.376））との台詞からも、Stanley は怒り心頭に達している様子が伺える。Stanley との生活をありのまま受け入れていたと思えた Stella の言動にも少しずつ変化が顕れ、この頃の彼女は Blanche と調子を合わせるようにさえなった。Stanley としては、男性としての力とプライドを保持し、かつ Blanche にそれを誇示し、力を示すためにも、Blanche を力づくで屈服させる必要があったと考えられる。Stanley はかつて Stella に、Mitch を仲間として Blanche から守りたいと言っていた。しかし、実際は Stanley の

正義感というよりも、Blanche を自分のものにしたいがために、後から登場し、Blanche と婚約した Mitch に、破局に至るような情報を彼に吹き込んだ。Blanche を彼に奪われまいとする、男性としての競争心や独占欲が付きまとっていたように思われる。Williams は *Conversation with Tennessee Williams* の中で、Stanley が Blanche を強姦したことについて、a natural male retaliation と断言しており、続けて次のように述べている。

> Stanley said of Blanche, ". . . . We've had this date with each other from the beginning!" and he meant it. He had to prove his dominance over this woman in the only way he knew how.[4]

Stanley は、Stella が不在の夜に Blanche を手込めにすることによって、初対面から抱いていた Blanche に対する carnal desire を満たしたばかりでなく、Blanche が二度と自分を馬鹿にしないようにさせた。Stanley は自信を取り戻し、これまでの彼自身の人生の価値観やその均衡は見事に保たれたのである。

7　Blanche の出発

Blanche が Stanley に強引に犯されてから数週間が経過した。Stella は泣きながら Blanche の荷造りを進めていた。Blanche は Stella に、Stanley に手込めにされたことを打ち明けたのだが、Stella は信じなかった。その話を信じるとなると Stanley とは暮らせなくなるために、Blanche に田舎で静養できるように手配したと Stella は嘘を吐き、彼女に出て行ってもらうことにした。実際に Blanche の行く先は、精神に疾患を持つ患者が収容される施設だった。これは、悩み抜いた Stella が、姉ではなく、無事に生まれた子どもを囲んでの夫との生活を優先することにした結果であった。

Blanche は裕福な南部の紳士がサザン・ベル（理想的な上流階級の女

性）である自分を迎えにきてくれるに違いないと思い込んでいた。家では Stanley は仲間とポーカーに興じていた。Mitch だけは落ち込んだようにうな垂れてポーカーに参加していなかった。Blanche がおめかしして客の来訪を待っていると、Blanche を迎えにきたのは裕福な紳士ではなく、施設から派遣された医師と看護師であった。そのことに驚き、怯えた Blanche は部屋中を逃げ惑った。しかし、最終的に看護師が Blanche の腕をつかんで逃げられないようにし、それでもなお逃げようとする Blanche を羽交い絞めにした。Blanche は叫び声を上げ続けた。拘束服を着せるか尋ねる看護師に医師はその必要がないことを伝えると、医師は Blanche の前で帽子を脱ぎかがみ込んだ。まるで Blanche が淑女でもあるかのように優しく彼女の名を呼ぶと、Blanche の恐怖は静まり、看護師がつかんでいる手を放すように医師へと頼んだ。医師は Blanche の依頼を承諾し看護師の手を Blanche から離させたところ、Blanche は医師へと両手を差し伸べた。医師は Blanche を優しく引き起こして立たせるとその腕を貸して支えてやり、家から連れ出していった。医師らを伴って Blanche が家の外に出ると、Stella は大声で Blanche の名を数回叫んだ。しかし、Blanche は振り向くことはなかった。Stanley は、泣きじゃくる Stella に欲情したかのように Stella に膝まづき Stella につぶやいていた。ここで戯曲は終わっている。

結論

Blanche は、過去に夫を失った経験から自責の念に駆られるあまりに現実を直視できず、悲哀の心理過程を辿ることを避けた。その結果、Blanche は男性に依存することとなり、彼女は男性遍歴を重ねることにつながった。そのことが原因で Blanche は身を持ち崩してしまった。

次に挙げるのは、Blanche が夫を失った後、自宅で彼女の母親の介護をしていた時の台詞である。

BLANCHE: Death—I used to sit here and she used to sit over there and death was as close as you are. . . . The opposite is desire. So do you wonder? How could you possibly wonder!（pp.388-389）

最愛の夫の死を経た後もなお、Blanche は家族や親族の死に直面した。その上、彼女一人で看取らなければならなかった。Stella のところに来るに至るまでの Blanche の生活は、実に死を身近に感じていたのではないかと、Blanche のこの台詞から筆者は推測する。

Blanche は、Stella を頼って引っ越して来たときには、なんとかして生き延びる思いでいっぱいだったのではないだろうか。生きなおすと言った方がより当てはまるとも考えられる。それはとりも直さず、「死の反対は欲望（希望）である」と Blanche が語っているとおりである。実際に Blanche が Stella を頼ってきたところ、Stella はお腹に新しい命を授かっており、無事に出産を果たした。Stanley は生きていることへの歓びを動物的に表現するような男性だった。Mitch に出会うと、Blanche は愛する者との別れを経験した者同士として、自分を演出してまでなんとかして Mitch との結婚にこぎつけて孤独な身に別れを告げたかったのである。Blanche は、夢見るような心地でまるで Mitch と結婚して妻となり、子どもを産み育てて、母親となって人生を歩むことを想像し、熱望していたのであろう。Blanche が Mitch とともに相互理解に至ったとき、「時には—神様が—こんなに早く！」（“Sometimes—there’s God—quickly!”（p. 356））と言ったのは、目指していた Mitch との結婚がかないそうなことへの、彼女の心からの歓びであったと思われる。しかし、情婦としての彼女自身の過去を彼が知ったことから、彼から見下され婚約は破棄され、Blanche と Mitch との間に破局を迎えたのである。

Blanche は Stanley に初めて会った時から、彼に対して carnal desire を

抱いた。しかし、妹への愛情から生じる道徳的意識のもと、Blanche は carnal desire を Suppression することを試みた。しかし、その試みは失敗に終わった。Stella が不在の夜に、Stanley から求められる形で Blanche の carnal desire は満たされた。このことがあった後に、Blanche の Es は Stanley に対して彼女の carnal desire を満たすために、自我（Ego）に命令を出すと思われる。しかしながら、Blanche の、Stella に対する道徳的意識は超自我（Super-ego）として Es の要求をやめさせようとした。Stella に対して申し訳ないと思う気持ちがあるからこそ、Blanche は悩み苦しんだ。その結果、Blanche 自身の carnal desire は満たされたのであるが、その体験は不愉快なものと変化し、この事実を消し去りたい、と Blanche は切に願った。その結果 Blanche は Conflict の状態となり、心身が乖離した状態に陥ってしまったと筆者は推測する。Blanche の精神状態は社会に適応できなくなり、彼女は日常生活を送ることもままならなくなったのである。Blanche は心身が乖離した状態であるが故に、Stanley から強姦されたことを周囲に話しても彼女の話を信じる人はいなかった。今後は、Blanche は施設での生活が準備されている。ついに Blanche は、妻となって家庭に入り、子どもを産み母親となってわが子を育てるという、女性ならではの望みを絶たれてしまった。

ここで、この戯曲のテーマを考えてみたい。筆者は主人公を Blanche であると考えている。彼女は Allan と知り合って、彼を理想化してしまっているために、Allan と自分とを対等な立場では考えられなかった。一般論で言うと、Allan よりも目下の存在であった。Blanche は vanity で心身共に着飾った上で Allan と結婚した。その後に Allan が同性愛者であることが発覚した。Allan との結婚は、Blanche が同性愛者と結婚したことを世間に知らしめることとなる。vanity で身を固めている Blanche にとって、それはあまりにも体裁が悪く、許せないことであった。Blanche は悔し紛れに Allan を罵った結果、彼を死に追いやった。Mitch との逢引きや Stanley

との会話や、新聞の集金に来た若者との何気ないやり取りの中にさえ、Blanche 自身の過去を意識してか、取るに足らない女性として見られたくないという彼女の vanity が見え隠れする。従って、筆者はこの戯曲のテーマを“ vanity ”であると考えている。

次に、この戯曲のモチーフを考えてみたい。Blanch と Stanley は、生まれ育った場所は違っていても、彼らの生き方はそれぞれ、異性に対して carnal desire を抱き、刹那的な快楽を追及していた点で一致している。Blanche は男性遍歴を経験し、Stanley は女性との快楽中心の生活を送っている。即ち、彼らは、一人の異性では満足できずに次々に相手を変えては性欲を満たす。このことから、この戯曲のモチーフは“ carnal desire ”であると筆者は考える。

Blanche の半生を顧みると、彼女は心が落ち着くことができない日々を歩んできた。だからこそ、今後は、施設で静養しながら、平凡ではあるが波風の立たない安定した日々が送れることは、彼女にとってようやく平和な生活が到来したと言える。Blanche の内面にある desire としては、女性としてあるべき姿、即ち良妻賢母であったのではないだろうか。それを誇示・厳守するために vanity で心身を包み込み、子孫繁栄・良妻賢母に通じる“ carnal desire ”を、たとえ刹那的な carnal desire であったとしても、Blanche は求め続けたのであろう。

Notes

1 1. Tennessee Williams, *The Theatre of Tennessee Williams* (New York: New Directions, 1971) Volume one, p. 243.
以下、同書からの引用は全てページ数を括弧に入れて本文中に記す。

2 Alice Griffin, *Understanding Tennessee Williams* (Columbia: University of South Carolina Press, 1995), pp. 49-50.

3 小此木啓吾『対象喪失』（東京：中央公論社、2004）、pp.42-45.

小此木啓吾氏は「近親者の死や失恋をはじめとする、愛情・依存対象の死や別離」を対象喪失の一つであると述べ、また、強いられた対象喪失―自分が望まないのに、対象を奪われたり、無理に引き離されたりする場合と、対象であるそのものから見捨てられたり、つき放されたりする場合があると言及している。また、対象喪失反応の一つとして、急性の情緒危機 (emotional crisis) と持続的な悲哀 (mourning) の心理過程を挙げ、情緒危機が目前の外的な状況に対する適応の危機と結びついているのに対して、悲哀の心理はもっと内面的なその人物それぞれの心の営みであるとしている。表面的な適応のためには悲哀の心理は抑圧して忘れてしまったほうがよいように見えることから、さまざまな手段によって、悲哀の心理から逃避する試みがあると述べている。

4 Albert J. Devlin, *Conversation with Tennessee Williams* (Mississippi: University Press of Mississippi, 1986), p. 244.

D・H・ロレンス『恋する女たち』を ユング心理学で読み解く（Ⅱ）

――「救済ある結婚」と「個性化過程」――

森　岡　　稔

はじめに

D・H・ロレンス（David Herbert Lawrence、1885―1930）の『恋する女たち』（*Women in Love*）は、男女の恋愛の話である。イギリス中部の炭坑町に住むブラングェン家（The Brangwens）の姉妹アーシュラ（Ursula Brangwen）とグドルーン（Gudrun Brangwen）は、それぞれの恋愛相手に前者が公立学校の視学官バーキン（Rupert Birkin）を選び、後者が炭坑主クリッチ家（The Crich）の長男で美貌と精悍な体格を誇るジェラルド（Gerald Crich）を選ぶ。最初、情熱的なアーシュラは、「独立した二つの個性の完全な結合」を主張するバーキンの理想的な考え方についていけなかったが、しだいに二人は理解しあって恋愛関係となっていく。アーシュラはバーキンの考え方をさらに深く理解するようになり、二人はついに結婚する。一方、ジェラルドは、共感し合うパートナーを求めてグドルーンの家へ行き、グドルーンの寝室に侵入して彼女と関係を結んでしまう。クリスマスが近づくと、この二組の男女はヨーロッパ旅行に出かけ、雪深いアルプス山中に滞在する。グドルーンは愛もなく彼女の肉体を求めて近づくジェラルドから心が離れ、彼女の芸術的才能を理解してくれるドイツ人彫刻家レルケ（Loerke）と共感し合う。そして彼女はドレスデンにあるレルケのアトリエへ行くことにした。これを聞いたジェラルドはレルケをなぐり倒しグドルーンを絞殺しようとしたが、途中で殺意を喪失すると、そのまま雪の中をさまよい、翌日死体となって発見される。ジェラルドと男同士の永遠の友情を結びたかったバーキンは彼の死を悼む。

ユング心理学[1]で言う人間の「アニマ」·「アニムス」の機能は、不完全な自分を意識し、それぞれの性において欠如している異性の「アニマ」「アニムス」を憧憬し、恋慕することにある。「アニマ」·「アニムス」は、男性と女性の恋愛関係や結婚関係を決定づける元型であり、私たち個々人の「異性に対する感情生活や性行動」を根底から規定する「集合的無意識」の元型である。私たちは「こころの内界」において、本能的に「アニマ」·「アニムス」との肉体的・精神的合一、すなわち「対立物の結合（コニウンクティオ）」を望む。この場合の「対立物の結合（コニウンクティオ）」とは、不完全な自己に欠けている性的要素を異性と一体化することによって相補的に満たそうと努力する営為である。「結婚」というものを、「制度としての結婚」や「幸福を求める結婚」としてではなく、魂（無意識）の部分での結婚、すなわち「救済としての結婚」として捉えていくことをめぐって、前回の同名の論文に引き続いてそのテーマを追究したい。

相手に投影されたイメージと現実とをはっきりと区別し、無意識内の内容を少しずつ丁寧に統合していく愛の営みはユング心理学の「個性化」に相当する。男女の関係は、「個性化」に向かって二項対立から統合へ向かう「コニウンクティオ」の実践である。すなわち、男女はそれぞれの「アニマ」と「アニムス」を投影し、統合し合って、お互いが「自己」に到達して人格を完成する「個性化過程」を歩むのである。

本論考では、『恋する女たち』全編の中でこの過程が連綿と展開されていることに注目する。『恋する女たち』の第 1 章から第 8 章までの登場人物を素描すると次のようになる。

ハーマイオニ（Hermione Roddice）・・・頭でっかちの「自我肥大」の女性。アニムスが彼女の心を支配している。元恋人のバーキンから彼の「アニマ」を受け取ることができなかった。

アーシュラ・・・アニマが健全に育っている女性。だが、自分を知

らないためにバーキンの助けによって「個性化」しようとしている。

グドルーン・・・ジェラルドと似たようなタイプ。外面的なものしか見ず、人間の魂というのを「無意識」の世界から見ようとしない。ジェラルドと恋愛関係になるが、両者とも「意識」の世界にとどまるため破局する。

ジェラルド・・・炭鉱王。産業主義・機械主義の権化のような存在。産業のメカニズムを信奉し、他者の心の奥にまで配慮することなく、自分のためにだけに生きる。自我肥大の末に、最後には破滅する。個性化には程遠いタイプ。

バーキン・・・「個性化」をひたすら信じ、本来の「自己」を省察しようとする人間。アーシュラとの関係から、「個性化」を成し遂げる。

それぞれの人物造型の在り方について、元型「アニマ」「アニムス」や「個性化」を通して考察することができる。本稿では「救済ある結婚」とは何か。そして「救済ある結婚」は、「個性化」とどう結びついているのかを焦点に小説を読み解いていく。なお全 31 章中、第 1 章から第３章までを考察した前回の論文（Ⅰ）を受け継いで、本論考（Ⅱ）では、第４章から第８章までを考察していく。さらに今後は、シリーズで副題を変えながら、当面、第 9 章から第 15 章までを（III）、第 16 章から 22 章までを（Ⅳ）として論じていきたい。

2.　第 4 章　水に飛び込む男（Diver）

2.1.　第 4 章のあらすじ

翌週の土曜日の朝、アーシュラとグドルーンは、散歩をすることにした。地元の湖、ウィリー・ウォーター（Willey Water）へ向かった。彼女たち

が湖に着くと、ジェラルド・クリッチがボート・ハウスから桟橋を走り抜けて水の中に飛び込んだ。その大胆さにグドルーンはアーシュラに「うらやましい」と呼びかける。さらにグドルーンは「男なら何かしたいと思えば、それをやれる。女のように、数限りない障害があるってことはないのよ」という。ジェラルドは二人に気づいて手を振る。アーシュラとグドルーンはそのまま散歩を続けた。ショートランズまで来ると、ジェラルドの家を見付ける。ジェラルドの家は、ジェーン・オースティンやドロシー・ワーズワースの 18 世紀頃のたたずまいを　残　している。アーシュラはジェラルドが外面を取り繕った生活をしていると言う。というのは、ジェラルドが 18 世紀風の外装とは裏腹な最新式の設備の内装を裏では施しているからだという。アーシュラはグドルーンに、ジェラルドの不幸な出来事、すなわち納屋の中で、鉄砲でいたずらをしていて、弟に鉄砲の中をのぞけといって脳天を吹き飛ばしてしまったという話をする。グドルーンは、そのことがジェラルドにとってトラウマになっているだろうという。アーシュラは事件の背後に「意識されない意志」があったのではないかという。しかし、グドルーンはあくまでそれは偶発の事故だという。

2.2.　ジェラルドの外界に対する「意識的」なアプローチ

グドルーンは、男勝りの性格だから、ジェラルドの若々しい精力的な活発さをうらやましく思う。グドルーンはジェラルドに彼女のアニムスを投影している。あとでカップルになる二人だが、結末から先に言ってしまうと、二人は「個性化」にいたる「救済としての結婚」をめざしておらず、二人の仲は結局破綻する運命にある。グドルーンはロンドンで絵の修行をしていて、少し有名になった現代的で知的な女性である。引っ込み思案のアーシュラよりも社交的であり、人生経験も豊富である。グドルーンのちょっと冷たい感じが現代的な雰囲気をただよわせる。

グドルーンについて、ユング心理学の観点から言うと、「アニマ」が未

成熟であるので、アニムスが勝っているのだろうと想像される。結婚観も「個性化にいたる結婚観」＝「救済ある結婚観」を持たないため、グドルーンは、結婚が単に「自由」を束縛するものにすぎないとして、ジェラルドとの結婚の約束も破棄してしまう。グドルーンは、「女性性」を「弱さの表れ」だとして、「女性性」を抑圧しているが、一方で、女性的かつ母性的なアーシュラのそばにいると、安心感を覚える。グドルーンは実はアーシュラの「女性性」に頼って彼女の内部でアニマとアニムスのバランスをとるよう、アーシュラから「アニマ」を補完しているのだ。

ジェラルドとグドルーンは似たものカップルであり、互いに「アニマ」が不足しているため、「アニマ」を充填できない。したがって、ジョエラルドにとってグドルーンは適した女性ではない。ジェラルドはそれに気づかず、自分の「母親コンプレックス」をグドルーンに投影しているので、彼はグドルーンのアニマを追い求める。だが、彼女の中のどこにもそれに相応しいアニマはない。グドルーンは、アーシュラのような成熟したアニマをまだ備えておらず、ジェラルドが求めるようなアニマを今のところ引き出すことはできないのだ。このままでは、二人の破局は目に見えている。

そもそも結婚は、内なる生命エネルギーが渇望する「対立物の結合」である。「完全な人間」になる上で、男性と女性の結婚が「個性化」を遂げるための最も近道である。結婚にはグドルーンの言うような俗的な「一種の経験」といった低レベルの問題にとどまることなく、聖なる意味合いが込められているのだ。「アニマ・アニムス」を通じた「個性化」を成就するためには、「結婚」という「対立物の結合」を抜きにすることはできない。もちろん、「個性化への道＝個性化過程」には、結婚以外にも道はいろいろあるが、「アニマ・アニムス」を通じた「個性化」ほど、人間の本性に沿い、充実した個性化の道はないのである。グドルーンにしろ、ジェラルドにしろ、「救済ある結婚」に対する認識が浅い。その浅薄さがのちに悲劇を招く。「救済ある結婚」については、さっそく次の項で検討したい。

ところで、第4章にあるクリッチ家の屋敷のたたずまいは、18世紀頃のものであるが、ジェラルドが最新式の設備の改良を内装に施しているのは、まさに外面と内面が相違していても、彼は何も気にならないことを象徴している。つまり、ジェラルドが内面の成熟を待つことなしに、外面だけを装って人が通り過ぎて眺めていくだけの生活態度をしていることに他ならない。立ち止まって、じっくり対話をし、その内面まで歩み寄って人と交流しようとする姿勢がない。心の内面という世界、すなわち、「無意識」の世界を軽視すると、かえって「無意識」に振り回される結果となる。

ジェラルドの弟へ発砲した銃の暴発事故について、グドルーンは単なる偶発的な事故として見なしているが、アーシュラは、グドルーンより彼女の内面＝無意識が成熟しているために、その暴発事故がジェラルドの無意識から発した行動であることを見逃さない。アベルとカインのように兄弟内での競争がそうさせたのではないかとアーシュラは疑っている。ここにもジェラルドの外界に対する「意識的」なアプローチが内界の「無意識的」なそれよりも優っている様子がうかがえる。

2.3.「救済ある結婚」とは何か

2.3.1　アニマとエロス

結婚を「幸福」のイメージで捉えがちな私たちの文化のなかでは、結婚とは満足感にひたるもの、心の平安と充足感を求めるものと考えられている。しかし、「救済としての結婚」＝「個性化」という視点で見られる結婚観は、結婚を「自己認識」と「個性化」のための一つの道程だと考えるものである。それは、『恋する女たち』の中で、ずっと陰に陽にルパート・バーキンが主張していることでもある。

まず、「個性化」に関して言うと、「個性化」は、一口に言うと「人格の完成」である。「自己実現」と言い換えてもよい。「個性化」において「アニマ」は大きな役割を果たす。「アニマ」は、人と人とを結びつける手助

けをし、男性を人格の統合と成熟に導く。つまり、男性の「個性化」は、女性という伴侶を持つことが前提条件であるという考え方もできる。もちろん、人にはアニマがもともと備わっているのだが、より一層のアニマの力を異性との伴侶から受け取る必要がある。男性の場合、女性のアニマの力の助けを借りて「個性化」を達成することができる可能性が大である。我々の「無意識」の領域の奥深くには、全体性の中心となる「自己」という理想的な人間像がある。「自己」に到達する「個性化の過程」は、人生において、人格を磨き人間としての価値を向上させていくことであるが、それにはアニマの助けがいる。

アニマが「個性化」に欠かせない人格的条件だとすれば、「性的欲望」は必要ではないのだろうか。「性的欲望」の根底には、単なる肉体的な欲求の充足だけではなく、「聖なるもの」との接触を求めていることがこれまで軽視されてきた。人類の歴史や文学を見ても、「聖なるもの」との接触を通して感得される「性的欲望」の恍惚感があるのは確かだ。ただし、意識のレベルが低い人間は、この宗教的感得が生じることはない。性の充足が単に動物的交わりにとどまり、宗教的境地にまで達することはない。その場合、自己中心的な欲望と貪欲の中で生きて、「個性化」からは程遠い。つまり、「個性化」という目標を本能的に持っている人間は、「性的欲望」を「個性化過程」へと導いていくものにする。ユング研究所の所長であったスイスの精神科医アドルフ・グッゲンビュール - クレイグ（Adolf Guggenbuhl-Craig, 1923-2008）は性欲と宗教の関係について次のように述べている。

> Freud sought in his own very impressive way to understand all of the so-called higher activities of man（such as art, religion, etc.）as sublimated sexuality. We can attempt to turn this around and to ask: can the totality of sexuality be comprehended from the viewpoint of individuation, of the

> religious impulse? Are the deeply sexually-colored love songs of medieval nuns really, as Freud would have it, expression of frustrated eroticism? Do the many modern songs and the folk-songs that sing sentimentally about love and leave-taking have to do only with the unlived sexuality of adolescence? Or are they symbolic forms of expression for individuation processes and for the religious quest? [2]
>
> フロイトは彼一流のきわめて印象的な方法で、いわゆる人類の高等な活動（芸術・宗教のような）のすべてを、昇華された性として理解しようとした。われわれはこれをひっくり返して、次のように問うことができるのではないか。―― 性の全体は、個性化、すなわち宗教的な衝動の観点から理解することはできないだろうか、と。中世の尼僧たちの深く性的に彩られた愛の歌は、フロイトならばそのように解釈しただろうが、本当に抑圧されたエロティシズムの表現なのだろうか。愛と別れを感傷的に歌う現代の歌やフォーク・ソングの多くは、ただ生きられることのなかった思春期の性とのみ関係があるのだろうか。いやむしろ、それらは、個性化過程と宗教的な探求についての象徴的な表現なのだろうか。[3]

A・グッゲンビュール - クレイグは、性欲と宗教の関係について上のように考察した。『恋する女たち』の中では、何度も出てくる問題である。この問題の核心は、「エロス」と「アニマ」の関係である。「エロス」というのは、「生身の人間」の「関係性の原理」である。「エロス」は人間のあらゆる創造力の中心にあり、人と人との間、人と神の間の関係性にあって、「生命力」を支えている。「アニマ」は男性の「エロス」そのものではなく、男性の「エロス」をかき立てるものにすぎない。「エロス」は「関係性の原理」であるとともに「生きる衝動」ととらえるべきである。女性にあっては、「アニマ」は、もともと本性（ほんせい）であるため、魂の発見は、自分自身

の最も深い、最も真実な「本性」を掘り下げていけばよいので、男性とは「アニマ」との対処の仕方が異なっている。

「救済のある結婚」は、上でA・グッゲンビュール - クレイグが示唆しているように、人格の全体性を獲得する「個性化」と切り離せない。では、「対立物の結合（コニウンクティオ）」を促進する「エロス（生きる衝動）」はどのように働くのだろうか。A・グッゲンビュール - クレイグの先の引用には、「中世の尼僧たちの深く性的に彩られた愛の歌は、フロイトが言うように、本当に抑圧されたエロティシズムの表現なのだろうか。愛と別れを感傷的に歌う現代の歌やフォーク・ソングの多くは、ただ生きられることのなかった思春期の性について語っているのだろうか」というように「エロス」の存在に注目しているくだりがあった。「コニウンクティオ」を促進し、「想像力」をも増強する「エロス」は、生命に「ぬくもり」を与え、生きとし生けるものに希望を与え、犠牲的生活を可能ならしめる力も与えてくれる。「エロス」は、「想像力」をかきたてるばかりでなく、「生命そのものの原動力」である。しかし、「エロス」を人間相互のものでなく、自分自身のためにだけに働かせようとすれば、より高い次元の意識の達成（個性化）を望むことはできない。「エロス」の目標を「対立物の統合」、「意識と無意識の統合」、「精神と肉体の統合」という高い次元のもとに置かなければならない。「エロス」を「個性化」から切り離して、性的欲望に関するものとして限定したり、自分のエゴだけにあてはめたりしてはならないのである。『恋する女たち』の中のハーマイオニにはその視点が欠けていた。「エロス」によって「想像力」は活性化され、無限の自由が与えられる。想像力を妨げるものは何もない。歌や詩や小説、音楽、絵画などの芸術活動は、フロイトのいうような「抑圧されたもの」や、「性を昇華したもの」から出てきたものではなく、「エロス」によってかきたてられた創造的活動そのものなのである。

「個性化」に結びついた「救済としての結婚」のパートナーを見つけな

ければならないが、なかなか難しいことである。恋愛の際は、「エロス」が開花する。うまく行けば、次の段階では、より高い次元の「霊的なやり取り」が無意識の中で行われていく。「コニウンクティオ」というアニマとアニムスの二項対立が統合へと懸命に向かっている姿がそこに見られる。すなわち二人はそれぞれの「アニマ」と「アニムス」を投影し、統合し合って、お互いの人格を完成していく「個性化過程」を歩んでいくのだ。

2.3.2 「結合の神秘」

このようにA・グッゲンビュール - クレイグは「人類の高等な活動」についてのフロイトの性昇華論に疑念を呈した。そのことによって、彼はエロスとアニマの関係に、「個性化過程」が関与していることに論を進めたのである。そして、その「個性化過程」の中で、「アニマ」と「アニムス」といった二項対立が統合しあって、お互いの人格を完成しあう姿を見届けた。では、二項対立が解消していくユングの「結合の神秘」とは何であろうか。

私たちの存在のなかには、「アニマ・アニムス」、「能動的・受動的」、「明と暗」、「陰と陽」、「男性と女性」、「遠いと近い」などいろいろな対立的要素があり、それらは緊張をはらみながら、統合されることを求めている。「内なる対立物の結合」、これこそが限りない忍耐とたゆみない内省を必要としながら「人格の完成」に向かっていく原動力である。この「人格の完成」という目標を成就するのに、「男性が女性を必要とし、女性が男性を必要とする」。それはユングの「個性化理論」の中で普遍的原理として位置づけられているものである。

対立物の究極的な結合は、男性と女性の「間」で起こるのではなく、「それぞれの個体の心の内部」で起こることを忘れてはならない。意識と無意識が統合されて全人的な人格をつくりだそうとする魂の欲求は、私たちの内にあるさまざまな衝動のうちでも強力なものである。「こころの全体性」

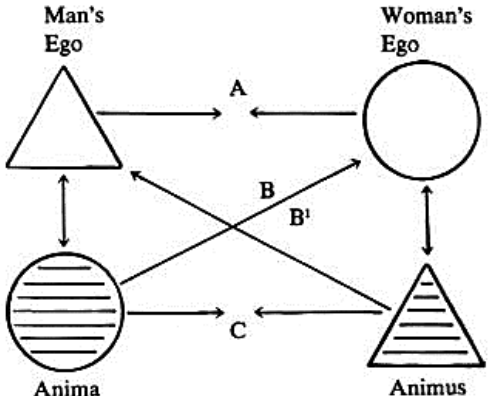
を求めるレベルになると、「神を見出そうとする宗教的衝動」と「個性化」＝「自己実現」をめざす「ユング心理学」との距離はさほど遠くない。「男性性」と「女性性」の統合である「対立物の結合」（コニウンクティオ）のイメージは、人格内部の対立物、「意識」と「無意識」の統合を象徴するイメージに他ならない。対立物の結合は、さきに述べたように、投影・被投影の男女の「間」ではなく、「個人の人格の中」で成就するものである。バーキンがのちに男女間について述べる「星の均衡」は、その「個人の人格の中」で起こることを示している。

「結婚」というのは、「制度としての結婚」ではなく、「魂（無意識）の部分での結婚」がとり行わければならない。そのためには、相手に投影されたイメージと現実とをはっきりと区別し、無意識内の内容を少しずつ丁寧に統合していく作業が必要である。これが、「愛」の営みである。ここで注意しなければならないのは、愛の実行者は、あくまでも「エロス」を携えた「生身の人間」であるということである。

2.4.「個性化」に結びつく「愛」における「アニマ」・「アニムス」の役割

ハーマイオニについては、下記の図を使って、いかに彼女が「自我肥大」に陥っていて、それ故、バーキンから見放されていることは、同名論文（Ⅰ）の下図（Figure 1）を援用して説明した。[4] 次はいよいよ、アーシュラとバーキン、グドルーンとジェラルドの関係を紐解いていかなければならない。結論を急げば、アーシュラとバーキンの関係は、下図の C の関係であり、グドルーンとジェラルドは下図の A の関係である。ハーマイオニとバーキンは、B^1 線の関係である。バーキンにはそれがわかるからこそ、ハーマイオニから距離を置こうとするが、彼女は必死で追いかける。ハーマイオニの「アニムス」が理想として追い求めているのは、アーシュラとバーキンのような下図Ｃ線の関係である。したがって、ハーマイオニはアーシュラとバーキンの関係に猛然と嫉妬する。

Figure 1



今述べてように、前回の論文（I）でこの図を説明したが、再び簡単にこの図を説明すると、まずA線が、自我（Ego）という人格のもとに、意識的なレベルでの関係が結ばれている状態である。しかし同時に、二人の間にはB線、B^1線によってアニマ･アニムスの投影が行われている。B線、B^1線によって男女がたがいに肯定的なアニマ・アニムスを投影し合う場合には、私たちは「恋の始まり」という状態となり相互に魅了され合っている。だが、最も男女が引きつけ合う力、磁力とも言うべき強力な力は、C線である。C線は、女性のアニムスと男性のアニムスが無意識の中で互いに相互関係をむすぶ状態で、「恋」ではなく、「深く愛し合っている状態」である。

アーシュラとバーキンが仲たがいをしながらも引き合うのは、お互いに「アニマ」と「アニムス」をC線上で投影しているからであって、小説の終わりごろには結果的に成功して「救済ある結婚」に漕ぎつける。言い換えれば、C線を育んで、互いの「個性化」に結びつく恋愛を成し遂げるのである。では、「個性化」に結びつく「愛」とは何か。

2.5.「個性化」に結びつく「救済ある結婚」における「アニマ」･「アニムス」の役割

そもそも、なぜ男性と女性が引き合うのだろうか。ただ生殖のためにあるとは人間の場合考えにくい。人間には動物的側面とはちがった側面、つまり精神面があるはずである。だが、動物的で、本能的な部分と精神的な部分とはどのような関連性があるのだろうか。議論がやや戻るが、そこで持ち出されるのは、ユング心理学の「元型論」である。「元型」には、「グレイトマザー」、「影」、「アニマ・アニムス」、「自我」、「自己」、「老賢者」、など数多くあるが、「元型」とは、本能にも似た人間の行動パターンである。特に男女の場合に適応されるのは､「アニマ･アニムス」という「元型」である。

「アニマ・アニムス」という「元型」は、「集合的無意識」の中に存在する。アニマは男性の中に存在する女性性であり、アニムスは女性の中にある男性性である。Figure1 にあるように男性も女性もそれぞれのアニマとアニムスを相手に投影する。アニマもアニムスも私たちの人生から容易に消え去ることのないパートナーである。これら無意識の存在を否定し、拒絶し、無視すれば、それらはたちどころに牙を向き、その否定的な側面を露わにする。逆にそれを受け入れ、理解し、関係ができあがると、それらは積極的な側面を見せ始める。では、無意識のアニマ・アニムスと向き合っていくにはどうしたらよいのか。

第一段階は、現実の異性と対話をして、理解を深めていくことである。対話をすることで初めて、私たちは､「真実の自分」と「真実の他人」を観察することができる。理解し合うには、いろいろな方法で自分自身の考え方を述べ､かつまた相手の言うことにも注意深く耳を傾ける必要がある。対話をすることによって、相手を理解するということは、自分のアニマ・アニムスを投影している以上、自分の姿を鏡に映すように、自分の無意識と向かい合いことにもなる。これは「意識の拡大」の第一歩である。無意

識の中にあるアニマは実は「意識化」されることを求めている。この場合のアニマは、男性の中の女性性にとどまらず、もう少し大きな意味での「生命の元型」「集合的無意識の代表」だといっても過言ではない。

アニマが属する「集合的無意識」は実在する「内界」のことである。宗教的には「霊的世界」と呼ばれているが、夢、空想、幻想、偶然のひらめきなどはアニマの産物と言ってもよく、それが「意識」と統合されれば、アニマには心の成長と発達にとってはこの上ない滋養となる。

アニマ・アニムスは、「集合的無意識」の擬人化であるともいえる。「アニマ・アニムス」の本当の心理的な目的は、「自我」と「集合的無意識」とを結びつける働きをすること、いわば、「意識の世界」と「内なるイメージの世界」との間に橋をかけることである。したがって、アニマ・アニムスを理解することは、すなわち「無意識の理解」を促進することである。現代人の場合、忙しすぎて「内なる世界の現実性」を理解する必要性すら感じることがないのではないか。アニマ・アニムスが生身の人間に投影されても、「投影の引き戻し」をしない場合、投影したアニマ・アニムスと現実の相手の姿があまりにも違うため、相手に幻滅し、男女の関係がぎくしゃくすることが多い。「投影の引き戻し」をしない時、「アニマ・アニムス」を相手に投影した事実にすら気づかず、無意識の「アニマ･アニムス」が機能不全に陥ってしまう。「投影の引き戻し」とは、投影したものと現実とを比較検討し、高次の段階に立って、「個性化」に向かう努力をすることである。

『恋する女たち』の男女の目標が「人生と恋」から「人生と結婚」に発展するのは、世間的な制度的な結婚への妥協ではなく、「救済のある結婚」の重要性をアーシュラとバーキンのように本能的に悟るからである。一方、グドルーンとジェラルドは小説の最後まで「救済としての結婚」の意義を見出せなかった。彼らは「魂の伴侶」としてお互いを認識し合わなかったのである。

3. 第 5 章　列車の中（In the Train）

3.1.　第 5 章のあらすじ

ルパート・バーキンがロンドン行きの列車を待っていると、偶然ジェラルド・クリッチを見かける。ジェラルドがバーキンに歩み寄っていっしょにロンドンへ行こうと誘う。彼らは食堂車に乗り込み、新聞の社説について議論する。社会を変えるには、新しい価値をもったリーダーが必要であるという話をする。バーキンは物質的な富と生産にのみに偏る社会を批判する。一方ジェラルドは、物質的なところからでないと、何も始まらないという。「働くため、あるいは物を生産すること」が生きるということなのだという。バーキンは物質的なものが満たされたらどうするのかとジェラルドに聞くと、ジェラルドはまだ物質的なものが充分満たされていないという。次に、バーキンは何のために生きているのかをジェラルドに聞くと、ジェラルドは「自分のために物を見付けたり、経験を積んで物事をうまく運ぶようにしたりするためだ」と答える。一方、バーキンが望むのは「愛の極限」であり、「人生はひとつだけのこと、真に純粋な単一の活動が必要で、たとえばそれが愛であることもある」と言う。バーキンは一人の女性を深く愛し、結婚し、人生の中心にしたいという。だがジェラルドは、「人生には中心などなく社会のメカニズム（機構）によって人為的につなぎあわされているだけだ」という。そう言いながらも、ジェラルドは無意識にバーキンのそばにいたいと思い、バーキンの暖かさを感じ、その交流を楽しむ。バーキンはこの頃、ジェラルドの冷たさとかたくなさを感じていた。その日バーキンは、ソーホー（ロンドンのボヘミアという自由放縦な社交界の中心地）で泊まる。バーキンは、ジェラルドを誘って、ピカデリー・サーカスのカフェ・ポンパドアでハリディ（Halliday）というボヘミアンの友だちに会う。

3.2. ジェラルドの「影」としてのバーキン

『恋する女たち』という小説は、ジェラルドとバーキンの対照的な生き方を描いている。ジェラルドの生き方は、物質主義的な繁栄を追求しており、活動的であるが、心が不安定で絶えず空虚な心をいだきながら、働き続けている。「本来の自己」を知るきっかけがこれまでなかったために、物質主義的な人生がすべてだと思い込んで、わき目も振らず突っ走ってきた。それは、母から無理やり押し付けられた偽物の自我―ペルソナ（仮面）をかぶり続けなければならなかったからである。ジェラルドの母親は、その高貴でエリート意識の強い考え方を息子のジェラルドに押し付けてきた。ジェラルドは、自我意識の強い母の考えに従って成長してきたので、ユング心理学の「個性化」のゴール、「自己」を全く意識することなく「自分の理想とする自我」を目標とし、「自我同一性」を人生の真実だと信じてきた。そこで、たくましく物質的に満ち足りたエリートの道を突き進んでいて、本来あるべき「個性化」の道を歩むことがなかったのである。したがって、「救済ある結婚」のパートナーをつとめるような女性との恋愛の意義もわかっていない。

ところが、「本来の自己」を知るきっかけが突然現れた。ジェラルドの「影」をつとめるバーキンである。「影」とは、「自分がなりたくないと思うもの」、「苦手なもの」と自分が感じている元型であり、「意識」が「無意識」に押し込めているものである。私たちは「影」に対して恐怖や怒りなどの感情を覚える。もともと、自らのコンプレックスに直面することを回避するため、防衛機制として、本能的にそれを他者に「投影」するのが「影」である。投影されたものが、自分の「影」だと認識しネガティブな「影」と和解することがアニマ・アニムスに見られた「投影の引き戻し」である。「影」は、現実の世界で生命力を与えられていない、つまり「生きられていない自分の一部」なので、その「影」を自分の「意識」に取り込むことによって、今までの自分に「新しい要素」を加え、より豊かな自分になる可能性を開

いていく。そうであるならば､｢投影｣そしてそれに続く｢投影の引き戻し｣というのは、自分を高次の段階に引き上げるためのむしろ喜ばしいステップだと考えられるのである。

精神的に未成熟で「影」とは徹底的に対峙することができなかった場合、「影」が非生産的に働く場合が多い。だから「影」は「悪」と混同されたりする。未熟な一面は厄災を呼びやすく、「影」に呑み込まれることで、危機を招くことがある。それを避けるためには、「影」をもともとは、自分自身のものであると意識し、「影」と向かい合ってじっくりと「対話」をすることが必要である。上のジェラルドとバーキンの会話の場面がよい例である。「影」を他者に投影したままで自身を鑑みず、他者の非難ばかりに終始してしまうことがあるが、そのときは、人格を高めることはできない。その反対に、投影した「影」が、自身の「影」であることに気づき、対決し、対話し、統合できれば、その成果を自分のこころの糧とすることができる。ジェラルドとバーキンの会話を見た場合、ジェラルドはその重要な可能性をむしろ冷笑して、バーキンに投影している自分の「影」に正面から向き合おうとしていない。「影」にもっと真摯に向き合うことがジェラルドに要請されている。

4. 第 6 章　はっかリキュール（Crème de menthe）　,

4.1. 第 6 章のあらすじ

ロンドンに到着して数時間後に、ジェラルドとバーキンはカフェ・ポンパドア（Café Pompadour）で再会した。ジェラルドがカフェに入っていくと、芸術家ふうに短い髪にしたブロンドの女性がバーキンとテーブルに座っていて、バーキンはジェラルドに彼女を紹介する。彼女はミス・ダーリントン（Miss Darrington）という名前で通称はミネット（Minette）という。画家のモデルをやっていた。ジェラルドは残酷に近いほどの本能的に彼女を愛撫したいという気持ちを感じた。彼女を思いのままにすることができ

ると感じた。彼女を自分の力で組み伏せることができると確信した彼は、征服欲でいっぱいになったのである。彼女の情夫、ジュリアス・ハリディ（Julius Halliday）がカフェに入ってくる。ハリディはミネットが身ごもったので田舎に置いてきたのに、勝手にロンドンに帰ってきたことを怒っている。ハリディとミネットが口論を始めたので、バーキンはハリディをなだめる。若いロシア人のマキシム（Maxim）が加わる。ジェラルド、バーキン、ハリディ、ミネット、マキシムの５人はカフェを出て、ハリディの家へタクシーで向かう。ミネットがタクシーの中でジェラルドの手を握ると、彼は情熱が掻き立てられた。家に着くと、しばらくしてバーキンはジェラルドに「もう寝る」と言って寝室に行ってしまう。もともとバーキンの家で、ハリディに貸している家である。ハリディはジェラルドに泊まっていったらどうかと聞き、ジェラルドは賛同する。バーキンを除いた４人に部屋数は二つ。マキシムとハリディが寝室をシェアすると、ジェラルドとミネットが一緒に寝ることになる。ミネットは、「私をあなたたちはなぶりものにするんでしょう」と言いながら、ジェラルドとベッドを同じくする。ハリディも承知の上である。関係を結び、翌朝、ジェラルドは眠っているミネットを起こさずに、出て行く。

4.2. ジェラルドのドン・ファン的傾向

アニマ・アニムスという元型は生身の異性に投影されるが、ひとたび投影が起こると、その投影の担い手である相手をめぐって、様々な性的感情や空想が引き起こされる。アニマ･アニムスは極めて「心的なエネルギー」に満ちた存在である。その「心的エネルギー」はまずは「性的なレベル」で私たちに作用してくる。生身である人間に投影されるのであるが、日常の相手に対しては、日常生活が抑圧と緊張の中にあるため、人はありきたりの平凡な人間性を仮面にかぶっていなくてはならない。生身の人間性はあまりにも傷つきやすいのだ。そこで、アバンチュールを求めて、日常生

活から離れたところで、アニマ・アニムスを投影することがありうる。ボヘミアンという非日常的な環境のもとでジェラルドは代替物としてのアニマを求める。日常では得られないアニマを求めて、すなわち「変性意識」を求めて、夜の酒場や行きずりの恋、隠れた許されぬ恋、倫理的抑止力が緩まるボヘミアン的環境という状況下の恋、に身を置くのである。

ジェラルドは、高貴でエリート意識の高い、固定した一面的な精神態度を母親から強要されたので、「母親コンプレックス」がある。そういう人間は同性愛者かドン・ファンになることがユング心理学で知られている。母親にアニマを感じたいが、禁じられているので、その代替物を探し求めるのである。つまりユングが言うように、倒錯的に「同性愛」に走ることもあれば、恋を漁るようにして「ドン･ファン的な行動」をとるのである。ドン・ファンは「女性に対する恐れの裏返し」から、女性を次々と征服しては、女性に対する勝利感を味わう。その一方、母に対する愛は永遠に続く。ドン・ファンはいろいろな女性にアニマの期待を寄せるが、最初から母親へのアニマではないことが分かっている。疑似的な恋愛は、一時的な官能の快楽はあっても、魂は癒されず発展もなく、空しい行為となる。

ロレンスがこのようなジェラルドのミネットとの行為を小説に加えたのは、いかにジェラルドが魂というものを尊重しないのか、世の中は自分中心で動いているといった一種の自我肥大、あるいは、女性軽視につながっているかを描きたかったのであろう。自分の力を誇示すること、そしてその力を使って他者を支配することが、このタイプが求める快感である。そのようにしてその都度、自分の存在価値を確かめなければならない。ジェラルドは、『救済ある結婚』にあたるような本当のパートナーを見つける機会が今のところないので、ただ自分の力を確認するためだけにドン・ファン的行動に走る。こういうタイプは、人に対して冷淡であるから簡単に女性を捨てることができる。なぜ、冷淡であるのかというと、自分の価値観をくつがえすようなパートナーは必要ではなく、本気で愛する女性に対

しては、支配することができないと同時に支配されてしまう側になるから、それを恐れて手軽な女性と相手をし、本気になりそうになったら、自分から先に相手を捨てるのである。そして別の女性に偽りの感傷的な情熱を注ぎこみ、同じことを繰り返す。ジェラルドが個性化を前提とした『救済ある結婚』のパートナーを求めるならば、本気に愛する気持ちにならなければならない。彼は、そのジレンマに陥っている。

5. 第 8 章　ブラドールビー（Breadalby）[5]

5.1. 第 8 章のあらすじ

ハーマイオニの邸宅のあるブラドールビーは、コリント式の柱のあるジョージ王朝風の家でダービーシャーの中でも目立って柔らかい、緑の濃い丘に囲まれていた。グドルーンとアーシュラは二度目の訪問をしようとしていた。翌日の朝食のあと、バーキンを除いた客たちはハーマイオニの庭の池で泳ぐことになった。アーシュラとグドルーンは見物する。グドルーンはジェラルドの豪快な泳ぎに感心している。昼食後、「人間の社会的状況」が話題になった。ジェラルドは「社会は一つのメカニズムだ」という一種の機械論を展開する。人々はそれぞれ独自の適応した小さな仕事に就き、大衆の役割を果たせばよいというのが、ジェラルドの持論である。ハーマイオニは、「人間は平等で権力だとか支配だとかは終わりにすべきだ」という。彼女の言葉は沈黙のうちに受け入れられた。皆がテーブルを去ったあと、バーキンは人間の個性的な生き方を説き、ハーマイオニに反発する。「実際には人々は精神が異なっていて、不平等である。精神的に純粋な相違があるので、たとえ社会的な身分の違いがあっても、平等も不平等も問題にならない」とバーキンは真っ向からハーマイオニの意見に反対する。少々言い過ぎたと思ったバーキンは、ハーマイオニと仲直りをしようと思い、彼女の部屋を訪れた。ハーマイオニは、バーキンという存在が自分の「生命」に対する障害だと考え、彼に対して殺意を覚え、文鎮用の石

の珠玉で彼の頭を打った。手もとが狂ったが彼はがくんと本の置かれたテーブルの上に倒れた。彼は体を捩じって彼女の方に向き直り、テーブルを押し倒して彼女から逃れた。彼は頭を押さえながら、裸になって外の自然に触れる。そして自然の中で彼は心と痛みを癒す。頭部の痛みがひどくなったので、近くの駅に向かった。彼はハーマイオニに一筆書くことにした。彼女がそうしたいという気持ちがわかるので、自分（バーキン）をなぐったことは気にしなくてよい。でも二人の仲は終わったと告げる。一方、ハーマイオニはあくまで自分が正しいと確信していた。自尊心だけが彼女の支えだった。

5.2. ハーマイオニとバーキンとの関係の破局の意味するもの

5.2.1. ハーマイオニの「自我肥大」

ハーマイオニの「個性化」の可能性は第 8 章の終わり方を見る限り、絶望的である。彼女は「自己」に到達できない。そのかわりに「自我」を肥大化させ、それを「自己」の代わりにしている。本当はそれではいけないと思うのだが、「個性化」にはある意味で勇気と試練が必要であるから、困難を覚悟しなければならない。「個性化」の道は、自分に真剣に向き合うことが要求される。それは、恐ろしくて、つらいことである。そこから逃げ回っている人も多い。ハーマイオニは、その大切さには少しは気づいているが、その意識に目覚めることは、自我を支えている「自分は高貴である」という自負心、優越感、エリート意識、美しいという自信、そういったものすべてを失う気がしてならない。バーキンはそんなハーマイオニを不憫と思うが、ハーマイオニには、まだ「自我」を包み込むような「個性化」の準備ができていないので、彼はハーマイオニを助ける気になれない。むしろバーキンは、ハーマイオニに引きずられて自分の破滅を恐れている。気の毒にも、バーキンに突き放されたハーマイオニは肥大化してしまった「自我」をどうすることもできない。

ハーマイオニとの関係が続いていたこの章では、バーキンはハーマイオニの自我をたえず攻撃することで、彼女との距離を保ち、飲み込まれないようにしている。「あらすじ」で述べたように、ブレードルビーで「人間の精神」についておたがいに口論した末、腹を立てたハーマイオニが瑠璃の文鎮でバーキンを殴打することで二人に破局が訪れる。ハーマイオニはバーキンに言い負かされて、自尊心が傷き、バーキンの頭を殴打した。彼女はせっかく「自己認識」を与えてくれる唯一の可能性を持つバーキンにかえって攻撃性を向けてしまい、自ら進んで破局へと向かうのである。

5.2.1. バーキンの「自然」からの治癒と「マゾヒズム」

ハーマイオニからの死の攻撃をやっとの思いで避けたバーキンは、部屋から出て、森へ向かう。森はよみがえりの自然、「集合的無意識」の象徴である。ここで、彼は自然すなわち「集合的無意識」からの洗礼を受ける。大粒の雨が降っていた。彼は服を脱いで、桜草、茂み、花の柔らかさを体に感じる。しかし、自然との接触としては、桜草はやわらかすぎた。『恋する女たち』から引用する。

> They [primroses] were too soft. He went through the long grass to a clump of young fir-trees, that were no higher than a man. The soft sharp boughs beat upon him, as he moved in keen pangs against them, threw little cold showers of drops on his belly, and beat his loins with their clusters of soft-sharp needles…. The leaves and the primroses and the trees, they were really lovely and cool and desirable, they really came into the blood and were added on to him. He was enrichened now immeasurably, and so glad.[6]
>
> 桜草ではやわらかすぎる。背の高い草の中をおしのけて、人間の背丈ほどの桜の若木が群がっているところへ行った。彼が鋭い痛みを

覚えながら、木群れの中へ入っていくと樅（もみ）の柔らかく棘立った枝が彼の体を打ち、腹に冷たい水滴（しずく）の雨を注ぎ、柔らかく棘立った針のような葉が束になって腰に当たる。・・・木の葉や桜草や樹木、みんな真に美しく、さわやかで、望ましい、みんな本当に血液の中に入ってきて、彼の体の一部となった。いま計り知れぬほど彼は豊かになって、これほどうれしいことはなかった。[7]

ハーマイオニからの文鎮で殴られ、その攻撃からやっとの思いで逃れてきたバーキンは、部屋から出て、森へ向かった。「集合的無意識」の象徴である森の中で、彼は自然からの洗礼を受けるためである。「身心を清める」つもりで、体を桜草にあてるのだが、桜草では柔らかすぎて、むしろ自然という「集合的無意識」を感じるとしても、「退行的」な気持ちよさを味わうだけにすぎなくなり、「個性化」へ向かう気構えにならない。同じ「集合的無意識」を感じるにしても、「退行」ではなく「個性化」は苦難の道を克服していかなければならないのだ。苦難の道を乗り越えて初めて成就するのが「個性化」なのである。バーキンは、決死の覚悟で、森の中で真の自由を知り、古い倫理観を捨てようと思っている。

バーキンが「桜草ではやわらかすぎる」として「樅（もみ）の木立」に入って、自らを鞭うつ所業に及んだのは、どうしてなのか。「マゾヒズム」という言葉が思い浮かぶ。「マゾヒズムとサディズム」「苦痛と快楽」「悲哀と喜び」などの二項対立形式が、「マゾヒズム」の中で受け入れられ、統合されていく。その統合過程は、果たして「個性化過程」と関係があるのか。次のA･グッゲンビュール - クレイグの言葉を引用して「マゾヒズム」と「個性化」との関係を見てみよう。紹介するにとどめて、この問題については、次回の論考で詳しく取り扱いたい。

The world is so full of suffering, and all of us suffer so greatly in body and

> spirit, that even the saints have difficulty understanding this. It is one of the most difficult tasks of the individuation process to accept sorrow and joy, pain and pleasure, God's anger and God's grace. The opposites—suffering and joy, pain and pleasure—are symbolically united in masochism. Thus life can be actually accepted, and even pain can be joyfully experienced. The masochist, in a remarkable and fantastic way, confronts and comes to terms with the greatest opposites of our existence.[8]
>
> 世界は極めて苦難に満ちており、私たちは、みな身心ともに大いに苦痛を受けているので、聖者さえもこれを理解するのに苦労するのである。悲哀と喜び、苦痛と快楽、神の怒りと神の恩寵を受け入れることは、個性化過程の最も困難な仕事の一つである。苦難と喜び、苦痛と快楽――という対立物はマゾヒズムの中で象徴的に統合されるもので、このようにして生は実際に受容されることができ、苦痛さえも楽しく経験できるものになるのである。マゾヒストは、驚くべき幻想的な方法で我々の実存の最大の対立物に直面し、折り合うに至るのである。[9]

驚くべきことに、「マゾヒズム」が「個性化」において一役買っていると A・グッゲンビュール - クレイグは説明している。「マゾヒズム」は多くの場合、「空想」の中のできごとである。だが、私たちはこの「空想」をあなどってはならない。「空想」は現実と同じくらい重要であるからである。[10]「個性化過程」の大きな仕事の一つは、人間にとっての暗い破壊的側面を経験することでもある。破壊性は、あらゆる生きとし生ける人間がそれと折り合わなければならない心理的現象である。破壊すること、抹殺すること、拷問することの喜びは、また性的手段の中でも経験される。『恋する女たち』の中でも、そのようなシーンや「空想」は多く見られる。他人を破壊する喜び、それは自己破壊に連なっており、「サディズム」と「マゾヒズム」

が表裏一体なのは、自己と他人との関係だけでなく、自己の内部の中でも両者が同居しているのである。というのは、自己破壊をしていくのは、本人自身であり、張本人は、元型「影」の中心だと考えられるので、人間として逃れられない運命である。[11]

以上のように、「マゾヒズム」という性の複雑な様相は、「救済ある結婚」と「個性化過程」という明るいテーマの裏側にぴったりと横たわっている。「個性化過程」が暗い側面や苦難の道を避けて通ることができないのはそのためだとも言える。「マゾヒズム」が「聖的」な象徴性を持つのもそこからくる。これについては、次回の論考で詳しく追究していく。

おわりに

「救済（salvation）のある結婚」と対比させられるのは、「幸福（well-being）のある結婚」である。「幸福のある結婚」と一般に認められるような結婚も、「救済のある結婚」の成就で裏打ちされていることもあるにはあるだろう。最初に、「『幸福のある結婚』と『救済のある結婚』を必ずしもはっきりとは区別できない」と言ったのは、このように「幸福ある結婚」が時として「救済のある結婚」に包括されているからである。「幸福のある結婚」と「救済のある結婚」を必ずしもはっきりとは区別できないものの、ここでは、あえて区別をしてきた。そうすることによって、「救済のある結婚」とユング心理学の「個性化理論」理論とに大きな関連性があることが明らかになるからである。グドルーンは小説の終わりまで、結婚を「幸福」の手段とし、アーシュラは、バーキンによって結婚とは「救済のある結婚」が真の結婚であることに気づいていく。

「幸福」とは、物質的要求が満足され、肉体的に快適であることが保障されている生活空間があることを言う。子供のいる場合、家族生活の満足度が幸福に関係してくることもあるであろう。一方、「救済」という観念は、宗教的文脈によって解釈される。この場合の「宗教的文脈」とは、神性と

の接触をもととし、「倫理観」や「死と生の意味」を問うことも射程圏内に入ってくる。「救済」への道程は、神や悪魔や世界と格闘し、死とすら対決して得られるものであるから、「幸福」の追求とは違って、苦痛が伴う。『恋する女たち』の登場人物たちが、恋愛において「命がけ」なのはそのためである。ユングの「個性化」は端的に言って「救い」の道を探求することである。「救い」を求める気持ちは「死」を自覚しながら「生」を強烈に意識することから生まれる。フロイトは生命を支える衝動を「エロス」と名付け、死への衝動を「タナトス」と名付けた。ところがC. G. ユングは、この二つの衝動は「魂の欲求」を説明するのに不充分だとし、それらとは異なる別の衝動を考慮すべきだと考えた。それが「個性化への衝動」である。「個性化」は、人間の本質的な動機づけの一部であり、人間は「集合的無意識」の中にその魂の根をもつ一方で、個人的な魂の発達を遂行していかなければならない存在である。「個性化」とは、別の言い方をすると、「内的な神性」、すなわち「自己」に到達することであるから、宗教的雰囲気を持つのは当然である。「個性化」は、長い魂の旅であり、「自己実現」への道である。その「個性化」への道程に、男性と女性という対極性の中で人間存在が特徴づけられていく。異性との愛と憎しみ、異性の像からの分離と結合は、救済論的な「個性化」に達するいろいろな人間性の確立の中でも、最も重要な要件である。注意しなければならないのは、「個性化」には、「神性」と「俗世界」との対決、「自己」の魂と「自我」との葛藤、「無意識」と「意識」との対決が避けられないことである。『恋する女たち』はそれを強烈な筆致で描き出す。様々な人間の活動が、「個性化」を目指しているとするならば、「結婚」もその「個性化」に向かうという動機の中に含まれているはずである。

（I）に続くこの論文（Ⅱ）で、入念に男女の高い次元の「無意識の中で行われる霊的なやり取り」を扱った。男女が協力して行う「個性化」とは、二項対立から統合へ向かう「対立物の結合（コニウンクティオ）」の実践

であり、男女はそれぞれのアニマとアニムスを投影し、統合し合って、お互いが「自己」に到達して人格を完成するというものであった。アーシュラとバーキン、グドルーンとジェラルドの関係を深くユング心理学で掘り下げ、「アニマ・アニムス」を通した「個性化過程」を次の論文でさらに追究する。

Notes

1 ユング心理学はカル・グスタフ・ユング Carl Gustav Jung、1875―1961）が創始した深層心理学である。

2 アドルフ・グッゲンビュール - クレイグ、Adolf Guggenbühl-Craig, *Marriage: Dead or Alive*, trans. Murray Stein (Zurich: Spring publications, 1977), p. 80. からの引用。以下、この本からの引用は、（Marriage 頁数）とする。

3 上の *Marriage: Dead or Alive*, の翻訳には、樋口和彦、武田憲道訳『結婚の深層』（東京：創元社、1982 年）があり、この本の p. 118. を参考に自分の訳をつけた。以下、この本からの参考は、(『結婚の深層』頁数) とする。

4 John A. Sanford *The Invisible Partners* (New York: Paulist Press, 1980), p.17. 以下、この本からの引用は、(*The Invisible Partners*, 頁数) とする。訳書は、ジョン･A･サンフォード『見えざる異性 : アニマ･アニムスの不思議な力』長田光展訳（東京：創元社 , 1995 年）。この本の箇所は 27 頁であり、それを参考にわかりやすく図の説明をした。以下この本からの参考は、(『見えざる異性』、頁数）とする。

5 『恋する女たち』の第 7 章は極端に短いので、議論は割愛した。

6 D.H. Lawrence. *Women in love* (Cambridge : Cambridge University Press , 1987) p.107. 以下、この本からの引用は、(ＷＬ頁数) とする。

7 Ｄ･Ｈ･ロレンス『恋する女たち』小川和夫, 伊沢龍雄訳 世界文学全集第 57（東京：集英社 , 1970）、pp. 81-82. を参考に自分の訳をつけた。以下、この本からの参考、引用は（『恋する女たち』頁数）とする。

8 *Marriage* p. 87.

9 『結婚の深層』p. 127.

10 『結婚の深層』p. 124. を参考にした。

11 『結婚の深層』p. 131. を参考にした。

Pierre ―― 福音主義に抗う Melville ――

佐々木　英哲

緒言にかえて

19 世紀のアメリカ北部にあって資本主義文化は中産階級女性をターゲットとして進展した。幅を利かせるようになったコマーシャリズムの煽りを受けて芸術作品は商品として市場で流通するようになった。このような状況にあって、良く言えばアメリカ社会の民主化は促進され、悪く言えばアメリカ文化はキッチュ化、すなわち安ぴか商品も是とするまがいもの化を容認する方向へと向かうことになる。だがフェミニズムの観点からカルチュラル・スタディーズを開拓したジェイン・トンプキンズ（Jane Tompkins）が指摘するように、[1] この時代、時流に乗った流行女性作家達――たとえばキャサリン・セジウィック（Catharine Sedgwick, 1789-1867）、ファニー・ファーン（Fanny Fern, 1811-72）、E. D. E. N. サウスワース（E. D. E. N. Southworth, 1819-99）――の手になるベストセラー小説が、社会的な言説構築に繋がる大きな潮流をもたらす推進力となった事実を、なおざりにするわけにはいかない。その中でも最も象徴的な事例は、本稿で取り上げるハーマン・メルヴィル（Herman Melville, 1819-91）の『ピエール』（*Pierre; or, The Ambiguities*）[2] と出版年を奇しくも同じくする 1852 年のハリエット・エリザベス・ビーチャー・ストウ（Harriet Elizabeth Beecher Stowe, 1811-96）による曰く付きの小説『アンクル・トムの小屋』（*Uncle Tom's Cabin; or, Life among the Lowly*）であろう。この作品は南部奴隷制に喘ぐ黒人の極限状況を、北部白人女性の視点から、共感に訴えるべく、お涙頂戴式に描き、なおかつキリスト教温情父権主義（福音主義 Evangelicalism）に訴えることで、北部の中産階級女性読者達の琴線

を響かせることに成功した。結果的に、かのリンカーン大統領をして「それであなたがあの大戦争［南北戦争］を引き起こした本を書いた小柄な女性なのですね（So you're the little woman who wrote the book that made this great war.）」[3] とまで言わしめたのだった。ちなみにストウなどの商業ベースに乗った女性流行作家達による感傷小説の煽りを受け、ホーソーン（Nathaniel Hawthorne, 1804-64）やメルヴィルといった純文学系の男性作家が苦戦を強いられることになったことは、マイケル T. ギルモア（Michael T. Gilmore）をはじめとする先行研究が既に詳細に論じている。[4]

ここで文化的コンテキストとして押さえておきたいのは、『アンクル・トムの小屋』が象徴的に示すように、この時代、アメリカ北部にあっては、父権的ピューリタニズムが鳴りを潜め、代わって福音主義的傾向が前面に押し出され、罰する厳父ではなく慈父としての近づきやすい神が強調されるようになった事実である。中村紘一が「〈女性化〉されたトムとキリスト像 :『アンクル・トムの小屋』について」で指摘する通り、「女性に最も受け入れ易い信仰の対象は過去のピューリタンたちが信じたカルヴィンの『怒れる神』ではなく、もっと優しい（女性化）されたキリストのイメジ」[5] となったのであり、このような福音主義が定着した背景にはストウの父親であるライマン・ビーチャー（Lyman Beecher, 1775-1863）やストウの兄であるヘンリー・ビーチャー（Henry Ward Beecher, 1813-87）も推進役として名を連ねた第二次覚醒運動（The Second Great Awakening）があったことを見過ごしてはならない。そしてその福音主義を下支えしたのが、ストウの読者層となるようなアメリカ北部の中産階級女性なのであった。角度を変えて言うならば、アメリカ北部の中産階級女性達がこのような福音主義（エヴァンジェリカリズム）の担い手となり、センチメンタルでキッチュな文化を消費したのである。こう言ってよければ、アメリカ文化の女性化を推進し小説マーケットを支えた女性達は、逆にマーケットの要望にそぐわない「近づき難い」「怒れる神（と思しき白い鯨）」との闘いを描く

ようなメルヴィルを黙殺したのである。メルヴィルにとって中産階級女性達を中心とする読者層には取り付く島もなかった。メルヴィルにとって女性達の「共感」は期待すべくもなかったし、ラカンに言わせれば、「共感」は想像界次元では有効であるものの、象徴界次元では通用しないと一刀両断に片付けられてしまうのだろうが、事は錯綜している。しかも T. ウォルター・ハーバート（T. Walter Herbert）を代表とするようなカルヴィニズムの強い磁場に晒されたメルヴィルの一面を強調した先行研究はあっても、エヴァンジェリカリズムとメルヴィルの関係を解きほぐす先行研究は、管見では見当たらず、メルヴィル研究ではほとんど手つかずの未開拓領野のまま放置されているのが現況である。

このような先行研究にまつわる状況を踏まえたうえで、当時の読者層がメルヴィルのメッセージを拒否する心的機制を解きほぐすことを本稿のゴールとしてみたい。メッセージがなぜ伝達不可能となるのかについては、記号論、コミュニケーション論、カルチュラル・スタディーズ、（ポスト）構造主義からすれば、テキストの産出者と解釈者とを結ぶ「媒体／コード／メタ知識／共同性」からアプローチするのが常道であるが、本稿では、そのようなコミュニケーション論を参照枠としつつも、心理的な位相に切り込みを図るものとする。というのも、メルヴィルと読者層は後述するように共に福音主義的ピューリタニズムという解釈のコードを共有しており、コミュニケーションの前提条件の少なくとも形式面を満たしている以上、メディア論的アプローチだけでは真相解明には不十分で、論点先取の誤謬を恐れず言わせてもらえば、福音主義を標榜する読者層がもたらした（反）人種主義の波のうねりに飲まれたイサベル（Isabel）とメルヴィルの実相を心理面と倫理面から浮き彫りにする作業がむしろ必要となる、と考えられるためである。なお混乱を避けるため急いで申し添えておくが、1970 年代以降のアメリカ社会に於いて、共和党の支持母体ともなっている原理主義的な福音主義は、本稿で論じる福音主義とは性格を異にする別

派である。

作業手順として、以下のように議論を展開する。いみじくも脱構築主義者のポール・ド・マン（Paul de Man）が言うように、[6]「読む」ことはできない（誤読は避けられない）が、だからこそ逆説的に読むことは「倫理的」なのである、とする命題が正しいとするならば、まずは女性読者層から反発を食らったメルヴィルが『ピエール』で伝えようとして叶わなかったメッセージが倫理性を帯びていることを明示する（第１、２章）。そしてこのような倫理的メッセージの伝達を阻む要因として、受信者側に起因する問題を考察する（第３章）。[7] メッセージが含み持つ苦味というか毒素のようなものが、福音主義信奉者達のアンタッチャブルなるタブーを刺激した可能性を検討することになる。その際、『ピエール』と同時期の作品、『白鯨』（*Moby-Dick* , 1851）や「バートルビー」（“Bartleby”, 1853）にも目配りを利かせつつ、そのような社会的タブーを可視化する作業を試みる。最終的には集団心理学の知見も援用しつつ、福音主義が席捲した 19 世紀アメリカ社会にイザベルのような「余所者」が投げかけた問い掛けを、同質的なホワイト・アメリカを生きる仮想読者に伝えようとして叶わなかったメルヴィルの嘆きに耳を傾けるところまで筆を運んでいきたい。

１．第三者への顧慮：レヴィナス的倫理に訴える

議論の前提として最初に確認しておきたいのは、ポストモダニストのリオタール（Jean-François Lyotard）ならば「大きな物語（Grand Narrative, Meta-Narrative）」とでも呼ぶ共通の認識基盤———19 世紀アメリカ社会という文脈ではピューリタニズムなる近代のパラダイム———が、凋落の一途をたどっていた事実である。ピルグリム・ファーザー達が代表する 17 世紀のピューリタニズムの熱狂は、ジョナサン・エドワーズ（Jonathan Edwards, 1703-58）やイギリス出身でアメリカでも伝道活動に励んだジョ

ージ・ホイットフィールド（George Whitefield, 1714-70）による 1730 年代から 50 年代の第一次大覚醒運動（信仰復活運動）をもってしても、さらに 1800 年代から 1830 年代にかけてのチャールズ・グランディソン・フィニー（Charles Grandison Finney, 1792-1875）らによる第二次大覚醒運動をもってしても、再び呼び起こすまでには至らなかった。だからと言ってピューリタン的思考様式がアメリカから、そしてメルヴィルから、フェード・アウトしたわけでもなかった。ピューリタニズムは一見トーンダウンしたかに見えたが、然にあらずで、すでにプロテスタント教会の大きな流れとなっていた福音主義に合流していた。というよりも福音主義は 18 世紀に信仰復活運動を起こしたエドワーズに胤を宿していたとされ、その福音主義がアメリカ社会でメイン・ラインとなった以上、ピューリタニズムの完全消滅など､あり得る話ではなかった。消滅どころか 1870 年代までの「福音主義」なる文言からは、17 世紀に信仰復活運動を指導したジョナサン・エドワーズの衣鉢を継いだプロテスタント系教会をひと括りにしてしまうような意味合いが色濃く滲み出ていて、結果的にむしろ多くの信者が呼び寄せられた、と青木保憲などの研究者は指摘している。[8]　リチャード・ホーフスタッター（Richard Hofstadter）[9] によって反知性主義としてカテゴライズされるアメリカ福音主義は、19 世紀中葉に啓蒙主義の流れを汲むドイツ由来の自由主義神学がアメリカに押し寄せたときでさえ、その大波に耐え、いやむしろ受容の姿勢さえ示し、進化論で決定的な打撃を受ける 1870 年代までは、その本来的な姿を維持したほどの強靭振りを見せつけた。

さてフェミニズムの論客達が指摘する通り、福音実践としての愛を育む場は、家族空間であるべきだとするドメスティック・イデオロギーを説き勧めたのが、このような福音主義神学の洗礼を受けた中産階級女性達なのであった。家族空間とは、男達がホモソシアル的な利益追求を目指す公的圏域とは対照的な、実質的に女性達が主導する私的圏域である。そして

『ピエール』で言うならば、未亡人の母メアリー・グレンディニング（Mary Glendening）とその一人息子ピエール（Pierre）が暮らす家族という親密圏が、福音実践の力域なのである。この領域に庶子なる余所者のイザベルが加わって壊乱する真似は許されないし、許されていないどころか、大地主メアリーが所有する荘園から追放されてもおかしくない状況となっている。実際、メアリーの小作一家で、イザベルが間借りしているアルヴァー（Ulver）家の娘デリー（Delly）に対して不純異性交際の廉によりメアリーは追放の処置を下すが、これは同種の追放措置をイザベルに対しても発動させることなど、メアリーにとっては造作もないことだとイザベルとピエールに対して露骨に匂わせる所作に他ならない。以下、親密圏には入れない「他者」としてイザベルのポジションを、エマニュエル・レヴィナス（Emmanuel Lévinas, 1906-95）の倫理学の枠組みから再考してみよう。

レヴィナスはポストモダニズムおよびポストコロニアリズムの文脈で「主体」が「他者」に対して担うべき責任について、歯に衣を着せない発言をしたことで脚光を浴びた倫理学者である。もちろん、19 世紀の人間メルヴィルが 20 世紀の人間レヴィナスを知る由などありはしないが、『白鯨』に於いてイシュマエル（Ishmael）と南洋の人食い人種の王族クィーケグ（Queequeg）とのホモソシアル的な交流を描き、「他者」との「共存」を文学的テーマのひとつとしていたメルヴィルはレヴィナスに近い倫理観を備えていたものと推察できる。レヴィナスによれば「神秘的諸観念の軛を解かれ」た現代の宗教は「宗教的実存の本質をにぎる地位に愛を祭り上げてしまった」、[10] という。この種の愛の格上げ現象が、ピューリタニズムの世俗化と女性化に歯止めがかからない 19 世紀のアメリカで顕著に現出したことは、フェミニストの立場でアメリカ文化史を論じるアン・ダグラス（Ann Douglas）[11] が指摘する通りである。宗教的な地位にまで格上げされた「愛」とは、19 世紀に中産階級女性の間で圧倒的人気を博したような感傷小説のなかで描かれるキッチュな（大量生産される「廉価」で俗

受けする）「愛」である。だがレヴィナスは、こうしてかつては知的エリートにしか手の届かなかった崇高で宗教的な「愛」が一般人にもアプローチできるようになった今日的状況は、手放しで喜べる民主的な状況とイコールではないと、警鐘を鳴らしている。事の真相をレヴィナスは以下のように説明する。

> ［中産階級のキッチュ的］愛は社会という現実を含むものではない。…… 社会という現実は不可避的に第三者をともなっている。真の『きみ』とは、他の人々から切り離されて、〈愛される者〉ではない。真の『きみ』はこれとは異なる状況で姿を現す。[12]

レヴィナスのいう「真の『きみ』」あるいは「第三者」なる者とは、イザベルに他ならない。「社会は第三者を排除」する。なぜなら「第三者の人間は私ときみとの親密さをかき乱すことを本質としている」[13]からだ。したがって非－中・上流階級の出身で非－白人的／異質的な特徴をもつ女性であるイザベルは、メアリー・グレンディニングとピエール・グレンディニングという母と息子、許嫁のルーシー・タータン（Lucy Tartan）達が中枢メンバーとなるような同質社会には受け入れてもらえない。ナルシス的自己愛を自制する力学が働くのは同質の集団内部に限り、異質な外部の人間には働かないというフロイト的集団心理学を想起すれば、集団が第三者を親密圏の埒外に置き、第三者に悪魔的相貌を被せてしまうという暴挙を犯すことは理の必然であろう。他者を悪魔化モンスター化して表象することで、他者が秘める転覆可能性を封じ込め、逆に自己の悪魔性を隠蔽し、自己の正当性を主張する傾向が支配集団にはあるからだ。これはいわゆる精神分析でいう「投影機制」の稼働が為せる業に他ならない。

しかしイザベルには目的意識をもって自らの意志で悪魔を演じている――――自己悪魔化（self-demonization）とも見られる―――節がある。そもそ

もイザベルなる名前も自称であり本名かどうかは眉唾物である以上、ピエールの姉が、旧約聖書に登場する悪魔のような女でエイハブ船長（Captain Ahab）を彷彿させる名のアハブ国王（King Ahab）を手玉に取った王妃ジザベル（Jezebel）を連想させるような偽名を戦略的に使い、悪女なるペルソナを被り本来のアイデンティティを被覆している可能性も否定できないのだ。

悪魔／サタンとは、ヨハネの黙示録（12.10）に記されているように「兄弟らを訴える者（the accuser of our brethren: *King James Bible*）」を意味する。だとすれば、イザベルは弟ピエールを告発する姉である。異質な他者たる第三者を排除する社会———選ばれし中産階級（中・上流階級）に所属する者達からなるアメリカ社会———そのような社会の代表者たるピエールを、大胆にも聖書を逆用して告発するのが、自ら悪魔の仮面を被ったイザベルである。次章では、聖書に倫理的根拠を据えたイザベルによるメッセージの輪郭を浮かび上がらせる作業に取り掛かる。

２．異邦人との共存：キリスト教倫理に訴える

アメリカの福音主義は聖書中心主義を採るとされている以上、聖書に視座を置き作品を捉え直すのも意味があるだろう。従来の先行研究では、旧約聖書で描かれる鯨に飲み込まれた預言者ヨナ（Jonah）、あるいは信心深いのに様々な苦しみに遭遇し神を呪うヨブ（Job）をメルヴィル作品に読み込もうとする向きが主流であったが、エリック・サンドクィスト（Eric Sundquist）を除き、[14] 不可思議にも顧みられることのなかった新約聖書の聖ペテロ（Peter）と聖パウロ（Paul）にここでは照準を定める。そしてイザベルの異母弟ピエールの名前が、キリストの十二使徒のなかで筆頭格とされる聖ペテロに由来し、そしてこの聖ペテロや他の使徒とは異なり、聖パウロが生前のキリストを知らないため十二使徒には入らないとされてい

ることを想起したい。なんとならば作者は物語後半部に「十二使徒教会（The Church of the Apostles）」なる一章をわざとらしく差し挟むことで、十二使徒とはどの聖人なのかを思い起こすよう暗に読者に促しているからである。そのうえで、聖パウロと聖ペテロとが対立したアンティオキア事件（The Incident at Antioch）に『ピエール』解読の端緒を求めてみよう。

アンティオキア事件とは、ペテロがユダヤ系キリスト教徒を重んじ異邦人改宗者を軽視する態度を見せたことに、パウロが激しく問い質した、という事件である。この事件を契機にキリスト教は異邦人への寛容度を高め、普遍宗教化に一層拍車をかけたとされる。選民意識を是としない聖パウロの精神は、選民宗教とされるユダヤ教の経典である旧約聖書にあって、神が異邦人にも救いの手を差し伸べるという点で異彩を放つ預言書「ヨナ書」にも読み取ることができる。いみじくも『白鯨』9 章にて登場するマプル神父（Father Mapple）が説教で言及するのが「ヨナ書」であることは偶然の域を超えた一致と言わねばなるまい。

結論的に言えば、新約聖書と『ピエール』の照応関係としては、「キリスト／父なる神」を知らずペテロを問い詰めるパウロが、父を知らぬ婚外子イザベルに呼応し、そしてキリストの一番弟子ペテロはグレンディニング家の嫡子ピエールに対応する。つまり異質な他者たる第三者を受容しない聖ペテロを告発し改悛に導こうとする聖パウロに、ピエール・グレンディニングを諌めるイザベルを重ね合わせる構図である。特に「パウロ／異邦人」「イザベル／パウロ」といった括りが有効である証としては、『ピエール』のテキストを離れた場での事象も含め、いくつか挙げることができる。実際、いみじくもフランスの映画監督レオ・カラックス（Leos Carax）が『ピエール』を下敷きにして 1999 年にレリースした映画のタイトルが『ポーラ X』（*Pola X*）であること、すなわちパウロ（Paul）の女性形ポーラ（Paula）を連想させる響きをもったポーラ（Pola）であることは、果たして偶然の成せる技だったのだろうか。そもそもイザベル／ポーラ X のよう

な神の愛と救済にあずからない（ピューリタン的な選民の対象として「選ばれない」）アウトキャストに対するメルヴィルの並々ならぬ思い入れ（ルサンチマン）は、聖パウロさながらである。いや、察するに余りある。なにせ、長兄を重んじた実の両親からは「選ばれず」、義兄弟（ハーヴァード、イェール出身の弁護士である妻の兄弟達で、経済的な援助を頼んだ岳父でマサチューセッツ州最高裁長官のレミュエル・ショー（Lemuel Shaw, 1781-1861）の息子達））からは大学を出ていない物書きだと軽蔑されていたのだから。さらに、作品ではイザベルも精神障害者収容施設に、一時、収容されたと暗示されているが、危うくその種の施設に収容される寸でのところまでいったのがメルヴィルだったのだから。そして『白鯨』は売れずに世間の「あぶれ者」となったのがメルヴィルだったのだから。だからこそ『白鯨』の孤児の語り手には異邦人に産ませた私生児として追放されたイシュマエルと同じ名をもたせのだ。だからこそ『ピエール』に於けるイザベルもまた異邦人に産ませた私生児に設定したのだ。そしてだからこそ、捕鯨船ピークォド（Pequod）号の名には、ピューリタンにより「非選民」として追放されたアメリカ先住民ピークォット（Pequot）族の名に近い響きをもたせ、イザベルも黒髪といった異邦人的な身体特徴によりアメリカ先住民／非選民の血が流れているとも推察できるように表象したのだ。そもそも捕鯨船の乗組員は世間から「捨てられた者」「選ばれなかった者」であり、イザベルも中上流社会から「捨てられた者」である以上、両作品は作者の強烈なルサンチマンによって貫かれている、と言える。メルヴィルが抑えがたい悪魔的ルサンチマンをイザベルに備給するからこそ、悪魔の仮面を被った聖者イザベルの使徒パウロ的な倫理メッセージは迫真性を帯びるのである。しかしその迫真性をもってしてもパウロ的／福音的メッセージは伝わらなかった。何故か。要因はメッセージ受信者の「心的機制」にあるものと推察されるが、次章で考察したい。

3．届かない「福音」

イザベルのメッセージの受信者とは、一義的にはピエールであるが、イザベルが作者の代弁者として具現化している可能性に思いを巡らすと、「メッセージ／知らせ」の真の「受け手」は作品の潜在的読者となる。ここで再度、「外部」社会とイザベルおよびイザベルを代弁者として選んだメルヴィルとの関係を解きほぐし、本稿のゴール———作品の何が読者を遠ざけたのか———に肉薄したい。

そもそも Evangelicalism（福音主義）/ Evangel（福音）とは、*OED*（*Oxford English Dictionary*）の語源欄では、ギリシャ語に由来し、「良き知らせをもたらす」と記されている。また Evangel の英訳である Gospel も *OED* では語源的に「良き知らせ」と記されている。しかし「福音／良き知らせ」とは真逆の呪詛に満ち溢れた空間を提示した（と、当時の読者に受け取られた）のが、『ピエール』であり、『白鯨』ではなかったか。聖書のイシュマエルと同じく私生児としてのイザベルは、神にその声を聴き届けてもらった聖書のイシュマエルとは異なる。おそらくメルヴィルを代弁していると思われるイザベルの声は、つまりレヴィナス的な倫理を要請する声は、「良き知らせ／福音」として作者の同時代人に届くことはなかった。『ピエール』は「売れなかった」のであり、その点では神に祝福された聖書のイシュマエルと同じ名前をもつ語り手が登場する『白鯨』も同様である。

ここで『ピエール』の出版１年後に出された「バートルビー」を引き合いに出してみたい。なぜなら（紙幅の関係で詳細は割愛するが）バートルビーの雇用主である初老の弁護士がキリスト教的温情父権主義者を代表する慈父のような（しかしバートルビーを最後まで理解できない）人物であるように思われるからであり、メルヴィルが書き続けた「良き知らせ／福音（もどき）」が、後述するように、郵便局員時代のバートルビーが処分した「配達不可能な手紙（Dead Letters）」に相当するとみなせるからである。

さて福音なる「真理／良き知らせ」を伝えることは、第二次大覚醒運動で勢いづいた福音主義者にとって、義務／ミッションとして理解され、福音を実践することは焦眉の急務となっていた。たとえばホーソーンの『ブライズデイル・ロマンス』（*The Blithedale Romance*, 1852）のホリングズワース（Hollingsworth）が手掛ける刑務所・病院改革などの社会改良運動、奴隷解放運動、禁酒運動、そしてホーソーンにとっては身近な者達、たとえば義理の兄弟で公教育確立に尽力したホーレス・マン（Horace Mann, 1796-1859）やホーソーンの妻の姉エリザベス・ピーボディ（Elizabeth Peabody, 1804-94）が推し進めた教育改革運動が、実践活動としてよく知られている。ただ、メルヴィル本人は「良き知らせ／福音」を意図してピエール／イザベルの物語を書き綴ったとしても、皮肉なことに福音主義的傾向を前面に押し出している 19 世紀アメリカ北部社会にあっては、メルヴィルの意図を汲み取ってその「福音／良き知らせ」を理解する「読み手／受け手／受取人」が存在しなかった。確かに、読者層の中心であった中産階級白人女性達———彼女達はキリスト教福音主義の精神に基づく奴隷解放運動を含む慈善運動や社会改良運動を積極的に実践していたのだが——のセンチメンタルでキッチュな愛を言祝ぐ文化を、メルヴィルが意識していたことは、バートルビーが処分した手紙に同封されていた品々——婚約指輪、速達で送られた義援金——などから十分に察することはできるのだが……。

> 青白い顔の［郵便局］職員［バートルビー］は折りたたまれた紙の中から、指輪を取り出すことがときにある。指輪をはめるはずであった指は、今ではおそらく墓場で朽ちていることだろう。［他にバートルビーが手にしたものは］慈善用速達便を使って送られた紙幣（———だが、その紙幣によって命拾いしたはずの受取人も［鬼籍に入り、］もはや食事をしたり飢えを感じたりすることはない）。失

意の人に届くはずであったが、その受取人が亡くなってしまったために届かなかった許しの手紙。悲嘆にくれたまま亡くなった人達に、存命中に知らされるはずだった朗報。救われることのない災難で息の根を止められてしまった人達に配達されるはずであった希望の知らせ。

Sometimes from out the folded paper the pale clerk takes a ring:—the finger it was meant for, perhaps, moulders in the grave; a bank-note sent in swiftest charity:—he whom it would relieve, nor eats nor hungers any more; pardon for those who died despairing; hope for those who died unhoping; good tidings for those who died stifled by unrelieved calamities.[15]

一方、同時代人ホーソーンは時代の空気を敏感に読み取り、厳格な父権主義的ピューリタニズムに代わる父権的温情主義たる 19 世紀的エヴァンジェリカリズムの到来を、17 世紀の作品舞台に予想させるような、「緋色」の「手紙」／『緋文字』（*The Scarlet Letter*, 1850）を書きあげ、メルヴィルからも読者からも拍手喝采を浴び、一躍、時の人となった。中西佳世子の評言を借りれば「プロヴィデンス」[16] としての、「緋色」の「手紙」／『緋文字』を脱稿したのがホーソーンであったのだ。他方『ピエール』出版後のメルヴィルは近親相姦小説を書いた狂人として文壇から葬り去られたばかりか、彼が同性愛的な愛を乞うたホーソーンからも捨てられ、名士ホーソーンとの相違は際立ったものになる。平たく言えば、郵便局員バートルビーによって受取人不在の「配達不能な手紙（Dead Letters）」として焼却処分されてしまうような作品を、メルヴィルは書き綴ったのであった。

しかしメルヴィルもホーソーン同様に福音主義解釈なるコードを作品に織り込むことで読者との共同性を演出しようとしていた。女性読者の気を引くようにお涙頂戴式の甘ったるい書き方をすることもメルヴィルは敢え

て厭わなかった。厭わないどころかこれ見よがしに強調するポーズをとることさえ、やぶさかではなかった。ここで異母姉としてのアイデンティティを告げるべくイザベルがピエールに宛てて書いた「手紙」が「良き知らせ／福音」に該当するのか再確認してみよう。「私の涙とやら苦しみとやらであなたを惑わして、あなたがあとで冷静になって考えることができるときになって、あなたに後悔させるような真似をさせたくないの」（Thou shall not be cozened, by my tears and my anguish, into any thing which thy most sober hour will repent”（64）.）のように始まる自虐的な手紙の書き出しは、女性中心の感傷文化を意識した殺し文句である。「もうこれから先は、手紙を読まないで。なんならこの手紙を焼いてもいいわ」（“Read no further. If it suit thee, burn this letter”（64）.）といったくだりは、「バートルビー」の「配達不可能な手紙（Dead letters）」を想起させる。さらに「いいえ、お願いはしません。するもんですか」（“ No, I shall not, I will not implore thee ”（64）.）などとイザベルは虚勢を張ってみせる。しかし、最後には抑えきれなくなり、「ねえ、私の弟、いとしい、いとしい弟、私を助けて。私のところに飛んできて。あなたなしでは生きていけない。みじめ、みじめ。こんな広い広い世界で凍えてる……もうこれ以上、世間から爪弾きにされっぱなしなのは耐えられないの」（“Oh, my brother, my dear, dear Pierre, — help me, fly to me; see, I perish without thee; — pity, pity, — here I freeze in the wide, wide world. . . . No more, oh no more, dear Pierre, can I endure to be an outcast in the world . . .”（64）.）と、本音をさらけ出す。なるほどイザベルの手紙はセンチメンタルであり、弱者に援助の手を差し伸べるよう涙ながらに哀訴するさま――見え透いた小芝居を打っているが――には切迫性があり、福音主義者に有無を言わさず福音ミッションの実践（慈善）を強要するものとなっている。このように文化的装置としてのセンチメンタルな手紙は作品がエヴァンジェリカルであることを十分に担保している。なのになぜ、『アンクル・トムの小屋』を受容した読者層は、『ピエール』を拒

絶したのか。作者のメルヴィルと、センチメンタルでエヴァンジェリカルな読者層との関係性はどのように見定めることができるだろうか。ただ以下は史的関連事実だけを傍証として暫定的に素描するに留め、結論部での謎解きにつなげる助走としておきたい。

思えば、アメリカのプロテスタンティズムは第二次大覚醒運動のもとで従来のドグマティックなピューリタニズムの色彩を薄め、福音主義の衣をまとうようになった。その福音主義により結束を固めた北部の白人中・上流階級クリスチャン達は、いわゆるワスプ（WASP: White Anglo-Saxon Protestant）の中枢を担い、ホワイト・アメリカ社会を安定化させたのであった。したがって黒人をアフリカに帰還させ、黒人国家リベリアを建国させるという一見したところ人道主義に適うような福音主義的実践を果たしたアフリカ植民協会も本音としては黒人という異分子を除去しホワイト・アメリカを維持する、という同質志向性（モノ・カルチュラリズム）なる一物を隠し持っていたのであり、結果として———ポストコロニアリストのホミ・バーバ（Homi K. Bahbah）の評言を借りると———「民族の全体化と国民的意志の統一化という課題を遂行した」[17] のである。実際、アフリカ植民協会のメンバー達は福音主義者達と重なっていた。アフリカ植民協会に肩入れしていたのが、当時の福音主義を代表する一人であったストウの父親でジョナサン・エドワーズの流れをくむ第二次覚醒運動を指導したチャールズ･フィニィーを支持した長老派牧師ライマン･ビーチャー（ハリエット・ビーチャー・ストウの実父）であった事実は、福音主義の危うさを物語る。当然のことながら、ティモシー・B.・パゥウェル（Timothy B. Powell）が指摘するように、[18] 協会のアフリカ帰還運動の言説とストウの『アンクル・トムの小屋』のレトリックとは共振するものであり、両者には感傷的帝国主義（Sentimental Imperialism）が通底していたのである。そもそも福音主義に傾く 19 世紀中葉のアメリカは、「マニフェスト・デスティニィ（Manifest Destiny ＝明白なる神意）」なる旗印の下で、領土拡張

に血道をあげていたのだった。北部アメリカの中産階級白人女性達が熱狂的に支持した福音主義は、海外への布教活動に乗り出すことでキリスト教の普遍宗教（世界宗教）化を押し進め、あらぬことか、イザベルのような犠牲者を産む帝国主義の温床となったのである。

ちなみに『ピエール』『アンクル・トムの小屋』と同じ 1852 年に『フランクリン・ピアス伝』（*The Life of Franklin Pierce*）を出版したホーソーンは、急進的な奴隷解放を避け――再び中西の評言を借りれば――、「プロヴィデンス」[19] による予定調和を期待した。これはホワイト・アメリカを維持しようとするホーソーンの政治的無意識が言表行為として表出したことに他ならない。齊藤忠利がいみじくも指摘するとおり、『アフリカ巡航船日誌』（*Journal of an African Cruiser*, 1845）の編集を行ったホーソーンは「リベリア植民計画を支持」[20] することで、流れに竿をさし、福音主義的なホワイト・アメリカで如才なく振る舞ったのである。

結語の試み

「あぶれ者／他者」ではなく主体として振る舞うことができたのが、中産階級である当時の小説読者層である。このような読者層を狙ってメルヴィルが発信したのが、レヴィナス倫理的なメッセージであり、アンティオキア事件に於ける聖パウロ的なメッセージであることを第１章、２章にて確認した。そしてメッセージは届かなかった。続く第３章にて考察を進めていくなかで判明したのは、戦略として悪魔性を纏った異邦人イザベルによる（兄）弟（姉妹）（が構築するホワイト・ミドルクラス社会）に対する告発が「反福音」（／「呪詛」）に留まり、「良き知らせ／福音」に転換しなかった、という 19 世紀アメリカ的状況であった。こうして本稿では、イザベル／メルヴィルの倫理的メッセージが届かなかったソシオ・ヒストリカルな環境を明らかにする段階までは辿り着いた。だが、この状況に於

いてメッセージを拒否するメッセージ受信者側の心的機制を解明する作業——本稿の最終目的——が、まだ残っている。

思えば、ドメスティック・イデオロギーに与することが、19 世紀アメリカの根幹を成す中産階級に文化的にも帰属することの証となり、ひいてはそれが彼等、彼女等の存在自体の根拠（raison d'être）に直結するのだから、中産階級に属する者達はそのイデオロギーに抵触するメッセージを受け取るわけにはいかなかったのだ。ここに至って図らずもレスリー・フィードラー（Leslie A. Fiedler）に比較的に近い結論が導き出される形となってきた ——「ピエールの姉と思しきイザベルは、半ば気がおかしくなって社会から追放される浅黒い肌をしたアニマ的女性であり、それゆえイザベルが主張をあからさまにすると、どうやらそれは……アメリカ社会の順応性への攻撃となるようだ。」（Isabel, the swart anima-figure who may be his [Pierre's] sister, is half-mad and an outcast, so that to expose her cause can be made to seem . . . an attack on conformity.）[21]　フロイトに依拠するポストコロニアリストのホミ・バーバの顰に倣って敷衍すれば、[22] オリーブ色の肌をした黒髪というイザベルのような「他所者（異邦人）」の登場は、グループの「始原的不安と攻撃性」をかき立て、純粋と迫害という人種主義的幻想を顕在化させたのである。詰まるところ中産階級社会の福音主義は、遺稿小説『ビリー・バッド』（*Billy Budd*, 1924）で作家が言及した無神論者で、「諸人種からなる代表団を率いて革命後のフランス憲法制定国民会議に現れたアナカルシス・クローツ（Anacharsis Cloots, 1755-94）」なる人物を理想として仰ぎ見るようなメルヴィルにとっては、絶望的であった。

だが事は中産階級ホワイト・アメリカの（反）人種主義的な似非民主主義だけに収まらなかった。イザベル／メルヴィルが、曲がりなりにも維持されている家父長主義体制に苛烈なる批判の矛先を向けていたため、それが読者の抵抗と離反を招いたのである。イザベルをサブプロットとする近親相姦小説『ピエール』を世に出したメルヴィルは、いうなればラカン的

象徴界にイザベルという楔を打ち込んでしまったのである。なぜなら作品コンテキストに即して言えば、ラカン的象徴界なるものは、中産階級が主導するホワイト・アメリカ社会を前提として成立しており、こう言って良ければ、ラカン的象徴界は父権体制という現状を暗黙裡の前提として追認し不問に付すことで成立している以上、そのような社会に亀裂を入れ込んだイザベルを中産階級読者層が容認することはない。この意味で『ビリー・バッド』をはじめとする作品の登場人物を通してクィアな同性愛的嗜好を公言して憚らなかったメルヴィルは、ラカンに批判的な今日のラディカル・フェミニズムと見解を同じくする。

ただ、誤解を招かないように急いで付言しておくが、イザベルとピエールの近親相姦という煽情的なトピックが、父権体制を揺るがしているのではない。なぜなら、デイヴィッド・レイノルズ（David S. Reynolds）の研究が詳らかしているように、[23] 厳格なピューリタニズムが瓦解したこの時代、同様のトピックを扱うセンセーショナルでグロテスクなゴシック小説が大いに人気を博したからである。そうではなく、温情主義的なパターナリズムという福音主義の基盤となる父権主義体制は、ホワイト・アメリカに於いて弱者と強者のポジションが固定化している、という前提条件があって成立するものであり、まさにイザベルがこの父権的基盤に攻撃をしかけたために、作品は受容されなかったのである。そのために、ストウやアフリカ植民教会のようなエリート指導者が旗振り役となった反人種主義がホワイト・アメリカで受容されたのに対し、メルヴィルは厄介視されたのである。１章で言及したように、メッセージ発信者がイザベルという父権体制を壊乱する悪魔的な人物である以上、悪魔的（かつ聖者的／使徒パウロ的／ポーラ的）イザベルの福音的メッセージが読者に届くはずはない。

いわゆる括弧付き「民主主義」を標榜する父権的ホワイト・アメリカを呪詛する一方で、父の愛に与れなかったメルヴィルはホーソーンに愛を乞い、イザベルは父ピエール・グレンディニングに、そして父の代理表象で

ある弟ピエール・グレンディニングに愛を乞う。だがそこで得られるかも知れなかった愛は、極論すれば乞うに値しなかったのだ。イザベルが渇望した父性愛や、そしておそらくは父親的な代理表象を求めてホーソーンに捧げたメルヴィルの愛が、不毛のまま空しく燃え尽きるのも当然であり、メルヴィルの愛は『ピエール』出版１年後の「バートルビー」で焼却処分される「配達不可能な手紙」として象徴的に示されるのだった。

第１章で言及したレヴィナスから影響を受けたことで知られる脱構築主義哲学者のジャック・デリダ（Jacque Derrida）の評言に従うと「正義は……他者の特異性へと自分を送り届ける」[24] 権能を有すると理解されるが、そのような他者への正義――そして愛をテーマとした『ピエール』――を「良き知らせ／福音」として世に送り届けようとしたメルヴィルは、逆に社会から疎外されてしまう。しかもメルヴィルは『ピエール』出版前に自らの運命を予言していたかのように、1851 年６月にホーソーン宛の手紙でこのようにしたためている――「私は今世紀に於ける福音書を書いたのだが、野垂れ死ぬことになるだろう（Though I wrote the Gospels in this century, I should die in the gutter.）」。[25] かくしてメルヴィルは世間から狂人扱いされ文壇からは葬られてしまう。アウトサイダーとしてのメルヴィルのルサンチマンは、嘆き、つまり whale ならぬ wail のまま、アメリカニストのペリー・ミラー（Perry Miller）やサクヴァン・バーコヴィッチ（Sacvan Bercovitch）によれば、[26] アメリカのピューリタン社会で繰り返されたエレミヤの嘆きさながらに、メルヴィルの生涯にわたって執拗に響き渡ることとなる。実際、遺作となる『ビリー・バッド』の作品空間に於いても、その耳障りな不協和音は軋み続けることになる。

本稿は「サイコアナリティカル英文学会第45回（平成30年度）大会」（2018年 11 月 10 日）の発表原稿に加筆修正を加えたものである。

Notes

1 *Jane Tompkins, Sensational Designs: The Cultural Work of American Fiction, 1790-1860* (New York: Oxford UP, 1985). 参照。

2 テキストとしては Herman Melville, *Pierre; or, The Ambiguities*, ed. Harrison Hayford, Hershel Parker, and G. Thomas Tanselle (Evanston, Ill.: Northwestern UP, 1971) を使用し、本文中での引用は括弧内に示す。

3 *The Cambridge Companion to Harriet Beecher Stowe*, ed. Cindy Weinstein (New York: Cambridge UP, 2004), p. 1.

4 Michael T. Gilmore, *American Romanticism and the Marketplace*, (Chicago: U of Chicago P, 1985). 参照。

5 中村 紘一「〈女性化〉されたトムとキリスト像 :『アンクル・トムの小屋』について」『英文学評論』55 (1988): p.83.

6 たとえば、土田知則『ポール・ド・マン = Paul de Man : 言語の不可能性、倫理の可能性』（岩波書店、2012）、pp. 53-84 を参照。

7 もちろんメッセージが伝わらないのは発信者側にも問題がある。結果的に、ピエール、その母メアリー、従兄のグレン、許嫁のルーシーを死に追いやったイザベルの場合、自分のルサンチマンをもはやコントロールできず、サナトスなる破壊と死の欲動は猖獗を極めた。戦略的に悪魔性をまとったイザベル―――本稿第 1 章で述べる―――は、皮肉にも実質的に悪魔と化してしまったのである。このようなイザベルは受信者（読者）がメッセージの倫理性を汲み取ることを阻んでしまう。

8 青木保憲『アメリカ福音派の歴史 : 聖書信仰にみるアメリカ人のアイデンティティ』（明石書店、2012）pp.56-97 及び pp.11-18 を参照。青木によれば、アメリカに於いて 1870 年代までは Evangelicals とはプロテスタント教会を総称していた、という。

9 リチャード・ホーフスタッター『アメリカの反知性主義』訳 田村哲夫（みすず書房　2003）参照。

10 エマニュエル・レヴィナス『レヴィナス・コレクション』編訳 合田正人（ちくま学芸文庫、1999）、p.401.

11 Ann Douglas, *The Feminization of American Culture* (New York: Doubleday, 1977). 参照。

12 レヴィナス *op.cit*., p.402.

13 レヴィナス *op.cit*., p. 397.

14 Sundquist, Eric J. *Home as Found: Authority and Genealogy in Nineteenth-Century American Literature* (Baltimore: Johns Hopkins UP, 1979) 参照。

15 “Bartleby” in *The Piazza Tales and Other Prose Pieces, 1839-1860*, ed. Harrison Hayford, Alma A. MacDougall, G. Thomas Tanselle (Evanston and Chicago: Northwestern UP and the Newberry Library, 1996), p.45.

16 中西佳世子 『ホーソーンのプロヴィデンス――芸術思想と長編創作の技法――』（開文社出版、2017）参照。

17 ホミ・K. バーバ 『文化の場所 : ポストコロニアリズムの位相』（法政大学出版局、2012）、p.272.

18 パゥウェルはアフリカ帰還運動の意義をニュー・ヒストリシズムの立場から解明しようとしている。Timothy Powell, *Ruthless Democracy: A Multicultural Interpretation of the American Renaissance* (Princeton: Princeton UP, 2000), pp. 103-30. 参照。

19 中西 *op.cit*., p.226.

20 齋藤忠利「ナサニエル・ホーソーンにおける黒人問題」『帝京国際文化』14 (2001-02) p.13.

21 Leslie A. Fiedler, *Love and Death in the American Novel* (Normal, Illinois: Dallkey Archive Press, 1997), p. 420.

22 バーバ、*op. cit*., p.281.

23 David R. Reynolds, *Beneath the American Renaissance: The Subversive Imagination in the Age of Emerson and Melville*, (Cambridge, MA: Harvard UP, 1988). 参照。

24 ジャック・デリダ『法の力』訳 堅田研一（法政大学出版局、1994）、p. 47.

25 Herman Melville, *Correspondence*, Vol. 14, *The Writings of Herman Melville*, ed. Lynn Horth (Evanston and Chicago: North Western UP, 1993), p. 192.

26 Perry Miller, *The New England Mind: From Colony to Province*. Cambridge, MA.: Harvard UP, 1967. 及び Sacvan Bercovitch, *The American Jeremiad* (Madison, WI: U of Wisconsin P, 1978). 参照。

SYNOPSIS

T. S. Eliot
—— Spiritual History ——

Toshiko Kurahashi

This paper aims to clarify Eliot's 'process of formation of his thought' and demonstrate how he finally attains his spiritual equilibrium, based on some psychoanalysts' theories, especially C. G. Jung's.

Main poems discussed here are *'Prufrock and Other Observations, The Waste Land*, *Ash-Wednesday* and *Four Quartets*.

For convenience, his 'spiritual history' is divided into three stages, as follows:

【I】Desiccation of Sensitivity (1888-1922)

【II】Anglo-Catholicism and Naturalization (1922-1939)

【III】Equilibrium of Sensibility (1939-1965)

SYNOPSIS

The Growth in “The Old People”

Makiko Udo

Most critics have agreed that “The Old People” by William Faulkner can be interpreted as a story portraying how the nine-year-old White boy Ike has his initiation successfully under the guidance of the Native American descendant Sam Fathers. Some scholars have disagreed with this interpretation by indicating that Sam Fathers intentionally misleads Ike to the realm forged by the distorted world vision. In the vein of the former, I analyze the work to demonstrate that Ike has shared segment of American history sympathetically with Sam Fathers. Applying Freudian theory, I examine how Ike grows to be an adult who is brave enough to enter an inscrutable world.

SYNOPSIS

A Psychoanalytical Consideration of *Almayer's Folly*: From the Viewpoint of "Repetition"

Keijiro Iida

Almayer's Folly (1895) is Joseph Conrad's debut novel. Conrad, born in Poland and naturalized in England, was a sailor before he made his mark on the English literary world. This paper aims to examine repetitions in the novel psychoanalytically and consider the theme of repetition in it.

Pointing out the importance of repetition in novels, J. Hillis Miller asserts that there are "repetitions making up the structure of the work within itself." In *Almayer's Folly*, there exist both simple repetitions and transformed repetitions.

Simple repetitions in the novel include Almayer repeatedly telling his dream of living in Europe with his daughter Nina. Nina leaves Sambir with her lover Dain, and Almayer, realizing that his dream has been destroyed, repeats that he will "never forgive" and "forget" Nina. A series of his actions on the beach just after Nina leaves Sambir with Dain can be psychoanalytically interpreted as impulses of repetition compulsion. Almayer obsessionally sticks to "not forgiving" and "forgetting" Nina until he dies.

Transformed repetitions are abundant in *Almayer's Folly*. Almayer's life in Sambir can be seen as a transformed repetition of his parents' life in Java. Almayer's dream of living richly in Europe with Nina is a transformed repetition of his mother's wish to return to her former glorious life in Amsterdam where she was a daughter of a cigar dealer. Almayer's calling Lingard "father" is another transformed repetition of a Malay girl's calling Lingard "father." Thus, it could be said that Conrad's debut novel is obsessed by the disease of repetition.

SYNOPSIS

A Psychoanalytical Approach to *A Streetcar Named Desire*

Eriko Taira

A Streetcar named Desire (1947) by Tennessee Williams is a play, composed of eleven scenes, with the primary characters being Blanche, her younger sister Stella, the latter's husband Stanley, and his colleague Mitch. The main character is Blanche.

Blanche has lost her husband Allan and her parents' mansion. She moves to her sister's home, hiding her promiscuous propensity from the others. Each character clashes with each other because of his or her own desire, best illustrated by Blanche and Stanley's own carnal desire for each other. Stanley rapes Blanche on a night when Stella is not at home. Unable to control her mind and body, Blanche begins to behave in such a deviate way that Stella and Stanley are forced to have her institutionalized in a mental hospital.

In my paper, I interpret the work, from the viewpoint of the Freudian "Object Loss Theory." By so doing, I try to clarify what factors have forced Blanche to repeat her orgiastic behavior, and why she has become unable to control herself.

SYNOPSIS

A Jungian Approach to D. H. Lawrence's *Women in Love* (II)
—— Marriage in the Process of Salvation and Individuation ——

Minoru Morioka

In *Women in Love* by David Herbert Lawrence (1885—1930), the two Brangwen sisters Gudrun and Ursula appear. The former's partner, Gerald Crich, is the hereditary owner of a coal mine. The latter's partner, Rupert Birkin, is a School Inspector. From the view point of Jungian psychology, the complex relationship of these two couples portrays a picture of the "Ego" alienated from the "Self." The novel also alludes to the possible homosexual relationship between Rupert and Gerald.

In this paper, I consider the process of success or failure that these four characters undergo in their respective quests for "self-realization," proving the assumption of the Jungian "Individuation Theory." To understand the two male-female couples on a psychological level, this paper needs to fully explain the concept of "anima" and "animus," or the Jungian paired archetypes. This paper deals with chapters 4 to 8, and the rest will be dealt with in my next paper.

SYNOPSIS

Melville's *Pierre*: Resisting Evangelicalism

Eitetsu Sasaki

Luckily or unluckily for Isabel in *Pierre*, Puritanism was replaced by what Lévinas describes as love, or sentimental love in the context of the mid-nineteenth century feminized culture of Evangelical society. The love in question, Lévinas holds, was promoted to the superlative level of religion. Isabel accuses her half-brother Pierre and upper-middle-class society for their inclination to maintain their exclusive solidarity. Through the name of Pierre, Melville strategically evokes St. Peter, the disciple who is accused, at Antioch, of his reluctance in accepting gentile Christians, by St. Paul. Depicting Isabel in the similitude of St. Paul, Melville strategically allows her to rebuke her half-brother.

Isabel successfully reveals, in her letter to Pierre, her status as an excluded and wounded third party who is forced to permit herself to listen to "the amorous dialogue" of "the closed society." This letter of hers appears to be necessarily and sufficiently sentimental and evangelical enough to win, theoretically, the readership of contemporary middle-class women.

The reality, however, betrayed Isabel and Melville as well. Their ethical message that the racial and class-wise other being Isabel be accepted, was not successfully delivered to contemporary readers. Freudian group psychology and Lacanian psychology explain some of the reasons for this. *Pierre* made the reading public fearful of the potential threat by Isabel, the racial and class-wise other being, the threat that the dauntless Isabel would have a potential to shake the

foundation of the evangelical patriarchy.

Thus, Melville lost his popularity after publishing *Pierre*, with no one to recognize him in the nineteenth-century Evangelical American society.

執筆者紹介

学術論文

（イギリス文学）

倉橋　淑子　　元　昭和女子大学　教授
サイコアナリティカル英文学会　副会長･常任理事･編集委員

（アメリカ文学）

有働　牧子　　熊本県立大学　非常勤講師
サイコアナリティカル英文学会　運営委員・事務局長

（イギリス文学）

飯田啓治朗　　日本大学　文理学部　教授
サイコアナリティカル英文学会　編集委員

（アメリカ文学）

平　恵理子　　元　都立高等学校　教諭

（イギリス文学）

森岡　　稔　　元　星城高等学校　教諭
名城大学　非常勤講師
サイコアナリティカル英文学会　運営委員

（アメリカ文学）

佐々木英哲　　桃山学院大学　国際教養学部　教授
サイコアナリティカル英文学会　理事･編集委員･運営委員

サイコアナリティカル英文学協会
［1974（昭和49）年7月20日創立］

サイコアナリティカル英文学会
［1983（昭和58）年4月1日改称］

初代名誉会長　大槻　憲二
第２代名誉会長（初代会長）　今田　準造（創立者）

１．サイコアナリティカル英文学会

〒752－0997　山口県下関市前田2丁目27－43
会　　長：小園　敏幸　　℡　090－8297－0729
E-mail: kozono.toshiyuki@silk.plala.or.jp
事務局長：有働　牧子　　℡　080－1733－1554
E-mail: udou@pu-kumamoto.ac.jp
ホームページ：psell.sakura.ne.jp

２．役員［任期3年：2017（平成29）年4月1日～2020年3月31日］

顧　　問：林　　暁雄
会　　長：小園　敏幸
副 会 長：木村　保司、倉橋　淑子
常任理事：金丸　千雪、木村　保司、倉橋　淑子、小園　敏幸、鈴木　　孝、湯谷　和女、横田　和憲
理　　事：石田美佐江、伊藤　太郎、金丸　千雪、木村　保司、倉橋　淑子、小園　敏幸、佐々木英哲、鈴木　　孝、藤見　直子、町田　哲司、湯谷　和女、横田　和憲
会計監査：藤見　直子、松尾かな子
運営委員：有吉登志子、石田美佐江、有働　牧子、上滝　圭介、佐々木英哲、鈴木　　孝、中尾香代子、藤見　直子、松尾かな子、森岡　　稔
論叢編集委員：飯田啓治朗、倉橋　淑子、小園　敏幸（編集長）、佐々木英哲、松山　博樹
事務局長：有働　牧子

サイコアナリティカル英文学会会則

第１節　　総　則

第１条　本会は、サイコアナリティカル英文学会という。

第２条　本会は、本部を会長の本務校又は自宅に置く。
事務局については、別途理事会において決定する。

第２節　　目的と事業

第３条　本会は、精神分析学の立場から、英米の言語及び文学を研究することを目的とする。

第４条　本会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

１．学術研究会、講演会

２．会誌の発行

３．その他、本会の目的を達成するために必要な事業

第３節　　会　員

第５条　本会の会員は、次の通りとする。

１．本邦大学課程またはそれに準ずる教育をうけた者及び相当教育機関の在籍者で、本会の目的に賛同する者を会員とする。会員は維持会員および一般会員で構成する。維持会員は会員の中の有志とする。

２．本会に功績のあった者で会長が役員会に諮って推挙する者を名誉会員または賛助会員とする。

第６条　本会に入会を希望する者は、所定の申込書を事務局に提出し、理事会の承認を得なければならない。

第７条　会員は、本会の開催する学術研究会において研究発表をすることができる。

第８条　会員は所定の会費を納入しなければならない。
名誉会員は会費を納入することを要しない。

第９条　年会費は維持会員1万円（内、3,000円は寄付）、一般会員7,000円。
但し、大学院生は3,500円とする。

第10条　退会を希望する者は、退会願いを事務局に提出し、理事会の承認を得なければならない。

第４節　　運　営

第11条　本会には役員として会長1名、副会長2名、会計監査2名、常任理事、理事及び運営委員、論叢編集委員若干名を置く。
尚、名誉会長及び顧問を置くことができる。

第12条　（理事）　理事は会員の推挙により選出する。

第13条　（常任理事）　常任理事は理事の中から推挙により選出する。

第14条　（会長）　会長は常任理事の中から推挙により選出する。

第15条　（副会長）　副会長は会長が常任理事の中から選任する。

第16条　（運営委員）　運営委員は会員の中から推挙により選出する。

第17条　（会計監査）　会計監査は会員の中から推挙により選出する。但し、2名のうち少なくとも1名は理事を兼ねることができない。

第18条　（『論叢』編集委員）　『論叢』編集委員は会員の中から推挙により選出する。

第19条　（役員会）　会長は必要に応じ役員会を招集する。

第20条　（理事会）　会長は原則として年１回理事会を招集する。
会長は前項理事会に必要に応じ運営委員の出席を求めることができる。

第21条　（常任理事会）　会長は随時常任理事会を招集することができる。

会長は前項常任理事会に必要に応じ運営委員の出席を求めることができる。

常任理事会の決議事項は理事会の議を経て効力を発するものとする。

第22条　役員の任期は3年とし、重任を妨げない。

第23条　本会の経費は年会費、寄付金その他を以って賄う。

第24条　本会は年1回総会を開き、役員の決定、年会費の決定、事務会計の報告等を行う。総会に続いて、学術研究会を開催し、会員の研究業績の発表及び討議を行う。

第25条　本会則の変更は、理事会の審議を経て総会に提出され、総会出席者の3分の2以上の賛成を得なければならない。

補則　本会則は昭和49年7月20日より施行する。

昭和49年12月 1 日　第 1 回大会　改正
昭和51年12月 5 日　第 3 回大会　改正
昭和52年12月 4 日　第 4 回大会　改正
昭和53年12月 3 日　第 5 回大会　改正
昭和54年12月 1 日　第 6 回大会　改正
昭和55年12月 6 日　第 7 回大会　改正
昭和57年12月 4 日　第 9 回大会　改正
平成 3 年11月 9 日　第18回大会　改正
平成 8 年10月19日　第23回大会　改正
平成 9 年10月 4 日　第24回大会　改正
平成12年 9 月30日　第27回大会　改正
平成14年10月 5 日　第29回大会　改正
平成16年10月 5 日　第31回大会　改正
平成23年10月22日　第38回大会　改正

平成27年10月3日　第42回大会　改正

付記

この規程の他に、名誉会長・顧問・名誉会員に関する内規を別に定める。

『サイコアナリティカル英文学論叢』
投　稿　規　程

１．投稿論文は未発表のものであること。ただし、口頭発表はその旨を明記すれば可。

２．内容は精神分析学の立場から、英米の言語及び文学を研究した論文であること。

３．応募者は本学会会員であること。

４．原稿（論文及び英文シノプシス､書評）は全て､パーソナルコンピューターによること。審査用として、プリントアウトしたものを４部（コピー可）提出し、英文によるシノプシス（200 語程度）４部を添付すること。（書評の場合には、英文シノプシスは不要である。）

論文の書き方の大枠については、次の通りである。

⑴　本文の後には、Notes の項目のみ設ける。Bibliography や Works Cited の項目は設けない。

⑵「注（註）」は Notes とする。

⑶　短い引用文（Two sentences 以下）の場合は、Double quotation marks（“　　”）でくくって、地の文の中に入れる。その出典が地の文の中に明示されていない場合には、closing mark（”）の右上肩に番号を打って、Notes の中で出典を明示する。

⑷　長い引用文は、地の文と区別し、indent し、この quotation と地の文との space は double space とする。

⑸　Notes には、次の略語を使用する。

ibid. . . . . .　同一著者の同一著作に連続して言及する時に用いる。

op. cit. . . .　著者 (surname) と page number は必ず示す。

loc. cit. . . .　同一著書の同一頁から連続して引用する場合にのみ用いる。

(6) シノプシスには英文のタイトルとローマ字による執筆者の氏名を記入すること。

Notes の具体例は、次の 1 － 12 を参考にしてください。

Notes

1. Sherwood Anderson, *Poor White* (New York: B. W. Huebsch, 1920), p. 12.
   以下、同書からの引用は全てページ数を括弧に入れて本文中に記す。
2. William James, *The Principles of Psychology* (New York: Henry Holt, 1890), p. 190.
3. *Loc. cit.*
4. *Ibid*., p. 58.
5. Irving Howe, *Sherwood Anderson: A Biographical and Critical Study* (California: Stanford University Press, 1966), p. 124.
6. James, *op. cit*., pp. 56 － 8. 参照。
7. Trigant Burrow, *A Search for Man's Sanity* (New York: Oxford University Press, 1985), p. 561.
8. James, *op. cit*., p. 205.
9. Howe, *op. cit*., pp. 250 － 62. 参照。
10. *Ibid*., p. 38.
11. Burrow, *loc. cit.*
12. 村上仁『異常心理学』（東京：岩波書店、1952）、pp. 56 － 7. 参照。

（但し、論文で扱う、所謂 Text に相当するものについては、例えば上記の Notes 1. のように「以下、同書からの引用は全てページ数を括弧に入れて本文中に記す」としても可。但し、その場合、例えば 15 ページであれば、（15）ではなく（p. 15）と表記すること。

あるいは、Text であっても他の引用と同様の表記の仕方でも可。）

５．原稿の採否および掲載の時期は編集委員会が決定する。
６．執筆者は編集委員から採用の連絡があり次第、電子メールによる添付ファイルにて原稿を事務局に送付すること。（またはフロッピーディスク、メモリースティック或いはＣＤ等による提出も可。）
７．採用論文の執筆者は論叢印刷費用の一部を負担する。詳細は内規による。
８．原稿の締め切りは９月末日とする（厳守のこと）。
９．論叢発行の際に、執筆者には抜刷 30 部が送られる。

付記
学会の依頼による執筆の場合は、この規程を適用しない。
この規程の他に、『サイコアナリティカル英文学論叢』に関する内規を別に定める。

サイコアナリティカル英文学会の図書出版に関する規程

本学会は「著作が精神分析学の立場から英米の言語や文学を研究している」場合に、執筆者の申し出により可能な限りのサポートをする。（執筆者は本学会会員であること。）

1．編集委員が著作の査読を行い、必要に応じて助言し、著作内容の一層の充実のために協力する。
2．印刷会社については原則として執筆者が直接交渉するものとするが要望があれば、紹介等の便宜をはかる。
3．完成本については、学会に献本するものとする。

編 集 後 記

小　園　敏　幸

サイコアナリティカル英文学会は、精神分析学の立場から、英米の言語及び文学を研究することを目的として、1974（昭和 49）年 7 月 20 日に創設され、この 7 月で創立 45 周年を迎えます。本学会の機関誌は、創立当初は会員向けに『セル』という news letter を発行していたが、その数年後から、現在の『サイコアナリティカル英文学論叢』に形を変えて日本全国の大学・短大の附属図書館、新聞社、英米の有数の大学附属図書館、英米文学関係者等に寄贈しております。

精神分析は Sigmund Freud (1856-1939) によって創始された学問であり、今日では心理学、医学、教育学ばかりでなく、文学、芸術、宗教、司法、政治、その他あらゆる方面の研究分野において応用されていることは周知の通りです。

戦後日本は他に類を見ない繁栄を遂げた一方、人間性や他者を思いやる心は益々稀薄になっている気がしてなりません。こうしたなか、21 世紀を迎え、物質文明の発展とともに我々の生活における利便性は益々増していますが、暖衣飽食を以て「豊か」とは言えても、必ずしもこれが「真の幸福」であるとは限らないのではないでしょうか。

あるいは、たとえ金銭的に貧しくとも、心が豊かであれば幸せといえるかもしれません。この点において、文学は人間の心を豊かにし、イマジネーションを育んでくれます。そして何より、他者を思いやる優しさといった、「人間性の回復」にとっては欠かせない存在であるものと考えられます。

よく知られているように、文学批評の方法としては、たとえば、美学的批評、倫理的批評、社会学的批評、精神分析学的批評、心理学的批評、原

型批評、新批評等が挙げられますが、これらの何れの批評方法を駆使しても文学作品が内包する意味の多元性を遺憾なく探究することは不可能です。なぜならば、その何れの方法も一面的解釈に過ぎないからです。精神分析学的批評もこの例外ではなく、他の批評方法と同様、そこには自ずと限界があります。しかしながら、精神分析学的理論を援用して考察することが科学的かつ有効な文学研究方法であることもまた事実です。

本学会は、こうした長年に亘る精神分析学的文学研究を通じた豊かな人間性の獲得と真の幸福の享受という社会的付託が評価され、2008（平成21）年には日本学術会議協力学術研究団体としての認定を受けるに至りました。

さて、今年度大会（第45回〔平成30年度〕大会）は、2018年11月10日（土）に、関門海峡を一望できる山口県下関市の「海峡ビューしものせき」（国民宿舎）において開催されました。大会の前日ははっきりしない空模様で心配しておりましたが、大会当日は小春日和の好天にも恵まれ、記念すべき第45回大会となりました。

大会での研究発表者は、平恵理子先生、野村宗央先生、有働牧子先生、森岡稔先生、佐々木英哲先生の5名（以上、発表順）で、イギリス文学が2名、アメリカ文学が3名でした。何れも精神分析学の立場からそれぞれの文学に適切な術語を援用・駆使し、文学作品の分析と技巧を追究した、重厚かつ奥深い研究発表であったと思います。

来年度大会（第46回）は、日本大学法学部で開催される予定です。第41回大会が2014（平成26）年10月11日（土）に日本大学文理学部で開催されて以来、5年ぶりの東京での開催となります。

現在、校正中の『論叢』第39号は予定通り2019年3月に発行出来そうです。

編集委員 5 名（飯田啓治朗先生、倉橋淑子先生、佐々木英哲先生、松山博樹先生、小園敏幸）が全ての投稿論文に目を通すことを前提に、文学作品が内包する意味を可能な限り理解しながら執筆者の意図を汲み取りつつ、膨大な時間をかけて綿密に査読しました。場合によっては各編集委員から出されたコメントについては最大公約数的に集約し、執筆者に提言をしたことを付記します。

『論叢』第 39 号の掲載論文は最終的に 6 本とし、その掲載順序には特に意図はありませんが、イギリス文学とアメリカ文学を交互に、掲載いたしました。何れの論文も、「人間の心理の広大な部分が無意識界であり、この広大無辺な無意識界から人間は絶大な支配を受けているが故に、人間のこの無意識界に、人生の多くの真実が存在する」という精神分析学の前提に立脚しつつ、解釈・批評の行われた独創的かつ読み応えのある学術論文です。

是非とも読者のご高見を承りたく、宜しくお願い申し上げます。

最後に、長年に亘り、本学会の機関誌『サイコアナリティカル英文学論叢』の印刷・製本を快く引き受けてくださっている啓文社に、また企画の段階からいろいろお世話になった同社の相良徹氏および有働牧子氏に、衷心より感謝を申し上げます。

2019（平成 31）年 2 月吉日

サイコアナリティカル英文学論叢
――英語・英米文学の精神分析学的研究――　（第 39 号）

発　行　者　　サイコアナリティカル英文学会
会長　小園　敏幸
印　刷　所　　㈱啓文社　〒861-3102　熊本県上益城郡嘉島町下六嘉1765
TEL 096(368)8100　　FAX 096(369)2677
発　行　所　　サイコアナリティカル英文学会
〒752-0997　山口県下関市前田2丁目27-43
会　　長　小園　敏幸　TEL 090-8297-0729
E-mail：kozono.toshiyuki@silk.plala.or.jp
事務局長　有働　牧子　TEL 080-1733-1554
E-mail：udou@pu-kumamoto.ac.jp
ホームページ：psell.sakura.ne.jp
郵便局の青色の「払込取扱票」について
口座番号：０１５００－９－２８９４９
加入者名：サイコアナリティカル英文学会

2019（平成 31）年 3 月 20 日発行